

ISSN 1346-9355

オアシス地域研究会報



第4巻 第1号

2004年6月

オアシスプロジェクト研究会

総合地球環境学研究所

ISSN 1346-9355

オアシス地域研究会報



第4巻 第1号

2004年6月

オアシスプロジェクト研究会

総合地球環境学研究所

はじめに

小長谷有紀（国立民族学博物館）

総合地球環境学研究所の実施する研究プロジェクト『水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷』（通称「オアシスプロジェクト」）は、中国青海省と甘粛省にまたがる氷河に源を発する黒河の流域一帯を対象として、過去 2000 年にわたる自然環境の歴史を復元する学際的な研究である。過去を復元するにあたっては、氷河や湖底体積物、年輪などを指標としてもちいて自然史を明らかにする諸メンバーのほかに、史料をもちいて取り組む文献学のメンバーが多くかかわっている。

史料に記された人間活動をより実態的に把握するためには、現在の人間活動を知っておく必要があるだろう。また、近 50 年の急激な変化は、2000 年の長期的変化に匹敵するほどの意味をもっている、と想定することもできよう。現在まさに進行中の変容過程を、過去の類推のためにそのまま応用するか否かはともかく、何にもまして現状分析はきわめて重要である。

そこで、オアシスプロジェクトにおいては、現在の水循環を明らかにするグループとともに、文化人類学および社会学などによる、現代における水資源変動に対する人びとの対応を明らかにするためのグループが編成された。日本側の研究者は複数の研究機関に分散しており、また博士課程の大学院生も積極的に加わっている。そして、中国側からは主として中国社会科学院民族研究所の研究者たちが関わっている。本報告書は、プロジェクトの初年度および 2 年度の 2 年間にわたって実施された、上記の現代社会分析グループの日本側メンバーによる調査の中間報告書である。

初年度すなわち 2002 年度においては、黒河流域一帯を上流、中流、下流のおよそ 3 つに区分して担当者を定め、それぞれの地域における予備調査をおこなった。その結果、それぞれの流域における問題点が異なることが明らかになるとともに、その違いを反映して、研究の視点が分散するという、地域分担方式の問題点も明らかとなった。

それゆえ、2 年度すなわち 2003 年度においては、なるべく別のグループによる調査に同行して初年度と異なる地域にも足を伸ばすなどの工夫をした。また、各自の関心事に関する調査を尊重すると同時に、一定の聞き取り事項を指定し、報告書についても一定の規格をもうけた。ただし、当該年度より新規に参加したメンバーに対しては、まったく異なる視点からの研究を委託する形で調査を実施した。

本報告書は、今後の調査研究の方向性をさだめるうえで、またプロジェクト全体への貢献をはかるうえで、重要な思考材料となるであろう。

目 次

はじめに 小長谷有紀

第 I 部 2002 年度予備調査報告

中国内蒙古自治区アラシャン盟エチナ旗における自然資源の利用 小長谷有紀.....	1
黒河上流域民族学調査報告 尾崎孝弘.....	7
肅南ヨグル(裕固)族自治県明花区(黒河中流域)予備調査 マイリーサ.....	19
都市化過程における民族文化と自然環境の変化 楊 海英.....	25

第 II 部 2003 年度調査報告

黒河上流域の調査報告 中村知子	39
黒河中流地域における人間活動と水利用-肅南ヨグル(裕固)族自治県明花区の事例 マイリーサ	53
黒河下流域の調査報告—自然・社会環境変動下における現代牧畜民の適応戦略— 児玉香菜子	73

第 III 部 2003 年度予備調査報告

黒河上流域の人と自然—青海省チレン県・甘肅省肅南県での予備調査報告— シンジルト	111
---	-----

中国内蒙古自治区アラシャン盟エチナ旗における自然資源の利用

小長谷有紀（国立民族学博物館）

1. 調査対象域の概要

総合地球環境学研究所における研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変動」の文化人類学班として、2002年6月、中国内蒙古自治区アラシャン盟エチナ旗で予備調査をおこなった。その調査報告として、当該地域における自然資源の利用状況、その問題点および今後の課題を提示する。

調査地域は、祁連山から流れ出る黒河の下流にあたる。もともと湧水線が幾筋にも分かれていたため、数メートルもの葦に覆われた沼沢地であり、いわば<砂漠の中の水郷>であった。たとえば、S.Hedinは「この世の天国」（世界探検全集『ゴビ砂漠探検記』）と表現している。

そうした地形的特徴を有していたために、北に位置するモンゴル高原でひとたび社会変動が生ずると、つねに南下を招く地域であったし、また、南北間の緊張が高まれば、ただちに軍事要塞化する地域でもあった。20世紀になると、日本軍がこの地に1930年代に特務機関を設置した。戦後、1950年代になると南部に軍事基地が建設され、その結果、追い出された住民も含む一般人の居留地として、北部では農地が開拓された。

すなわち、漢代の屯田事業と類似の現象が20世紀においても現れた地域であり、その意味では<現代の居延澤>であると言える。

2. モンゴル牧民による自然環境の認識

モンゴル牧民に対する聞き取り調査によって、彼ら自身の自然環境に対する認識を抽出することができる。今回の予備調査では、基本的な構造的把握として「民俗方位」と「地域区分」とが明らかになった。

2-1. 民俗方位

モンゴル族は一般に、北西風を避けるためにこれを背に受けて、南東方向にドアを向けてテントを立てる。そして、南東をオムノomnoすなわち「前（南）」と見立て、北西をホイトkhoitすなわち「北（後）」と見立てる。ただし、エチナ旗においては、そうした民俗方位から約45度ずれている。

2-1-1. 住宅の配置

エチナ旗に限らず、中国青海省あるいはモンゴル国においても、トルグート族は、南東よりもむしろ真東を前と見なす。300年前に西方から帰還した移住の歴史を反映しているのではないかと思われる。

ただし、エチナ旗においては、一年中、西風が卓越しているため、卓越風を避けるという意味でも東向きはまったく合理的である。

2-1-2. 川との関係性

現地の人びとは、地図上の東河（エチナ川）をオムノ・ゴルomno golあるいはオルト・ゴルurt golすなわち「南川」とよび、地図上の西河（ムレン川）をホイト・ゴルkhoit golすなわち「北川」とよぶ。したがって、住宅の配置に反映された民俗方位は、川を軸にした方位とも一致している。

ムレンmurenというモンゴル語は一般に「大河」を意味する。一方で、細いなどを意味するナリンnarinという名の川もある。そもそも複数の川筋があり、下流域ほど枝分かれをしていた。

下流はドルdorすなわち「下」とよび、上流はデーシdeeshすなわち「上」とよぶ。これは、民俗方位観に

において、まず南面して、右を上位と見立て、左を下位と見立てる感覚とも一致する。

このように、当該地域における民俗方位は、「西から帰還したという集団の歴史的記憶」と現在の「卓越風の回避という実利」と「川筋という認知上の大きな指標」と「上下感覚」とが矛盾無くおさまるようになっている。

2-2. 類型的表現

現地の人びとが自然環境についてモンゴル語で言及するとき、類別的な表現が明示的に利用される。

予備調査は、ちょうど夏営地への移動が始まる時期であり、そのために不在になった家について、「ゴビに行った」「ゴビに出た」「コルクolに行った」という表現が常時もちいられた。夏営地に滞在しているために、直接見ることのできない冬営地については、「木の中にある」「タマリスクの中にある」といった表現がしばしばもちいられた。また、近年、定住を開始した場所については「ゴビのデンジdenji」「川のデンジdenji」あるいは「黄色（モンゴル語でシャルshar）」を選んだなどという表現がみうけられた。

また、放牧方法については「ゴビの草と川の草を均等に食べさせるのが良い」という考え方が強い。

こうした日常的表現に共通しているのは、「川（筋）」と「ゴビ」との対比である。一方の「川（筋）」には、胡楊トウライ tuurai や沙棗ジグド jigd などの樹木が連なっており、したがって、「木の中」という表現は、川筋と同義となる。他方、「ゴビ」とはまばらな植生の見られる砂漠性ステップを意味するが、その中にはコルクolすなわち「足」とよばれる葦原がある。これは、かつての河川の跡である。また、デンジ denji とは、これら川筋とゴビとのちょうど境界上に位置する台地である。

2-3. 地名表現

地名表現からも自然環境に関する認識をうかがうことができる。『額済納旗誌』に「一般居民点」として掲載されている287の地名のおおよその傾向は以下のような特徴がみられる。

多様な地名表現のなかでも、その35.3%が水に関する表現で、とりわけ下流域の川の上流・中流・下流を区別した表現が多い。

続いて、25.9%が植生に関する表現であり、とりわけ胡楊などの樹木が指標とされやすい。足（コルクol）とよばれる場所は、もとオアシスであったところであり、地下水位が高いため、砂漠の中の居住可能地点として利用されている。

地形に関する表現は、他に比べて言及される内容が分散している。ポーログ boorog とよばれる砂丘をはじめ、マウンドに関する多様な表現が用意されているといえよう。

また、人工物に関する表現のなかでは、チョンジ chonji とよばれる「のろし台」の遺跡を指標にしているものも多く、本対象地域ならではの特徴となっている。

3. 地域史の概要

当該地域における過去半世紀の歴史の変容については、すでに中村の報告がある[中村・尾崎2002]。それにもとづいてまとめると、変容は、「人口増加」「農耕開拓」「軍事基地の建設」という3点に絞ることができよう。さらに、今後の研究に資するために、社会現象に注目して、過去半世紀を時代区分しておく。

3-1. 人口増加

1949年に2000人程度だった旗内の人口は、20世紀後半の50年間に約8倍に増加した。ただし、現在の人口の60%余は漢族であり、また60%余が旗中心地に集中している。

すなわち、都市的中心地が建設され、もつばら（南部や西部から）漢族が移民してきたことによる人口増加が著しい。

3-2. 農耕開拓

1949年までほとんど存在していなかった農地は、1980年代にピークを迎え、現在20万ムーにとどまっている。そのうちの15万ムーがソゴノールソムにある。農耕開拓は水利事業をともなっており、旗内における水門と用水路の建設のほかに、旗外における水利事業の影響を著しく受けた。

たとえば、源流の一つであった北大河が断たれたのは1970年である。

また、1979年には甘粛省から内蒙古自治区に所属を移管され、その後に放水量が激減したと言われる。

3-3. 軍事基地の建設

解放軍は、1958年に旗南部に属するバヤンボグド郡の全住民を強制移住させて、駐屯した。やがて中ソ冷戦が始まると、基地としての重要性が高まり、60年代に旗内にいくつもの築山が建設され、住民は、遠隔地もしくは農耕開拓地に「ただで飯を食わせてやる」などと言われて、強制移住させられた。

3-4. 時代区分

3-4-1. 中華人民共和国の成立1949年

「解放」以降、多くの牧民にとって、担当していた家畜の所有者が「寺」や「富裕者」から「軍」に変わった。つまり、＜動産の社会的再配分＞がおこなわれたのである。

3-4-2. 人民公社の成立1958年

「大鍋を食らう」時代の到来は、動産の社会的再配分にとどまらず、＜不動産の社会的再配分＞すなわち、行政区域の確定と農地の指定がおこなわれた。また、隊中心地への集住が農地開拓とともに顕著にみられた。

3-4-3. 草畜双承制の実施1983年

文化大革命の十年動乱期が終わり、人民公社が解体して生産請負制が始まると、当該地域では比較的初期に家畜と草原とが同時に配分された。すなわち＜動産と不動産の社会的再配分＞がおこなわれた、と言えよう。今度は、隊中心地が空洞化し、牧民は分散居住しはじめた。

3-4-4. 生態移民の開始2001年

北京での砂嵐がひどくなり、その元凶としての砂漠化を防止するために、黒河流域は重視される。上流域での森林保護、中流域での節水作物推進とともに、下流域にあたる当該地域では、胡楊林を守るために1500人の強制移住が計画されており、3年間で実施するよう中央政府から義務づけられている。

この新しい＜不動産の社会的再配分＞において移住先として提示されているのは、遠隔地およびかつての隊中心地である。したがって、人びとにとってはまさに強制的集住時代の再来と感じられている。

以上のように、中国においては、動産ならびに不動産という二種類の生産資源が、つねにその時々脈絡で社会的に再配分されてきた。いままた、ふたたび、ただし、今回は生態環境を保護するという脈絡で、

牧民の生活圏が奪われようとしている。

4. 自然資源の利用史—季節移動を中心に

上述のような社会変容のもとで、自然資源をめぐる利用も変わらざるを得なかった。予備調査では、おおよその傾向をつかむことができた。先述の時代区分に即して、季節移動のパターンの変化として、以下のようにまとめることができる。

4-1. 人民公社成立以前（～ 1958）

基本的に、植生に恵まれていた時代には、アオシス域内において数km程度の距離で季節移動をおこなっていたらしい。

秋になると胡楊の落葉を集めて越冬資料とした。沙棗の実人は人用かつ畜用の食料となった。このため、秋から冬にかけて川筋にとどまることが多い。春の出産期を終えて夏になると、風通しの良いゴビへ出る。ゴビの植生は、雨が降りさえすれば緑になるので、雨を追うように簡易移動（オトルotor）をおこなう。ゴビに到着すると、まず井戸の底にある泥炭[lai]を掃除して継続的に利用する。それが不可能な場合には、川のそばに出て、穴掘[tataar]をして柄杓で水をすくい、丸い水筒（タシマグtasimag）に入れてラクダで運ぶ。すなわち、「夏にゴビ、冬に川筋」という移動パターンの原則があった。

ラクダや馬の群れとしての放牧は、アオシス外部でもおこなわれた。アオシス外へは、移動力の高い人（大型家畜を所有する富裕な人）が移動した。

ムレン河の方がエチナ川よりも水量豊富で、沙棗の回廊林もあった。川には四季を通じて水があり、川の魚を取って帰ると、両親に「仏をつかまえるなんて罰当たりめ。すぐ返してこい」と怒られた。

4-2. 人民公社の時代（1958～1983）

もっぱら川筋で農地開拓がおこなわれた。このため、作付けする春になると早々に畜群はゴビへ追い出され、収穫が終わった頃に家畜を畑に入れることが許された。すなわち、「夏にゴビ、冬に川筋」という基本的な季節移動のパターンが、農地開拓によって強化された。

湖岸や川岸の葦（ホルスkhuls）は、大量に伐採されて都市に運ばれ、建築材（屋根葺）となり、ゴビの灌木ザグzagは、大量に伐採されて燃料として消費された。

人民公社によっては、馬や牛の群れを湖岸で放牧していた。

とくにムレン河の水量が激減し、沙棗林がなくなり、ガシオンノールが消えた。一方、エチナ川沿いに沙棗林が植林された。

4-3. 生産請負制の時代（1983～）

ラクダの放牧は、誰もがどこでもできるわけではないので、草地と家畜が配分された時点でラクダの放棄が進んだ。また、移動手段的喪失とともに「定住化」も進んだ。

そもそも、木の中にある冬営地にはオープンスペースがない。そこで、黄色（シャルshar）とかデンジd enjiなどとよばれる平らで開けたゴビが定住地としてもっぱら好まれた。また、胡楊林を保護するために張られた柵の中では原則として放牧できないこともあって、ゴビの方に固定家屋を建設することが奨励された。ただし、川の水を灌漑に利用する畑がある場合には、畑のある冬営地を定住拠点とする場合もある。

草地の劣化が著しいために、もはや飼料作物に頼らざるを得ない「定着牧畜」に移行しつつある。農牧

局からは「舎飼い」が奨励されているものの、牧民のあいだでは、定住しても草地での放牧が重視されている。また、ラクダについては、特定戸に委託してゴビのなかの葦原や遠隔地で放牧するという方法も採用されている。

エチナ川の胡楊もしだいに枯れてきて、1992年にソゴノールも完全に消えた。ムレン河跡付近ではすでに砂漠化が進行している。

5. <オアシス遊牧>の特徴とその変化

当該地域でおこなわれていた、オアシスの空間内部を草地として利用する遊牧を<オアシス遊牧>とよぶことにする。これは、西アジアで一般によく見られるような、オアシス都市と経営上結びついている、オアシス域外でおこなわれる遊牧とは異なっている。そうした商業的遊牧活動を、オアシス内部にとどめた、より自給的完結性の強い遊牧ということができる。

この<オアシス遊牧>は、その恵まれた自然環境ゆえに、基本的にオアシス内部で完結することも不可能ではないほどの季節移動をとまなう放牧であった。しかし、人民公社時代にオアシス域の農耕開発が進むにしたがって、オアシス外のゴビと季節的に組み合わせて利用する遊牧へと移行した。

さらに、現在では「生態移民」とよばれる政策の下で、大半の牧民がオアシス域外（砒素中毒が伝えられる馬鬃山、フッ素中毒で知られているグルネイ、狼害のひどいホンゴル山）に放逐されるか、もしくは農耕地に定住して飼料作物で家畜を飼養する「定住牧畜」かを迫られている。<ヤギより狼が大事、人より胡楊が大事>の現代に、彼らに許された選択肢はいずれも厳しい。

6. <20世紀の居延澤開発>と<21世紀の黒城化>

軍事拠点という地理的特質は20世紀においても一定の価値をもち、したがって軍事と密接にむすびつきながら当該地域の開発が進められてきた。その意味でまさに<現代の居延澤>がごとき開発であったと言えよう。しかし、中流域で水が膨大に消費され、河川流量が管理されて激減している現在では、河川が消失し、居住が放棄され、砂漠化が進行している。現在、生じつつある廃墟群は、まさに未来の遺跡である。その意味で<現代の黒城化>とよんでも過言ではあるまい。深井戸の開発は、その進行を遅らせているにすぎないと思われる。

そもそも、氷河の融解によって季節的に洪水をもたらしてきた2大河川（黒河と北大河）は、狭隘部を抜けて当該地域に入ると左右に広がった扇状の緑地を形成していたと推測される。この扇状オアシス域のうち最東部に位置する小川は、流れが弱くて制御しやすかったからこそ「弱水」とよばれたのであろう。2000余年前から開拓しえた「弱水」は、それゆえに上流での水利事業や農地開発の結果、消失しやすかったと推測される。現在ではコルとよばれる葦原がかつてのオアシスの名残をとどめるばかりで、広がった緑の扇は、河西回廊の開発とともに狭いものになってゆき、現在もさらに狭まりつつある。

黒城および広義の居延澤の終焉については、いまのところ伝説を頼りに語られているにとどまり、文献と整合性のある歴史的事実は明らかになっていないようである。当該下流域の食糧難などで示される困窮化と、中流域での開拓史とを呼応させて史料を読むとき、明らかになることは多いにちがいない。

2000年の歴史を再構築する本プロジェクトにおいて、文化人類学班の担当するのはわずか50年にすぎない。にもかかわらず、その50年から全貌をこのように推測することができるのは、この50年のインパクトの大きさを示している。と同時に、予備調査の役割が果たされたことを示しているだろう。

予備調査では、有力なインフォーマントを得て、じっくりと老人の話を聞くことができなかった。この

ため、詳細な資源利用の再現は今後にゆだねたい。ただし、文化人類学班全体として、各地に分散して従事する研究を統合的にするためには、統一的な内容に関する聞き込みを必要とするであろう。

黒河上流域民族学調査報告

尾崎孝宏（鹿児島大学）

◆ はじめに：調査の位置付けなど

本調査は、総合地球環境学研究所が推進している研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷」における、黒河上流部における初の現地調査である。参加者は日本側より尾崎孝宏（鹿児島大学）、中国側より鐘進文（中央民族大学）が参加し、蘭州以遠の調査地においてはこの2名が運転手1名を雇い、中国製ジープ1台に搭乗して各地を巡った。調査期間は後で詳述するように、2002年8月の約1ヶ月間である。

今回の調査地は甘粛省肅南ユグ族自治州とその周辺地域であり、酒泉市・張掖市・青海省祁連山の領域を含む。宿泊地は、調査開始以前にはテント泊も想定していたが、予想以上にルート近辺の人口が多かったことと寒冷であったことにより、結果的に全て固定建築物（ホテルもしくはインフォーマント宅）への宿泊となった。なお、調査に使用した言語は主として漢語であり、筆者の都合で現地方言から標準漢語への通訳が必要な際には随時、鐘が行った。唯一、平山湖モンゴル族郷では筆者がモンゴル語による聞き取りを行った。

調査者は2名とも、民族学（文化人類学）を専門とするため、調査内容は主に当該分野の専門に関わる領域であった。ただし、今回の調査地域については、昨年度の予備調査において踏査されなかった地域であるため、多分にジェネラルサーベイという性格の強いものであった。その中でも、今回の調査は、特に以下のような調査項目を特に重点的に調査した。

1. 黒河流域と梨園河流域の広域的観察
2. 牧畜で森林が破壊されると認識されている地域と、森林が比較的良好に保護されている地域の比較観察
3. 現地で行われている生業、特に牧畜に関する聞き取り調査
4. 住民の移住に関する聞き取り調査
5. 統計など文献資料の収集

以上のような調査項目を選定するに至った経緯は以下のとおりである。まず、黒河上流域は既存の調査報告等が存在せず、現地に関する情報が乏しいことから、できる限り調査状況の全般的な状況に関する把握ができるようなデータ収集に努力した。これに対応するのが上記の1.および5.である。なお、梨園河は黒河の支流であり、張掖から肅南ユグ族自治県の県中心地（紅湾寺鎮）へ至る国道沿いに流れているため、県中心地からのアプローチが比較的容易な地域である。一方、肅南ユグ族自治県内の黒河はアプローチが困難であり、調査を予定していた寺大隆林場は土砂崩れにより結局到達不可能であった。こうした事態は事前の地図の分析からある程度予測される事態であり、今回の調査における黒河本流は青海省内を主に対象とした。

ついで3.についてであるが、これは『中国少数民族』『社会歴史調査』などの資料の記述と肅南ユグ族自治州での現地調査経験を有する鐘からの事前情報より、ユグ族の生業は牧畜が中心であるとの予断に基づいている。さらに2.は、森林破壊の原因として牧畜、とくに過放牧が指摘されることの多い一般状

況を受け、果たして牧畜が森林破壊を引き起こしているという具体的証拠が存在するのか、という小長谷有紀氏（水需給過程グループコアメンバー）の疑問に答えるための実証的データを収集する目的で行われた。

4.については、ユウグ族は1950年代末に青海省より現住地域へ移住させられた事実があるとともに、現在は牧民を農業地区へ移住させる政策が行われているという鐘の指摘を受け、政策的な移住が住民配置を決定する大きな要素となっていることが予想されるため、調査項目に加えた。

◆ 調査活動の概要

本調査の調査期間と調査活動の概要を、時系列に沿って以下に示す。

1. 張掖までの移動

8/3：北京到着（尾崎）。

8/4：蘭州到着（尾崎）、鐘と合流。蘭州泊。

8/5：ジープの調達。蘭州泊。

8/6：張掖へ移動。道中、収穫作業用と思われる小型コンバインの隊列が移動するのを頻繁に見かける。

2. 肅南ユウグ族自治州中心地（紅湾寺）ベースの調査

8/7：地元の運転手に交代し、紅湾寺へ移動。この時期、黒河には水がないという運転手の事前情報だったが、途中、張掖南郊の黒河大橋では河水が存在した。

8/8：紅湾寺鎮近辺を視察。水力発電所（N38° 49′ 55.5″、E99° 36′ 58.6″）、紅西路軍記念塔（N38° 49′ 55.5″、E99° 36′ 58.6″）民族商場など。

8/9：康楽区青龍郷で調査。天然林（N38° 47′ 06.1″、E99° 43′ 15.8″、2796m）の視察、孔剛木護林站（N38° 47′ 18.8″、E99° 44′ 15.3″、2739m）での聞き取りと同地の「封山育林区」（植林地を有刺鉄線で囲った一角）の視察、ユウグ族牧民秋営地（N38° 47′ 24.3″、E99° 45′ 20.5″、2830m）での聞き取り、上游村「村部」（定住地区：N38° 49′ 30.3″、E99° 45′ 35.5″、2750m）の視察などを行う。

8/10：天候不良のため、紅湾寺鎮にて文献資料収集を行う。

8/11：大河区水関郷で調査。水関郷政府での聞き取り・文献資料閲覧、郷中心部の「農戸」での聞き取り、長溝寺（N38° 58′ 03.4″、E99° 26′ 05.1″、2639m）の視察などを行う。

8/12：康楽区楊哥郷、大河区雪泉郷（旧国営大岔牧場）で調査。ユウグ族牧民夏営地2地点（N38° 37′ 05.7″、E99° 33′ 31.1″、3691m）（N38° 35′ 18.4″、E99° 35′ 11.7″、3628m）での聞き取り、楊哥郷中心地（N38° 32′ 32.4″、E99° 44′ 59.6″、2873m）の視察などを行う。

3. 黒河最上流部の移動調査

8/13：旧国営大岔牧場の南の峠（N38° 36′ 31.3″、E99° 28′ 25.6″、4042m）を越え、青海省祁連山県へ移動。県中心地（八宝鎮）の西にある、黒河本流と八宝河との合流地点（青海省と甘肅省の省境：N38° 13′ 13.0″、E100° 10′ 52.5″、2630m）および黄蔵寺（元はユウグ族の仏教寺院、

現在は回族のモスク：N38° 13′ 03.1″、E100° 11′ 36.3″、2677m)の視察、宝瓶河牧場(正式名称は中国農墾総公司甘肅省総公司張掖分公司宝瓶河牧場)「場部」(中心地：N38° 14′ 28.3″、E100° 10′ 23.2″、2613m)で牧民(夫はチベット族、妻はユグ族)からの聞き取りなどを行う。

8/14：八字・草原(祁連山南麓、黒河沿いの河谷一帯)を西へ移動、トーライ牧場(N38° 48′ 36.6″、E98° 24′ 48.5″、3366m)を経て再びユグ族自治州に入り、祁豊区祁青郷(N39° 10′ 55.5″、E98° 00′ 17.7″、2934m)まで移動。八宝鎮にて文献資料収集、野牛溝郷の回族牧民夏营地(N38° 46′ 41.2″、E99° 03′ 48.4″、3628m)での聞き取りなどを行う。

8/15：鏡鉄山鉱区(祁青郷内だが行政的には嘉峪関市の管轄：N39° 18′ 12.2″、E97° 56′ 21.4″、2682m)、嘉峪関を経て酒泉へ移動。祁青郷政府での聞き取りなどを行う。

4. 張掖への移動調査

8/16：祁豊区中心地で調査。祁豊区公署(N39° 38′ 52.0″、E98° 20′ 49.2″、1753m)で文献資料収集、文殊寺の視察などを行う。

8/17：黄泥堡ユグ族郷で調査後、明花区蓮花郷へ移動。黄泥堡ユグ族郷政府(N39° 42′ 42.6″、E98° 49′ 51.3″、1401m)、黄泥堡ユグ族郷中心地のユグ族農民宅、蓮花郷のユグ族牧民宅(N39° 38′ 07.2″、E99° 02′ 32.1″、1417m)での聞き取りなどを行う。

8/18：明海農業開発区で調査後、張掖へ移動。西海子(灌漑により水が大幅に減少した湖：N39° 36′ 24.0″、E99° 07′ 58.2″、1395m)の視察、蓮花郷から農業開発区へ移住したユグ族農民宅(N39° 23′ 14.9″、E99° 23′ 30.4″、1463m)での聞き取りなどを行う。

5. 張掖ベースの調査

8/19：寺大隆林場での調査を予定していたが、途中で土砂崩れ(N38° 37′ 05.8″、E100° 00′ 50.8″、2119m)により前進できず張掖へ引き返す。途中の西水郷政府(N38° 37′ 10.6″、E100° 07′ 45.1″、2289m)にて聞き取り調査などを行う。

8/20：馬蹄区で調査。馬蹄寺(N38° 28′ 36.4″、E100° 25′ 02.3″、2537m)の視察、大都麻郷のチベット族牧民冬营地(N38° 28′ 03.1″、E100° 28′ 23.1″、2429m)および馬蹄区公署(N38° 28′ 47.6″、E100° 25′ 14.2″、2515m)での聞き取りなどを行う。

8/21：1930年代にモンゴル人民共和国(当時)から移住してきたハルハ・モンゴル族が居住する平山湖モンゴル族郷で調査。平山湖モンゴル族郷政府(N39° 10′ 01.2″、E100° 50′ 02.8″、1864m)、モンゴル族牧民冬营地(N39° 04′ 29.2″、E100° 44′ 18.0″、2224m)、モンゴル族牧民夏营地(N39° 04′ 26.4″、E100° 44′ 04.8″、2222m)にて聞き取り調査などを行う。

8/22：康楽区紅石窩郷で調査。ユグ族牧民秋营地(N38° 42′ 15.1″、E100° 00′ 18.7″、3141m)、康楽区公署(N38° 48′ 01.5″、E99° 55′ 26.1″、2553m)にて聞き取り調査などを行う。

8/23：休憩日とし、張掖市内で文献資料収集を行う。

6. 蘭州への移動調査

8/24：皇城区馬營郷へ移動。馬營郷西城村の村書記宅(N38° 02′ 12.9″、E101° 33′ 52.8″、2722

m)にて聞き取り調査などを行う。

8/25: 皇城区中心地へ移動。馬宮郷金子灘村の夏・秋営地(N37° 59' 22.5"、E101° 32' 34.7"、2975m) 視察、馬宮郷西城村のユグ族牧民秋営地(N37° 59' 03.7"、E101° 35' 45.8"、2952m)および東灘郷のユグ族牧民秋営地(八字績からの移住者:N37° 47' 08.1"、E101° 44' 13.2"、2763m)にて聞き取り調査などを行う。

8/26: 西宮河林場、武威を経て蘭州へ移動。西宮河林場(N37° 50' 04.5"、E102° 00' 46.1"、2266m)にて聞き取り調査の予定だったが、幹部が不在のため調査不可能であった。

7. 北京への移動、帰国

8/27: 車両代・運転手日当の精算、収集した資料の整理を行う。蘭州泊。

8/28: 蘭州の甘肅人民出版社にて書籍の購入を行う。蘭州泊。

8/29: 北京へ移動、調査チーム解散。

8/30: 中央民族大学にて書籍の購入を行う。北京泊。

8/31: 日本到着(尾崎)。

◆ 明らかになった点

本節では「はじめに」で述べた調査項目に沿って、明らかになった事項を挙げていく。

1. 広域的観察

今回の調査では移動中も含め、特に調査地域の森林に注目していたこともあり、実見に基づいた森林の分布について述べたい。

祁連山中において森林を形成する喬木の樹種は、主に針葉樹の「青海雲杉」(マツ科)である。肅南ユグ族自治県の人々の一般会話では漢語で「松樹」と呼んでいる。現地では「陰樹」として認識されており、山の北斜面に塊状もしくは帯状の単一林を構成している。マクロ的には肅南ユグ族自治県は山脈の北麓にあたるが、青海雲杉はミクロ的な意味における北斜面にのみ生育するため、個々のクラスターの面積は比較的小さく、広域的な森林を形成することはない。南斜面には「柏樹」(トウヒ科)などの灌木が生育するが、草原の中に点在して生えている状態であり、森林と呼びうる状況ではない。なお、現地では「柏樹」は「陽樹」として認識されている。

ただし、針葉樹林の分布高度はおおむね標高 2400-3100m に限られ、それ以上の標高では北斜面であってもそれ以上の高度では「扁麻」(科目などの詳細は未同定: 高さ 1m 程度で、調査当時、小さな黄色い花を咲かせていた)と呼ばれる低灌木が疎らに分布するのみである。更に高度が上がり、標高 4000m 以上になると灌木も消滅し、草生も疎らとなる。

なお、川沿いの水分が豊富と思われる地域には「柳樹」(科目などの詳細は未同定)と呼ばれる高さ 3-5m の広葉樹や「楊樹」(ポプラ)が生育している。また、針葉樹林の分布高度より標高の低い地域では、川沿いや植林したと思われる集落近辺に上述の樹木が見られるのみで、それ以外の地域は概して乾燥により草生が疎らな草原となっている。

2. 牧畜による森林破壊・森林保護

現地の牧民は、自らの飼養する家畜のうち、ヒツジとヤクについては樹木を食べないと認識している。ただし、筆者の実見では、ヒツジは灌木の葉を食べることもある。なお、筆者の目撃したのは農耕地域において伐採された灌木の葉をヒツジが食べていた光景であり、灌木は飼料として与えられていたわけではなく、ヒツジが盗み食いをしている様子であった。

一方、ヤギは牧民自身、樹木を食べると認識しており、筆者もヤギ（ヤギのみで構成されている 20-30 頭程度の群れ）が山の斜面に生えている灌木の葉を食べている光景を大都麻郷にて間近に観察した。ただし、ヤギは旺盛に樹木を食べることは事実であるが、群れの移動速度も速い。また、林内放牧されているヤギであっても、灌木ばかりを選択的に食べているわけではない。そのため、ヤギが樹木を食べた結果の影響については、さらに検討が必要となる。なお、紅石窩郷のインフォーマントによれば、2003 年よりヤギを森林に入れてはいけないという規定ができたが、実際には森林のある地域にもヤギを飼っている牧民は存在するのが現状だそうである。

また、水関郷の郷長によれば、規定の土地利用を守っていないのは牧民が生活できないため、ヤギは灌木を食べてしまうのを承知の上でカシミアが取れるために飼養しているという。さらに、森林とは直接的な関係はないが、現実には単位面積あたりで許可されている家畜数を 15% 以上超過して放牧しているが、黙認状態との事であった。

なお、甘肅省の当局が考える森林とは、針葉樹林だけではないようである。例えば、『黒河流域生態環境保護及建設規画』12 ページには、次のような記述がある。「黒河源流の水源涵養林の保護を強化するには、祁連山の喬木林面積が相対的に安定しており灌木林面積の草原化が著しい現状において、祁連山水源涵養林の主体であり保水能力も大きい灌木林保護が重要になる」。つまり、灌木の生えている場所も「水源涵養林」という認識がなされているわけであり、牧民の認識している「森林」よりはるかに広い領域がそれに相当し、事実上そこを避けて放牧するのは困難となる。

一方、現在行われている森林保護については植林と「封山育林」の 2 種類がある。植林については、筆者の見限り、青海雲杉などの喬木に限られているようであった。一般的には、天然林の下端部に植林した樹木が隣接しているというような小規模なものが多いが、場合によっては現在草原となっている斜面に 100m 四方程度の規模で植林しているようである。孔剛木護林站での聞き取りによれば、孔剛木護林站のみで 2002 年は 150 ムー(10ha)の植林を行うという。また、水関郷長によれば、郷で毎年 160 ムー(10.7ha)造林しなくてはならないことになっているが、実際には不可能であるとのことであった。

「封山育林」は、森林保護のために林地を有刺鉄線で囲って牧民・家畜の侵入を禁止する措置である。筆者の見限り、現在「封山育林」の対象となっているのは針葉樹林のほかに川沿いの「柳樹」（西水郷にて実見）などもあり、既存の林地および新たに植林した場所、あるいは植林予定地も「封山育林」されている。孔剛木護林站での聞き取りによれば、牧民を入れると職員にペナルティーが課されるという。そのため、比較的厳格に実行されていると想像されるが、その反面、「封山育林」の周辺にある牧民の冬营地などでは、家畜の食べられない「毒草」が増加したと述べる肅南ユウグ族自治県の幹部も存在した。

また、牧民が生活していくにあたり燃料として、また牧地の囲い込みに用いる杭として木材¹を利用していることは否定できない。ただし、後者は近年の現象であり、木製の杭を用いるのは「封山育林」においても同様である。さらに、肅南ユージュ族自治県幹部の1人によると、寺大隆林場は現在こそ「自然保護站」となっており樹木の伐採が停止しているが、2・3年前までは天然林の伐採が行われ、張掖方面へ搬出されていたという。実際、寺大隆林場へ通じる唯一の自動車道路は県中心地を経由せず、直接張掖へ至っている。

また、馬營郷西城村の南側にある山は、1950年代末に現在の住民が移住してきた²当時は北斜面がほとんど森林だったが、伐採して現在は草地になっていると村書記が語っていた。西城村は基本的に牧畜地域ではあるが、必ずしも伐採の目的は牧畜に直接関連のあるものばかりではない。むしろ、人間活動に伴う森林伐採が顕著な森林減少の原因であるといえるだろう。

さらに、しばしば「過放牧」の名で草原の荒廃も牧畜に帰せられるが、これも単純に現地の牧民が大量の家畜を放牧させるために発生しているとは、少なくとも現地の住民は認識していないようである。例えば、馬營郷において草原破壊の原因として言及されたのは薬草掘りである。調査当時も数日前に240名の農民が山麓より押し寄せて漢方薬となる薬草を1人10kg近く掘り、草原を荒廃させたために牧民とトラブルが発生したという。また、水関郷においては、住民が過放牧をせざるを得ないのは郷の総面積の48%を無期限で高台県に貸し、そこで高台県の農民がヒツジの放牧をしているためだと認識されていた。なお肅南の住民の見方としては、牧畜の方が高収益のため高台・臨沢など山麓の農業県は牧畜の発展を推進し、かわりに肅南の牧畜を圧迫しているのだという。

3. 現地で行われている生業に関する調査

現地で行われている牧畜の形態は、基本的にトランスヒューマンスである。ただし、北部の比較的標高の低い地域と南部の比較的標高の高い地域では、各季節に牧地として使用されている土地の景観に若干の違いが見られる。その点について、水関郷と祁青郷を例として以下にモデルを示す。なお、いずれの例についても情報源は郷幹部である。

A) 水関郷

冬・春営地：標高2700-3000m程度。10月下旬に移動してくる。郷中心地周辺の牧地は全て冬・春営地である。また、この高度は森林と同じレベルの高さである。

夏・秋営地：標高3000-3800m程度。6月中旬に移動してくる。車の通れる道がないのでヤクを利用して運搬する。秋営地は夏営地と同じ場所にあるが、秋営地の方が若干標高が低い。

備考：牧地は四季分、全て世帯に分配されている。

B) 祁青郷

冬・春営地：標高3000m程度。12月1日にジープで移動する。場所的には郷中心地の周辺である。なお、移動に使用するジープは各世帯にある。なお、ここは南斜面なので森林は存在しない。

夏営地：標高3800m以上。6月20日に移動する。

¹ 杭の材質としては、コンクリート製も存在する。

² 後述の「大搬遷」による移住である。

秋営地：標高 3000-3800m。8 月 10 日に移動する。なお、11 月 20 日～12 月 20 日の間、畜群を連れて頻りに移動を繰り返す「移動放牧」を行う牧民も存在する。

備考：夏営地と秋営地の牧地は数世帯で一地域が割り当てられているが、冬・春営地の牧地については各世帯に分配されている。

その他、牧畜に関する概況は以下のとおりである。まず、飼養されている家畜はヤク・ヒツジ・ヤギである。ただし、地域によっては環境的要因により存在しない家畜がある。基本的に、高地への順応性はヤクが一番高く、ヒツジ、ヤギの順で低くなるため、標高の高い地域にはヤギがおらず、標高の低い地域にはヤクがいない。

また、稀に鹿・ロバ・ウマが家畜として飼養されている。鹿は角を漢方薬として販売するために野生鹿を捕獲して飼っており、ロバ・ウマは乗用である。

1 世帯で複数種の家畜を飼養することが一般的であるが、ヒツジ・ヤギとヤクの混合群は形成されず 2 群に分ける必要があるため、管理上の理由からヤクもしくはヒツジを売り払ったり、片方の群れを他人に預託する事例も存在する。また、特に遠方の高地に存在する夏営地においては、さまざまな理由により本人は夏営地へ移動せず、牧夫を雇用する事例が珍しくない。

基本的に飼料は草原に生えている草であるが、冬・春営地においては有刺鉄線に囲まれた小規模の畑地を有し、夏季に燕麦などの飼料を栽培しておく事例が多い。ただし、自家栽培で不足する分の飼料は購入する。例えば祁青郷の場合、世帯あたり 15 ムー (1ha) の畑で栽培することが義務付けられているほかに、年に 5t 程度の飼料を農業地域より購入しているとのことであった。

なお、ユグ族牧民の居住形態は次のようになっている。まず、夏営地・秋営地に関してはテント（チベット式）住まいが多数を占める。場合によっては夏営地・秋営地に固定建築物が建てられているケースも存在するが、家屋というよりは簡易な小屋と呼ぶべき大きさのもので、内部も複数の部屋に区切られていない。その一方で、冬・春営地（冬春兼用の営地）には必ず固定家屋が存在する。固定家屋の構造は現地漢族のものと大差なく、レンガ造りで複数の部屋を有するものである。さらに、営地の家屋とは別に、県中心地や「村部」にある「居民点」に固定家屋を有するケースが存在し、そうした家屋には学校に通う子供や老人が住んでいる。また、こちらの住居においては、冬・春営地の住居には存在しない電気や電話などのインフラが整備されている。つまり、彼らの居住形態は単に季節に応じた移動だけでなく、ライフコース上における居住空間の変更、即ちある一時点を見れば家族の空間的分散をその特徴とする。

4. 住民の移住に関する調査

調査地域における住民の移住については、過去 100 年間に關し、黒河上流域の住民構成に少なからぬ影響を与えたものを 3 回確認し得た。まず第一のものは、1920-30 年代におけるハルハ・モンゴル人の流入である。平山湖モンゴル族郷幹部からの聞き取りによれば、当時のモンゴル人民共和国政府の仏教弾圧政策などに反発したハルハ住民は、まず中モ国境付近の馬山（現肅北モンゴル族自治州）へ流入したが、人民共和国側からの襲撃を避けるために平山湖モンゴル族郷や肅南ユグ族自治県の白銀モンゴル族郷の領域へ再移動したという。これら一連の移住はそれぞれ数回に分かれて行われており、基本的に難民的な移住のため、規模も小さい。

一方、1958-59年に行われた「大搬遷」は、省レベルの政府決定に基づいた政策的移住である。複数のインフォーマントの証言及び『肅南文史資料』などの記述を総合すると以下ようになる。当時、肅南ユウグ族自治県の領域は祁連山の南麓、つまり最上流部に至る黒河左岸部および八宝河との合流点近辺の右岸部（いずれも現在は祁連山の領域）まで広がっていたが、1958年に青海の牧民・家畜が大挙して肅南側に押し寄せ、肅南の牧民と紛糾が発生した。その解決方法として甘肅・青海両省は肅南ユウグ族自治県の全住民（明花区を除く）を皇城灘（現皇城区）へ移住させることで合意した。これを受け、1959年2月より移住が開始したが、中央の指令により同年6月に移住を中止し、甘肅・青海両省の境界を再調整して現在に至っている。ただし、この時期に3079人、家畜66940頭が皇城灘に到達し、道中で死者14名、家畜の損失4万頭の被害を出したという。また、聞き取りによれば、この時期より低地の漢族が肅南に流入してきたというが、これは同時に全国規模で行われた「大躍進」の影響が強いと思われる。

上記の事実に関して『肅南裕固族自治県誌』67-68ページの、1954年の肅南ユウグ族自治県総人口が7040人、1964年の総人口が17964人であったこと、また人口増加の主たる理由は肅南ユウグ族自治県の領域拡大と1959-62年の間に漢族人口の流入が発生したためである、という記述とあわせて考えると、「大搬遷」および漢族人口の流入が現地に及ぼした影響の程度を窺い知ることができるだろう。

そして、現在進行中の移住が、1992年に明海郷の東南隅、バタンジル砂漠の辺縁部に作られた「明海許三湾土地開発区」への移民政策である。鐘の解説によると、これは本質的には政府主導の貧困緩和政策の一環で行われたものであり、主たる対象地は明花区蓮花郷など低地の乾燥地域であったようだが、それと同時に祁連山中の牧民を減らす目的のいわゆる「生態移民」の移住先としても位置付けられているようである。例えば調査当時、水関郷では48人（現住人口の約8%）が上記開発区に移住して農業を行っていた。ただし、山地からの移住者に関しては家、土地、家畜を出身地にも保留する「両頭戸」というスタイルのため、山地へ戻る者も少なくないようである。例えば、馬營郷西城村からは、現在の書記も含めて3-4戸が開発区に移住し、合計20万元あまりを使ったが、3年程度で皆戻ってきたという。しかし、肅南ユウグ族自治県の幹部の1人によれば、今後予算の目処が立てば「東部核心林区」（寺大隆林場以東）より開発区へ2000人規模の移民計画があるとのことであった。

5. 文献資料の収集

今回の調査で収集した文献資料は、文末の付録「収集資料一覧」のとおりである。なお、内容の分析に関しては現在進行中であり、詳細については後日改めて発表したい。

◆ 今後の展望

今後の研究展望については調査内容、調査地域、調査時期の3点に分けて述べたい。

まず調査内容についてであるが、地域の水利用という観点から考えて重要な要素は、人口配置・生業・政策であると考えられる。人口配置については、今回の調査で政策的移民や経済的理由による移住が現在の、そして今後の人口配置を大きく左右することが明らかになった。黒河流域の社会的現実としては、限られた水資源を巡る各地域間のゲームというメタファーがある程度の真実を表現しうるだろうが、そのプレイヤーが「どこで」「何に」「どれだけ」使うのかを考える際、人口配置が及ぼす影響力は非常に大きい

と想像される。

人口配置に関する具体的な調査方法は過去の移住原因と現在の移住に至った経緯をトレースし、現在行われつつある移住の動態について明らかにすれば良いのだが、黒河上流域においては牧民（主にユグ族、チベット族、モンゴル族、回族）、農民（主に漢族、回族）、都市民（主に漢族、回族）という生活形態および民族別にそれぞれ検討が必要となろう。

また、自然科学系の研究との接続可能性を考えた場合、従来民族学（文化人類学）の研究で多く用いられている定性的な研究だけでなく、定量的な現状把握も必要となるだろう。具体的には、黒河上流域で行われている人間活動、つまり生業としての牧畜業・農業・林業・鉱工業などを水利用・木材の利用・活動時に消費するエネルギーなどの観点から定量的に理解するための研究を行うべきである。

さらに、人間活動を規制している要素として政策は無視し得ない。そもそも、本節の冒頭で取り上げた移住についても、また本報告で言及した環境保護についても、いずれも政策に基づいた活動である。黒河上流域においてどのような政策がどのようなレベル（省、県、郷など）で実行され、その実効性はどのようなものであるかを明らかにすることは、今後のあるべき水利用のあり方を検討する際に有用な基礎資料となるだろう。

次に、こうした項目を明らかにするために実際に調査を行うにあたり、どのような地域を調査するのが望ましいか、という問題を検討したい。まず、政策の違いや環境の違いという点でも調査の便宜という点でも、省の違いは無視し得ないだろう。従来、本プロジェクトにおける「黒河」は甘粛省と内モンゴル自治区の部分のみが考察の対象であった。しかし現実には黒河は、甘粛省へ流入する宝瓶河牧場においても既に相当な流量があり、また青海省にも牧畜や農耕などの人間活動や森林が存在する。さらに牧畜に関しては、青海省祁連県では冬営地でも標高 3300m 前後と、全く森林に関わらない標高で行われているスタイルのものが存在し、甘粛省のみで考えた場合のように、牧畜民が放牧を行う森林ステップのすぐ上は氷河という図式には当てはまらない。こうした現実を斟酌すると、少なくとも青海省の黒河流域で生活する農民および牧民に関する現地調査が必要となる。調査地としては、祁連県内の数箇所が対象となるだろう。

一方、甘粛省においては、今回の調査から、黒河流域で森林の存在する牧畜地域としては康楽区が適地であることが明らかになった。その他の地域では、さまざまな理由により森林が存在しなかったり（例えば大河区、祁豊区）、あるいは黒河流域ではない（例えば皇城区）など、いずれかの条件に当てはまらない。また、森林に直接的影響を与える林業については、今回の調査では到達できなかった寺大隆林場での調査が必要になる。なお、これらの地域においては、現在進行中の現象である草原・森林の囲い込みの周辺地域に対する影響も評価するという利点もある。

調査時期については、今回の調査が牧民の秋営地への移動時期と重なったことを勘案すると、別の時期が望ましいと思われる。例えば夏営地に対する本格的な調査を行うには、7月の調査が必要であろう。ただし、康楽区の夏営地は基本的に道がないため、自動車以外のアプローチ手段を考慮する必要もある。また、主に青海省で行う農耕地域での調査は作物の作付け状況を実見出来るというメリットから、寺大隆林場での調査は冬場には現地へ近づけないという実際の事情より、夏季に行うことが望ましい。

一方、森林と牧畜の関係を調査するためには、むしろ森林に隣接する牧地で放牧を行う冬・春営地での調査が必要となる。また、鐘によれば夏営地では牧夫のみが牧畜に従事し、家畜所有者は県中心地などに

滞在しているケースもあるという。牧夫は地元出身者でない場合があり、現地の事情に詳しいインフォマントを確保するという必要性からも、冬季もしくは春季の調査が必要である。なお、現地へのアプローチについては、今回雇用した運転手より郷中心地までは冬季でも車両の乗り入れが可能なので、郷中心地近辺に存在する冬・春営地に居住する牧民であれば比較的容易に到達できるとの情報を得ている。

そして最終的には、以上のような基本方針に基づいて数回の現地調査を行い、そこで収集したデータを利用して水需給過程グループ全体での総合報告が可能となるような方法論を開発していきたい。

◆ 付録：収集資料一覧

・書籍および冊子体の報告書

- 『内蒙古自治区国民経済和社会発展“九五”計画及2010年遠景目標』内蒙古自治区計画委員会、1997年
- 『甘肅省誌 農墾誌』甘肅省地方誌編纂委員会、1993年
- 『甘肅省誌 林業誌』甘肅省地方誌編纂委員会、1999年
- 『甘肅省肅南裕固族自治県 県情与開発』肅南裕固族自治県人民政府、1999年
- 『肅南裕固族自治県誌』甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会、1994年
- 『甘肅省肅南裕固族自治県統計年鑑 1999』甘肅省肅南裕固族自治県統計局、ND
- 『甘肅省肅南裕固族自治県統計年鑑 2001』甘肅省肅南裕固族自治県統計局、ND
- 『甘肅省張掖地区農業区画彙編』甘肅省張掖地区農業区画弁公室、1987年
- 『祁豊藏族歴史概況』祁豊区公署、1994年
- 『祁連県誌』祁連県誌編纂委員会、1993年
- 『祁連工交郷鎮企業資料彙編』青海省祁連県工交郷鎮企業局、1997年
- 『祁連資源誌』祁連県地方誌編纂委員会、1999年
- 『祁連水利誌』祁連県水利誌編纂委員会、2000年
- 『祁連年鑑 1986～1994』祁連県地方誌編纂委員会、1996年
- 『高台県誌輯校』張志純等校点、1998年
- 『黒河流域近期治理規画』中華人民共和國水利部、2001年
- 『重刊甘鎮誌』張志純等校点、1996年
- 『重修肅州新誌』甘肅省酒泉県博物館翻印、1984年
- 『肅南文史資料 第二集』中国人民政治協商會議甘肅省肅南裕固族自治県委員会、2000年
- 『肅南裕固族自治県牧業区画彙編』肅南裕固族自治県牧業区画弁公室、1987年
- 『青海省誌 林業誌』青海省地方誌編纂委員会、1993年
- 『創修臨沢県誌』張志純等校点、2001年（初版：民国31年）
- 『中国西部辺区發展模式研究』潘乃谷・馬戎（主編）、2000年
- 『中国牧区水利可持續發展戰略』水利部牧区水利科学研究所・中国水利学会牧区水利專業委員会、1999年
- 『中国裕固族研究集成』鐘進文（主編）、2002年
- 『張掖市誌』甘肅省張掖市誌編修委員会、1995年
- 『張掖地区糧食誌』張掖地区糧食誌編纂領導小組、1999年

『裕固族民間故事集（上冊）』田自成（主編）、2002年

『臨沢県誌』臨沢県誌編纂委員会、2001年

『連城魯土司』趙鵬、1994年

・その他（最後のパンフレット以外は全てコピー）

「祁青郷経済社会発展状況報告」（郷書記が2002年5月に行ったスピーチの原稿）

「祁連山水源涵養林総合効能評価与建議」

「関于我県黒河流域生態保護及建設状況的彙報」（肅南裕固族自治县が作成）

「康楽区概況」（区公署が作成）

「千里大遷徙」索高年、『肅南文史資料 第一集』所収（pp.21-26）

「張掖市平山湖蒙古族郷簡史」（手書きの原稿）

「民国时期的張掖水利」張中式『張掖地区文史資料』所収（pp.114-117）

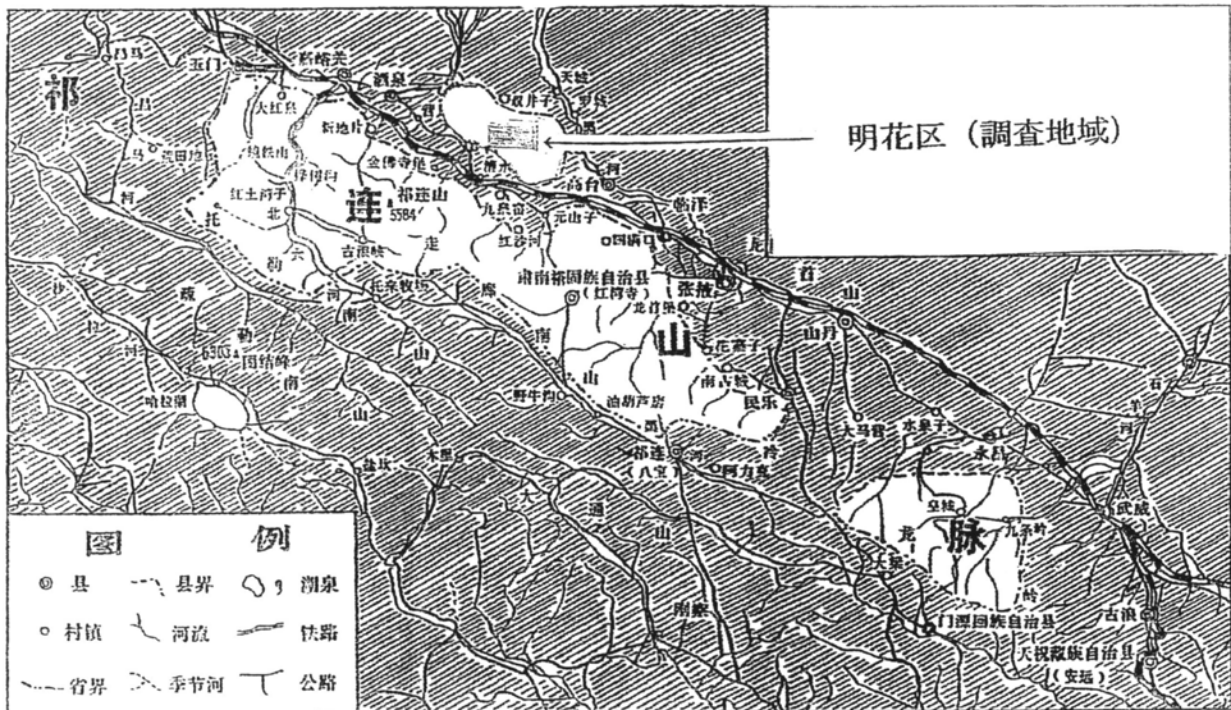
「明清以来河西人民保護森林資源」賀敬農・王世積『張掖地区文史資料』所収（pp.108-113）

「全県上半年經濟工作現場觀摩検査 馬蹄区觀摩点状況介紹」（2002年8月に行った視察のパンフレット）

肅南ヨグル(裕固)族自治県明花区(黒河中流域)予備調査 マイリーサ(立教大学)

最近作られた中国甘肅省の地図には、「黒河流域生態保護地域」という表記が加わっている。そこは河西回廊の中部ゴビ砂漠地域に位置し、肅南裕固(ヨグル)族自治県の一部(明花区)でもある。この地域にはヨグル族、漢民族、チベット族、回民族が生活しているが、ヨグル族が人口の89%を占めている。

この数十年間、特に近年、この地域の生態環境の状況はますます厳しくなり、それが牧草地の悪化をもたらした。これはそこに住む人々の生存の環境まで悪化させてきたばかりではなく、河西回廊の気候の調整や黒河流域地域の持続的な発展にも影響を及ぼしている。そうした背景により同県では地域の環境保全のために、人口分布の調整及び生業転換の政策を実施してきたが、それにより生態移民が生まれてきた。このような生態移民が生じた過程と現在の状況について、私は2002年8月に現地に出かけ、予備調査を行ってきた。



肅南裕固族自治県における明花区の地理的位置

移民の移出地——明花区蓮花郷

明花区蓮花郷に生活する人々は昔から放牧業を中心に生業を立て、自然を頼りに生活してきた。新中国建国以前、ここには40余世帯の牧民が生活し、約一万匹の家畜を放牧していた。現地の年配者の話によると、昔の蓮花草原は人口が少なく、牧草地がよかったほか、湖も大きく、野生動物や植物が豊かだった。それに、地下の水資源も豊富で、一メートルほど掘れば水が出ていたという。

1950年代以降、蓮花郷は人口が200世帯まで急増し、家畜も増え、ラクダと馬が300頭（請け負い政策実行以降は全部処分された）、牛と羊が約2万頭（匹）にもなった。それに、旱魃が長年続いたため、現在、蓮花郷における利用可能な牧草地の面積は、1950年代に比べ半分減っているという。

こうした自然環境の悪化の要因について、現地の人々は次のように考えている。

まず、上流地域の農業地域において大規模な農地開発が行われ、深い井戸を多く掘ったことにより地下水の水位が下がり、湖も枯れ始めた。

それに、周辺の農村地帯の使用面積が牧畜区にまで広がってきたために、牧民の生存の空間が圧迫されてきた。

また、「文化大革命」時代は農村地域の画一のやり方でここに「牧民新村」を作り、牧民たちの住居をそこに集中させ、「半農半牧」の生産様式に切り替えた。その際、牧草地と家畜との調和的な関係が無視されていたため、「新村」周辺の牧草地が悪化しはじめたが、その後、「新村」への移住が失敗し、牧民たちのほとんどがもとの場所にもどっていた。そこに残ったのは、その住居を子供の教育のためにしばらく利用せざるをえなかった牧民たちばかりだった。

同県では、一九九七年から草原の負荷を減らすと同時に、牧民の「脱貧」の問題を解決する目的で、一部分の牧民を蓮花草原から明海農業総合開発区に移住させ、農地開発をさせるという政策を取ってきたが、現在はすでに約100世帯の移住が実行されているが、移住者のほとんどが20代から40代にわたる若い世代や中年の人々である。したがって、移住していないのは、年寄りや家族に病人や障害者を抱える世帯及び男の子をもたない世帯ばかりである。男の子をもつ世帯が積極的に移住した理由については、将来の子供の結婚に向けて住居を確保するためとも考えられる。

このように、現在この地域が直面しているのは高齢化の問題であり、また、移住に伴い、地域の公共施設や公務機関が農業総合開発区に移ったために、牧民たちがコミュニティーの中心地を失ったことである。そのために、現在牧民たちは下河清という隣接する農業県が開いている市場でしか互いに会えなくなっている。

しかし、蓮花郷の自然環境でしか生産できない山羊は肉の安全性と味が評価され、入荷に間に合わないほど売れ行きがよいので、このような地域の独自性を生かせば、付加価値（食の安全性や栄養など）を生み出すことができる。というのは、現在、中国の都会部では生活が豊かになるにつれて、大自然の中で育った家畜による安全で良質の肉食が求められているようになっているからである。こうした都会との互恵的、共生的な有機的な関係が継続できれば、地域に新たな可能性をもたらすであろう。しかし、ここでは行政側によって、近い将来、「天然放牧方式」が徐々に「半舎飼」、あるいは「舎飼」に切り替えられることが計画されている。その狙いは、大量生産、大量出荷することにより、地域の牧民の収入を増加させることにあるというが、そんなことをすれば、牧民たちがすべて画一の大量生産の競争に巻き込まれ、蓮花草原がもつヤギ生産における優位な自然状況も意味を失うことになる。これによってもう一つ失われることは、長年にわたり蓄積されてきた自然と生業を調和する生活の知恵であり、こうした生活の知恵は実際経済的な合理性を多く含んでいる。それに、大量生産のシステムの導入は牧民たちにそれなりの借金を負わせるばかりでなく、伝統的な自給自足のシステムを崩壊させることになる。

移住地——明花区明海郷

明海郷は、約 50 キロにわたる砂漠地帯を隔てて蓮花郷に隣接し、その面積は蓮花郷の面積より倍くらい広い。交通の便も蓮花郷に比べて恵まれている。この地域も昔から遊牧を中心に生計を立てていたが、1970 年代から「上農業区」という開発区を作り、地元の半数の牧民に農地開発をさせてきた。しかし、地下水位の下降により開発当時掘った井戸はほとんど枯れている。

また、地理的に高台、九泉という二つの大きい農業県に囲まれているため、牧草地の悪化の状況は蓮花郷より厳しい。1990 年代、東南に位置する農業県が「許三湾土地開発区」を作り、大規模な農地開発を行った。これも、驚くほどのスピードで明海郷へ広がった。

明海郷も県境で農業総合開発区を作り、そこに移民を移住させ、人間の壁を作ることによって、隣接する県からの外来開発を止めようとした狙いがあった。

蓮花郷からの移民村を「双海村」と命名し、「蓮花方田」を開拓した。

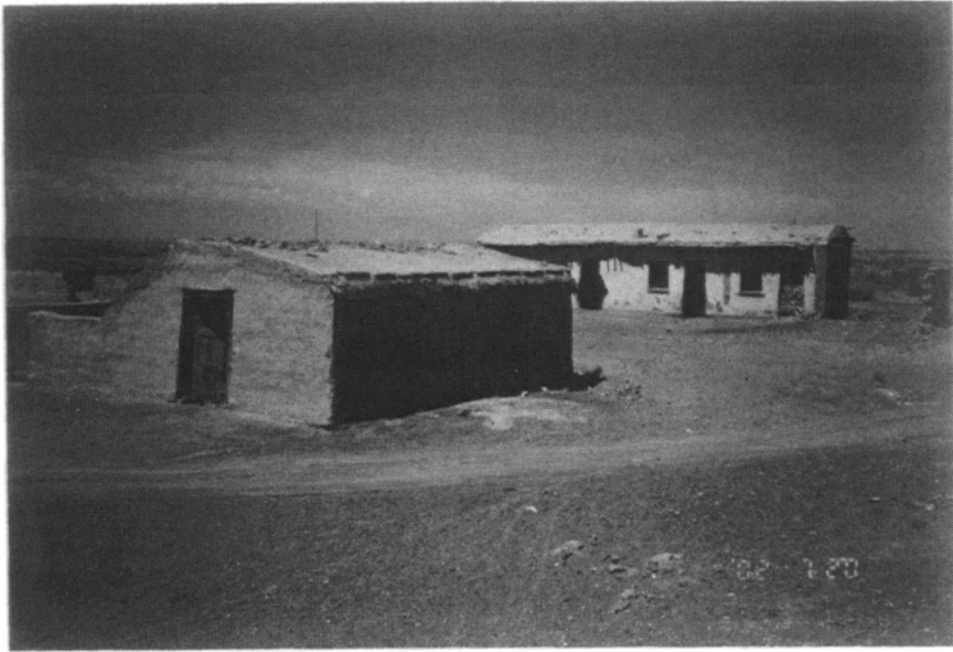
移民村を作る際に政府の投資で、水、電気、井戸、道路、学校、病院などの基本的な設備や施設が整備され、移民各世帯に一万元の住居建築補助金が与えられた（一世帯あたりの新築費は約 2 万元）。移民たちは草原を離れた時に家畜を売った金と政府からの補助金と借金により住居を建て、農地を開拓しなければならぬが、現在、移民たちはすでに新築に入居し、農業生産を始めている。彼らの現在の状況について、蓮花郷からの移民に聞く機会があったが、移住の理由としては、子供が学校に行くのに便利で、また、前に住んでいたところがあまりにも辺鄙であったこと以外に、新居地ではいろいろな優遇政策があったからということ挙げているが、実際は、彼ら移民たちの生活は安定せず、たいへん厳しい状況にある。

それは移民たちが住居の建築と農地開拓のために多くの借金を抱えているからであり、また、農業生産は牧業とは違って、コストがたいへん高いからである。すなわち、電気、肥料、農薬及び設備などの投資により、生産投資と収穫による収入との採算が取れないからである。それにより負債の返済が迫られ、その対応として兼業化や出稼ぎの現象が現れ、移民世帯主の半分以上が出稼ぎに出かけたり、元の牧地にもどって放牧をしたりせざるを得なくなっている。そういう状況により、移民の中には経済的理由により子供が学校にいけなくなっている現象も起きているが、学費を払う金では多くの農薬や肥料が買えるからだ。

しかし、明海郷に移住してきた移民たちは、新居住地での住宅のために多くの借金を抱えているために、蓮花郷に戻ろうと思って戻れなくなっている。そのために、もし将来的に金に余裕ができれば、移住先での農地で牧草を作り、家畜を飼うことを考えている。実際、この地域でも国際銀行の援助により、「圈舎工程」と「子羊育肥工程」が行われている。

このように、明海郷に移住してきた移民たちは最終的にどこでどのような生産手段を取り、どのように生活していくものなのか、彼ら自身にもよくわからないことなのである。

* 本文には拙稿「西部大開発の中の少数民族生態移民——肅南ヨグル（裕固）族自治州における調査報告——」（『中国 2 1』Vol.18、愛知大学現代中国学会）に重なる部分があることをお断りします。



生態移民が移住した後の廃居。ここの半分くらいの牧民が農業
開発地に移住させられている。 (1)



牧民の家の周辺（回りの木は 1970 年代から植えられたもの）
木が植えられているところには牧民の家がある (2)



新しく作られた移民の村（農業開発区）

(3)

都市化過程における民族文化と自然環境の変化

楊 海英 (静岡大学)

1: はじめに

2002年8月16日から9月14日にかけて、総合地球環境学研究所の「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷（略称オアシスプロジェクト。中尾正義教授リーダー）」の一環として、内モンゴル自治区西部鄂爾多斯オールドス市(元伊克昭盟)とアラ善アラシャン盟において、社会と政治状況に関する人類学的な実地調査を行った。私はまず北京から列車で内モンゴル自治区の首府呼和浩特フフホト市に入り、そこから自動車をチャーターしてオールドス市とアラシャン盟を走行した。オールドス市においては都市化・工業化にともなう水消費量の増加問題、草原地帯における灌漑事情など、その実態と問題点を近現代史のなかでの大規模な人的移動との関連を中心に聞き取りを実施した。また、アラシャン盟では、主として近現代史に関する資料収集をおこなった。

2: 「鄂爾多斯市」が誕生した背景

黄河の大湾曲地帯に位置する高原をモンゴル人は古くからボル・トハイ(褐色の湾曲地)と呼び、長城以南の漢人農民たちは河套と称してきた。15世紀以降、オールドス・モンゴル部がこの地の主要な住民となり、次第に地域集団化の道を歩み、オールドスは地名ともなった。清朝時代に入ると、オールドス・モンゴル部はイケ・ジョー(伊克昭)盟に改編された。イケ・ジョー盟は7つの旗から構成されていた。中華民国は清朝の行政組織名を踏襲しながらも、内モンゴルを中国内にとどめておくために何回か内地の省県制度を導入しようと試みたが、いずれも反対に会い(Oghonus Chogtu 2001:141-143)、全地域での成功には至らなかった。社会主義時代、イケ・ジョー盟内の7旗は統合されたり、分割されたりはしたが、盟旗制度そのものの廃止はなかった。

このように存続してきたイケ・ジョー盟は、2001年9月28日付けで行政組織上、鄂爾多斯オールドス市に改編された。中国の主要新聞やテレビ局はそろってこのニュースを報じた。ここで、政府側が今回の改編をどのように位置付けているかを理解するために、地元内モンゴル自治区の『呼和浩特フフホト晩報』の報道を見てみよう。

『呼和浩特晩報』は「〈大きい寺院〉から〈多数の宮殿〉へ—イケ・ジョー盟は歴史の彼方へ去り、新生鄂爾多斯市が誕生へ」と題する記事を一面に掲載した(『呼和浩特晩報』 2001)。「大きい寺院」はイケ・ジョーのことで、「多数の宮殿」とはオールドスをそれぞれ指す。いずれもモンゴル語の漢語訳である。いわゆる「大きい寺院」とは、黄河の南岸に立っていた広慧寺(Vang-un ghoul-un juu)の俗名である。オールドス部が清朝の支配下に入った最初のころ、この地で集会を開いていたことから、行政組織名ともなったのである。一方、「多数の宮殿」ことオールドスとは、チンギス・ハーンの祭殿群を指す言葉である。

『呼和浩特晩報』はさらにつぎのような論評を加えている。「およそ300年間つづいた盟旗制度が幕を閉じ、世界とつながる鄂爾多斯市がスタートした」(『呼和浩特晩報』 2001)。同新聞が伝える新生鄂爾

多斯市は面積が 8.7 平方キロメートルで、総人口は 139.5 万人にのぼる。そのうち主体たるモンゴル族の人口は約 15.8 万人である。開発可能な地下鉱物は 33 種類もあり、そのうち石炭の貯蔵量は中国全国の 6 分の 1 を占める。天然ガスの貯蔵量は 5000 億立方メートルに達し、中国の重要な資源基地である。また、アルプス山のカシミヤは「柔らかい黄金」と呼ばれるほど、重要な畜産品のひとつとなっている。鄂爾多斯市の農民や牧民の年収は 2453 元 (10000 円≒670 元 2002 年 8 月現在) で、都市住民は一年間に約 5502 元の現金を生活に使用しているという(『呼和浩特晩報』 2001)。

このように地元メディアが熱をこめて報道しているのに対して、モンゴル人たちは意外に冷静に見守っている。彼らはイケ・ジョー盟が鄂爾多斯市になったことで、さまざまな危機感を抱いている。それを以下 3 つにまとめることができよう。

ひとつは故郷喪失の問題である。これは、内モンゴル自治区全体に共通することでもある。いまの中国政府はかつての中華民国のように強制的に省県制度を押し付けようとはしないだろう。そのかわり、盟旗という名称は古臭くて、市がついた行政名の方が進歩的である、との宣伝が功を奏しているからである。盟旗制度はたしかに清朝がモンゴルに与えたものであり、モンゴルの横の連携を遮断し、弱体化につながった面もある。それでも、300 年間もつづいた以上、それなりにモンゴルの社会制度として定着した、とも認識されている。とりわけ、それぞれの部族集団を特定の地域と結びつけて地域集団に改造したのは、ほかでもない盟旗制度である。大規模な移動遊牧こそできなくなったものの、固定させられた「故郷」(notugh)への愛着が生まれた。モンゴル人が定着した地域にはかつての部族名や氏族名がつけられた。オールドスといえば、オールドス・モンゴルの故郷であり、オールドス部という往時の歴史をも彷彿させる。したがって、以前にジョーウダ盟が赤峰市に、ジェリム盟が通遼市に改編されたことは、故郷の喪失につながると理解されている。

つぎに、古い盟旗から進歩的な市に変わったことで、西部大開発運動にチャンスを求める内モンゴル自治区以外からの漢人が大量に流入してきたことである。1982 年に政府が四川省から内モンゴル自治区へ移民させようとしたとき、学生運動が発生したことがある。大規模な移民は民族意識を刺激しかねないことから、現在建設中の三峡ダム周辺の住民を内モンゴル自治区へ移住させるようなことを政府は進めていない。しかし辺境の少数民族地域の活性化を促進するという名目で、人口移動は黙認するだろう。

盟が市になり、漢人が増加してモンゴル文化が衰退してしまうのではないかという印象を与えてしまった事例がある。それは新生鄂爾多斯市の英文表記の問題である。鄂爾多斯市の英文表記は現在、Erduosi となっている。これは漢語の「鄂爾多斯」のローマ字表記(ピンイン)であり、モンゴル文字を転写したものでなければ、モンゴル語口語を忠実に記したものでもない。Erduosi をモンゴル語発音に近い Ordus あるいは Urdu という表記に改めるべきだとの意見はまったく無視されている。

そもそもイケ・ジョー盟を市に変えた段階で、過去にジョーウダ盟が赤峰に、ジェリム盟が通遼にされ

たのと同様に漢語の市名にならなかったのは、地元の大企業「鄂爾多ス羊 ^{カシミヤ} 絨集団」を一層宣伝するためである。つまり、今回の改名は、なにもオールドス・モンゴルというモンゴル諸集団のなかで特別な歴史

をもつ部族集団の存在を強調するために採用したものではない。あるいはこの地域に存在するチンギス・

ハーンの祭殿群としてのオルドスを意識したものでもない。ブランドとしての「鄂爾多斯羊^{カシミヤ}絨」を一

層販売するための策略にすぎない。ちなみに「鄂爾多斯羊^{カシミヤ}絨集団」は1970年代後半から日本の援助で開始された企業である。わずか10数年間で中国においてブランドとしての地位を獲得できたのは、1979年から日本の技術を積極的に導入したことと、地元から供給される原料カシミヤが質量とも安定しているからである。

いまや中国の主要なテレビ・チャンネルで毎日のように「鄂爾多斯羊^{カシミヤ}絨温暖全世界!」(全世界の温もり、カシミヤの〈オルトス〉!)というようなコマーシャルが流れるようになった。「Erdusi を Ordus や Urdu に変えてもいい。ただし、国家工商局で商標登録をしている以上、改名の費用をモンゴル人はもつか」と、地元企業の幹部が言い放ったそうだ。モンゴルの部族名やチンギス・ハーンの祭殿群と無関係の「鄂爾多斯市」の存在に、モンゴル人はしばらく満足しなければならない。地名を含め、少数民族語の固有名詞を「名従主人」の原則で現地音でローマナイズしなければならないことは、中国でも法律上決まっているはずである(全国人大教科文衛委員会教育室教育部語言文字応用管理司 2001:128)。たとえばフフホト市も通常ピンインの Huhehaote とはせずに Huhhot として定着しているのは、周知のとおりである。にもかかわらず、Ordus や Urdu を採用しないで、ひたすら Erduosi で通そうとするよりかは、あきらかに違法であるとしかいいようがない。この問題は一鄂爾多斯市にとどまらず、内モンゴル自治区ひいては中国全土に共通する問題でもあろう。

3: 多雨の年の水事情

新しく誕生した鄂爾多斯市の2002年は、雨の多い一年間だった。雨が多くても、鄂爾多斯市の水不足の問題は一向に解決されていない。

鄂爾多斯市の政府所在地は東勝区(旧東勝市)にある。『東勝市誌』にはつぎのような記述がある。東勝区は標高約1500メートルの高原に位置し、年間降雨量は約400ミリである。東勝の周辺には季節的に水が流れたり、なくなったりする内陸の尻無し河しかない。地下水位は深く、10メートル以上掘らないと水がでない(『東勝市誌』編纂委員会 1997:3-12)。1990年の統計では約14万人の住民を抱えていたが(『東勝市誌』編纂委員会 1997:3-12)、大企業が増加し、人口は以前よりも増えている。

1980年代初頭に私が東勝市の学校に通っていたころ、夏になると断水の日々がつづいた。学校の食堂は営業が中断され、市販の水を買いにでかけたものだった。その後若干改善されたとは聞いていたが、本質的に改善されたわけではない。政府は黄河の水を東勝へ引く「導黄工程」というプロジェクトを一時計画していたが、標高の落差が大きく、莫大な費用がかかるため、中止されて長くなる。そこで、市政府所在地を現在の東勝区から西へ数十キロ離れたところのカーバクシという地へ移転する計画が進められて

いる。カーバクシには河川があり、地下水も豊富で、立地条件が優れているという。このように、「鄂爾多斯羊絨集団」という大企業を優遇し、工業の発展を目指して盟を市に改編したものの、早くも水不足問題で頓挫しているのが事実である。

新生鄂爾多斯市の水不足とそれにとまらぬ移転の話聞いてから、私はさらに西の草原地帯へすすむこととした。

市西部の草原地帯は例年のない緑に覆われている。老人たちの話では1964年以後のことだそう。なかには1950年の共産党政権成立以降、はじめて草が良く成長した年だと表現する人もいる。たしかに至るところで目にする草原の状態は良く、家畜もまるまると肥っていた。

まずオールドス市ウーシン旗西部にある牧業地域で実態調査をはじめた。西部大開発の政策の一環として、経済的に後れた地域を優遇するため、家畜税を徴収しない見通しだと地元ソム(村)の責任者たちが説明していた。当然その情報は牧民たちにも伝わっており、多額の税金に対する不満な声を今年には聞かれなかった。たとえば2000年夏に、ウーシン旗のある牧民が政府に納付していた税金には牧業税、屠宰税(屠殺税)、特産税、農業税、農業附加税、車船使用税、地方教育附加税など多種多様な税金が含まれていた。税金のほかに、地元のソム(村)政府には管理費、教育附加費、優撫費、民工建勤費、民兵訓練費、計画生育(出産)費などを納入しなければならなかった。家族2人からなる所帯で、ヒツジ160頭を飼育し、数畝の飼料用畑をつくっていた場合、1069.83元にのぼる税金と雑費を払わなければならなかった(楊 2003)。牧民たちは「昔、中華民国の国民党は税金が多かったのに対し共産党は会議が多かった。いまや共産党は税金も会議もどっちも多い」と表現していた。2001年までの税金政策と比べれば、諸税免除という政策は魅力的である。税金免除というニュースもおそらく牧民たちの心情を快くしたのであろう。そのため、草原も一段と美しく見えているかもしれない。

また、今年の羊毛の値段は1キロ当たり約14円で、昨年までと違い等級別に売買されず、一律この値段であったという。人々は羊毛値段の高騰をひそかに待っている。

オールドス地域に羊毛を求めてやってくるのは、内モンゴル自治区の西にある寧夏回族自治区の回族商人たちである。彼らは集団でトラックを運転して牧民の家をまわるが、牧民たちの家に入ろうとはしない。牧民たちから出されたお茶や食事も口にしない。直接井戸から水を汲み、屋外で石を使って簡易五徳を作り、自炊する。それはイスラム教徒である彼らが異教徒のモンゴル人の食べ物をタブー視しているからである。モンゴル人女性たちは回族のこのような行為を好意的に受け取る。中央アジアの遊牧民と同様に、モンゴルには接待文化があり、客が訪れたらお茶や食べ物を出してもてなすのが一般的である。もてなしは、女性たちにとって、決して楽な仕事ではない。接待をせずにはすむから女性たちは喜んでいるが、回族商人たちは商売上手で、羊毛を安く買い取ろうとするため、手ごわい相手でもある。

もうひとつの調査地は、農業地域のオールドス市ウーシン旗西南部の河南郷である。河南とは黄河の支流無定河の南に位置していることからの名称である。無定河の上流の名は紅柳河で、いくつかの細い流れと合流してから無定河となる。モンゴル人はこの河をシャルウスン・ゴールすなわち「黄色い水の河」と呼ぶ。ここでは灌漑事情について地元のモンゴル人に聞いた。それによると、1978、1979年頃に掘った機

井と呼ぶ電気ポンプ式井戸はほとんど使えなくなったという。当時は2〜3メートル掘れば水が出ていたが、灌漑農地の拡大により、現在では地下水位が下がり汲み上げられなくなったためである。いまや地下へ100メートルほど掘る深水井戸を造らない限り、灌漑できなくなっているとの証言を得た。深水井戸は個人の力でできるものではない。井戸を掘るため、農民たちは数戸で連携したり、政府に低利子投資を懇願したりしている。

農業は漢人がやるもので、農業をはじめたら、モンゴル人はモンゴルらしさを失う、という見方は大勢のモンゴル人たちのあいだに存在する(楊 1990:35-37)。河南郷にはモンゴル人農民が約2000人ほど居住しているが、彼らの子どもたちが通うモンゴル語小学校は数年前に廃校になった。モンゴル人の子弟たちは仕方なく漢語学校に通うようになっていく。若いモンゴル人を中心に、母語であるモンゴル語を忘れていく人が増えている。母語を忘れ、その上農業に従事していることから、牧畜地域のモンゴル人たちから「漢化した人たち」とも見られている。

4：生態旅遊

環境問題への関心が高まるにつれて(写真1)、生態という言葉が中国でも最近良く使われるようになった。ただ、現代漢語の生態という言葉は、日本語のそれとは多少意味が異なり、人間の手が増えられていない手つかずの自然を指すニュアンスが強いようである。こうしたなか、「生態旅遊」という現象が内モンゴルとその周辺でめだってきている。

生態旅遊とは、名所や遺跡を訪れるのではなく、自然環境の優れた場所へ行くことを意味する。隣接の陝西省や寧夏回族自治区から、内モンゴル自治区西部へ生態旅遊に訪れる観光客が年々増加している。観光客らは生態保護の名目で囲まれた草原を目指す。このような草原を「生態開発区」と呼ぶ。

「生態開発区」とされる観光地(写真2)は、内モンゴル自治区西部に位置するオルドス市のオトク旗とオトク前旗に数カ所点在する。いわゆる生態開発区と呼ばれる小さな草原は、農耕化された地域に囲まれている。オルドスの草原が開墾され、大面積の農耕地が出現したのは、1950年以降における漢族農民の入植の結果である。漢人農民の手が届かなかった地域にモンゴル人が居住し、細々と牧畜を営んできた。漢人農民の居住地に比べれば、植生も破壊されず緑がたくさん残る。このようところが生態開発区となり、旅遊という観光資源にもなったのである。

モンゴル人牧民たちが生活の場としている草原は漢人の目に生態の良い場所として映ったため、開発の対象とされている。政府や大手企業は開発と保護を名目に、草原への進出を進めている。現在、草原を生態開発区として開発しているのはいずれも化学工業集団やカシミヤ工場集団の経営者たちである。

このような生態旅遊は、世界的に見られるエコ・ツーリズムの本質と通ずる一面がある。橋本は『観光人類学の戦略』のなかで、エコ・ツーリズムの登場についてつぎのように分析している。世界の先進国は自らの手で自然を破壊しながら、自然の大切さを説く。そして自分たちの生活スタイルをなんら変えずに、途上国の自然保護を語る。それには地球の環境危機の議論を先延ばししようというねらいすら見え隠れ、

自然保護の名目で新しい開発を企む可能性もある。エコ・ツーリズムは自然保護の美辞を弄したビジネスであると指摘している(橋本 1999:266-289)。オルドス市の現状はまさにその中国版であるといっても過言ではなからう。

オトク旗とオトク前旗は中国の生態保護重点地域に指定されている。いわば、環境破壊のもっともすすんだ地域と認定されたのである。破壊された環境をもとどおりに復元することを「開発」と表現することからも、中国における独自の生態観の一端を垣間見ることができよう。

5 : 生態移民と牧民新村

すでに冒頭で触れたように、内モンゴル自治区オルドス市は歴史上「河套」と呼ばれ、漢族の中原王朝と北方の遊牧民が勢力をはって対峙してきた地域のひとつである。漢人側が強くなったときには河套地域に進出して都城を建設し、屯田を行った。このような屯田地域の跡はほとんど例外なく塩田化がすすみ、その周辺には沙漠が広がっている。これは最近中国の研究者たちにも認められている(景愛 2000:136-176)。

河套すなわちオルドスは南と北西が長城に囲まれている。長城に沿ってその両側に延々と数百キロにのぼる沙漠の帯がある。早くとも 18 世紀なかばころから漢人農民に開墾された結果である。このように、漢人農民が活動してきた地域は、すべて環境破壊という結果を招いている。

一度破壊された自然環境を元通りに回復させようと努力することを中国では「生態建設」という。生態建設の一環として、「生態移民」があることを内モンゴルの新聞『鄂爾多斯日報』は 1999 年 12 月 8 日付けで伝えている(『鄂爾多斯日報』 1999 年)。たとえば、オルドス市オトク前旗マンハト・ソム(村)がそのような地域のひとつである。マンハトとは「沙漠のあるところ」との意味である。沙漠化がすすんだため、生計維持が難しくなり、他の地域への移住が政府主導で行われている。このような「生態移民」現象は内モンゴル自治区の各地で行われており、各界の注目を浴びている。たとえば、台湾に拠点をおく蒙蔵委員会編集の『蒙蔵之友』78 号は『聯合報』の記事を引用するかたちで、内モンゴル自治区東部エベンキ族の「生態移民」について伝えている(『蒙蔵之友』78 2002:20-21)。また、『朝日新聞』も 2002 年 10 月 12 日付けで「森追われる〈最後の狩人〉—ヤクート族、中国の定住政策で」と題する記事を出している。

沙漠のマンハト・ソム(村)からの移民たちはオトク前旗政府所在地のオルジャチ鎮周辺などの地域にうつされた。移住費は政府が拠出する。新しい居住地は整然と区画され、「牧民新村」との名称が与えられている。かつて、長城の北側で形成された入植漢族の村落を「社会主義新農村」と呼ばれていた。「社会主義新農村」が沙漠化し捨てられたあと、「牧民新村」として生まれ変わろうとしている。

政府は牧民新村の住民一戸につき 20 畝の灌漑農地と乳牛 1 頭を買いあたえる。こちらは低利子借款で、3-4 年かけて返済することになっている。「牧民新村」から生産された牛乳は寧夏回族自治区の首府銀川市などに運ばれる。オルドスは寧夏回族自治区に羊肉、牛乳などを提供する食料基地となりつつある(写

真 3)。

6: 良い年のナーダム祭

オルドス市から黄河を西へ渡って、寧夏回族自治区に入った。ここで、オルドス市を訪れて羊毛や羊を買う回族商人に話を聞いたあと、賀蘭山をこえてアラシャン盟に入った。アラシャン盟は、西から東へエジナー旗、アラシャン右旗、アラシャン左旗という3つの旗からなる。東西交通の歴史的な視点から見れば、アラシャン地域は「河西走廊」の要所に位置する。南北を軸にすれば、モンゴル高原の遊牧民が南下して中原を脅かすときのルートであり、長城以南の政権がたまに北上して反撃するときの道でもある。そして現代中国においても、アラシャン盟がもつ地政学的な意義は失われていない。

このようにアラシャン盟の存在が重要であったことから、この地のモンゴル族は、中華民国時代から現在まで、エジナー旗は甘肅省に、アラシャン左右両旗は寧夏省（1950年以降は寧夏回族自治区）に、それぞれ領有されたことがある。最終的にアラシャンは内モンゴル自治区の一盟としての地位を獲得するが、これには複雑な民族関係と民族政策が反映されている。

一昨年（2000）、アラシャンはひどい干ばつにみまわれた。そのため、家畜が群れ全体として妊娠できないくらい牧民たちの生活に重大な影響をもたらしたことが伝えられている（小長谷 2001:83-84）。今年は往年とまったく違い、見渡す限りの沙漠性草原は緑に覆われていた。

今年は良い年となったこともあって、アラシャン盟政府所在地のバヤンホトでは、牧民たちの祭典、ナーダム祭が開催されていた。バヤンホトとは「豊かな町」との意である。ナーダム祭に欠かせないモンゴル相撲、ラクダの競争などモンゴルの伝統的なスポーツも披露されていた。漢族や回族の商人たちは、ナーダム祭の会場で商売に励んでいた。定住して町に住むモンゴル人たちも、これを機会に、忘れていた馬の背中に跨って写真に収まっていた(写真 4)。

1940年末から1950年にかけて、この地で西蒙自治運動が展開されていた。そのときの当事者たちで今も健在な人に話を聞いたかったが、ナーダム祭の宴席から彼らを引きはなすことはできなかった。雨が多く、草の成長も良い年には酒の消費量があがる。良い年の過ごし方だという。

アラシャン・モンゴルの良い年の快適な暮らしをこれ以上邪魔しないよう、私はアラシャン左旗東部のバヤンジラタイ鎮を目指した。バヤンジラタイにすむイスラム教を信じるモンゴル人たちの実態を調べるための旅である。これらのモンゴル人の歴史と現状については、近いうちに別稿でとりあげる予定である。

7: 終わりに—今後の調査方向

以上、極めて短期間の調査であったが、それでも現在の人々活動から近現代における社会変化の脈拍をよみとることができよう。大量の漢人農民が入植してきた20世紀初頭から、オルドス高原やアラシャン盟は多民族地域と化した。モンゴル人が営んできた遊牧が次第に衰退し、半農耕・半牧畜の生活様式が定

着するようになった。1950年代以前、このような変化はまだ緩やかなものであったのに対し、社会主義集団化時代は未曾有の速度ですすんだ。そうしたなか、「水環境」の点でもかつてない問題に直面するようになってきた。中国が国をあげて西部大開発を推進している現在、都市化や工業化の流れは当分つづくであろう。少数民族側も、政府主導の開発政策に協調し、ともに豊かな生活を実現させようと努力している。都市化・工業化＝進歩と発展という構図のなかで、民族文化をいかに維持し、自然環境の破壊をどのようにさけるかについて、さまざまな試みが展開されている。

「イケ・ジョー盟が鄂爾多斯市になったのは、^{カシミヤ}〈鄂爾多斯羊 絨集団〉がこの地にあるからだ。〈鄂爾

^{カシミヤ}多斯羊 絨集団〉が大量のカシミヤを吸い上げて、その製品を日本などへ輸出しているから、ヤギの飼育が増えた。ヤギが増えたから、草原が沙漠化した」。これは、現地オールドス市に住む一部知識人の見方である。このような見方はいまのところ世論の主流になるようなことはなかろう。というのも、大多数の人々は多少環境破壊の代価をはらってもまず経済的に豊かになることを優先したいと考えているからである。市場飽和の情報がゆっくりと現地の牧民に伝わるまで、カシミヤの増産を目指す人は減らないだろう。しかし、人々がすでに視線の矛先を工業先進国日本にも向けるようになった現在、グローバルな立場に立脚した調査研究をすすめなければならないだろう。

注記

この調査報告書の一部文章は、楊海英「2002年夏 中国内モンゴル自治区オールドス市とアラシャン盟調査報告」（『静岡大学人文学部 人文論集』）と重なっていることを断っておきたい。

参考文献

阿拉善盟地方志編纂委員会弁公室

1988 『阿拉善盟史志資料選編』第三輯，銀川:寧夏社会科学院印刷廠。

『東勝市誌』編纂委員会

1997 『東勝市誌』，呼和浩特:内蒙古人民出版社。

景愛

2000 『沙漠考古通論』，北京:紫禁城出版社。

橋本和也

1999 『観光人類学の戦略』，京都:世界思想社。

『呼和浩特晚報』

2001年9月29日。

小長谷有紀

2001 「モンゴル牧畜システムにおける水環境の危機」『モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究』(科研報告書, 課題番号 10041052)。

内蒙古自治区編輯組

1985 『蒙古族社会歴史調査』, 呼和浩特:内蒙古人民出版社。

蒙蔵委員会編

2002 『蒙蔵之友』78号。

Oghonus Chogtu(楊海英)

2001 『国外刊行的鄂爾多斯蒙古族文史資料』, 呼和浩特:内蒙古人民出版社。

全国人大教科文衛委員会教育室教育部語言文字应用管理司

2001 『中華人民共和国国家通用語言文字法学习讀本』, 北京:語文出版社。

陶布新

1983 「内蒙古的“小北京”一定遠當」『内蒙古文史資料』第十輯, 呼和浩特:内蒙古人民出版社。

楊 海英

1990 「鄂爾多斯無定河流域定住蒙古民族の現状」『豊日史学』54・2/3:23-38。

2002 「2002年夏 中国内モンゴル自治区オールドス市とアラシャン盟調査報告」『静岡大学人文学部 人文論集』。

『朝日新聞』(夕刊)

2002年10月12日。

『鄂爾多斯日報』

1999年12月8日。

写真のキャプション

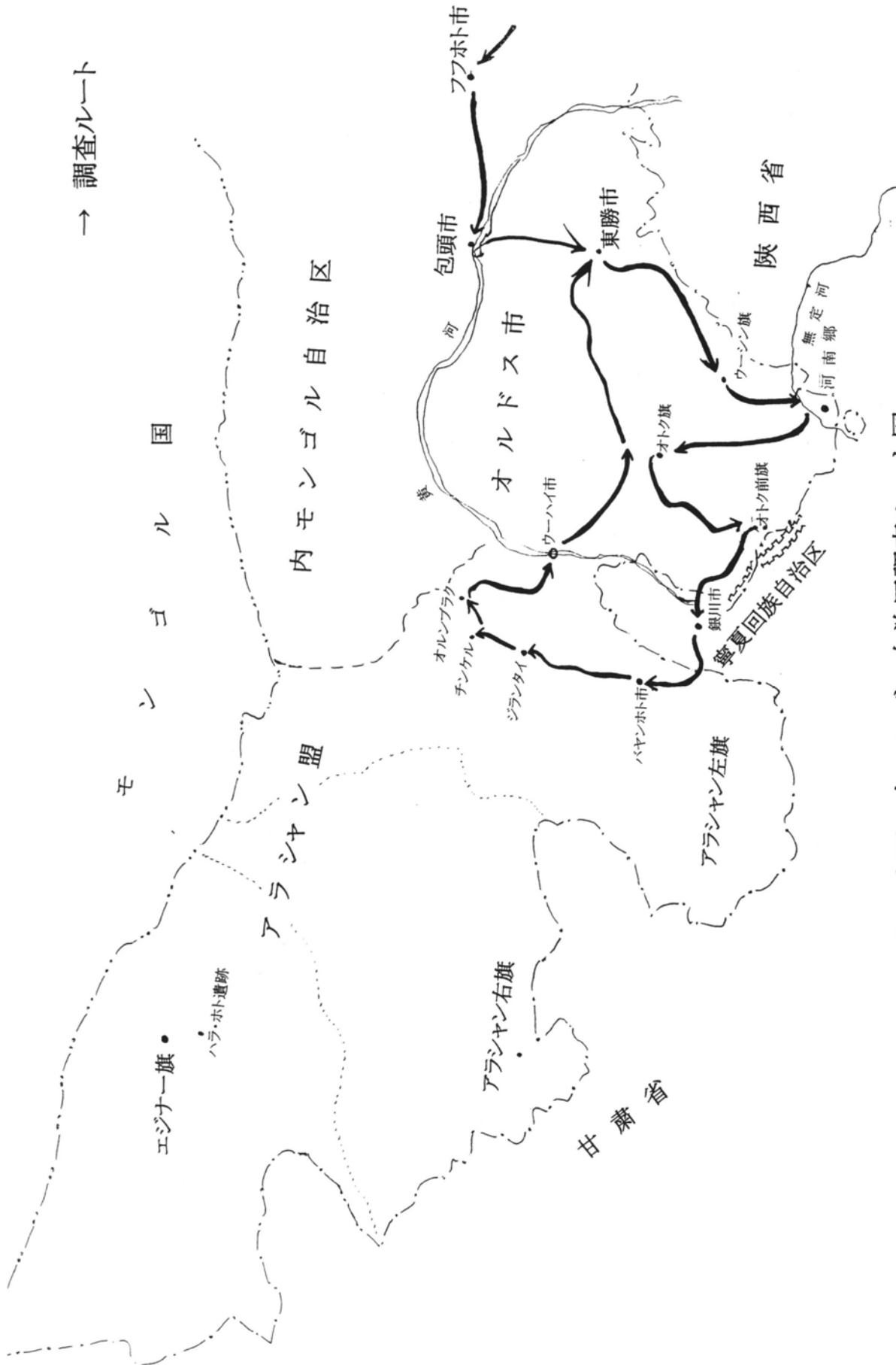
写真1 自然環境保護を呼びかける看板。

写真2 生態保護区という観光地。

写真3 ムスリム用の羊肉や牛乳を生産する工場の看板。

写真4 馬に跨って写真撮影をする定住モンゴル人。

→ 調査ルート



2002年 中国・内モンゴル自治区調査ルート図



写真1 自然環境保護を呼びかける看板。

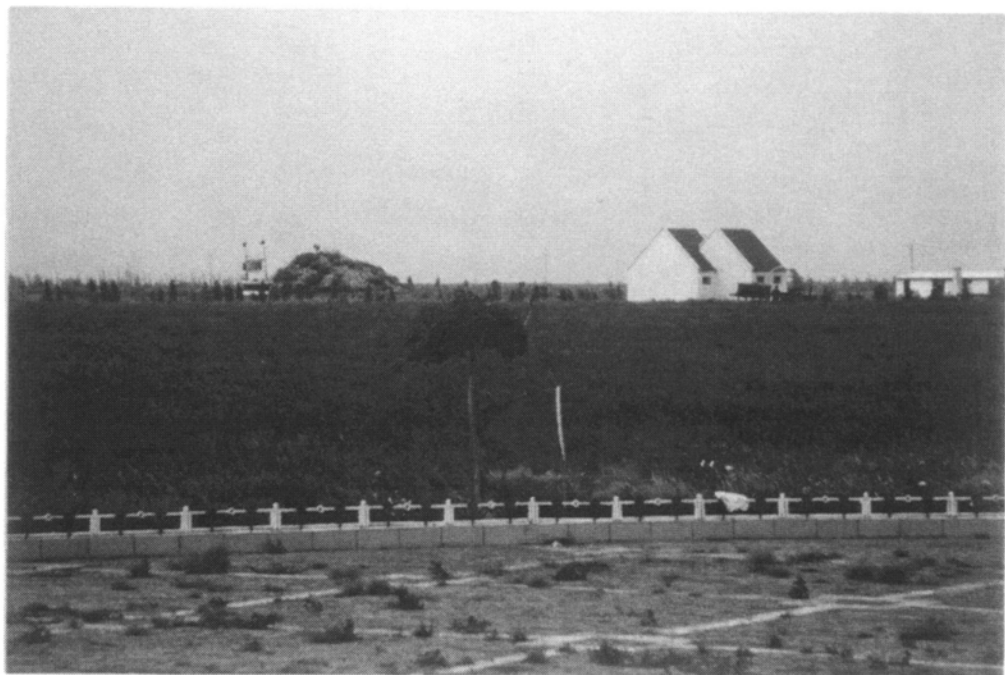


写真2 生態保護区という観光地。



写真3 ムスリム用の羊肉や牛乳を生産する工場の看板。



写真4 馬に跨って写真撮影をする定住モンゴル人。

黒河上流域の調査報告

中村知子 (東北大学)

1. 調査流域の概要

本論文は、2002年～2003年に行った黒河の上流域における民族学的調査の報告を行うものである。本報告が扱う調査は甘肅省肅南裕固族自治県(地図1参照)にて2003年8月16日～9月10日(尾崎、才木多、中村)に行われた。

黒河は中流域の水利用及び下流域の水不足問題で注目されている内陸河川である。特に黒河下流部の水不足に関しては中国政府当局の注目も高く、2000年から黄河、塔里木河と並び中国国務院の指導の下「調水」(給水調節)が行われるようになった[中国水利報社 2001:117]。しかしその一方で上流域は“黒河の水源地域”であるとの



地図1 調査流域地図

認識は持たれているものの、そこで生活する人々との関連で水利用が語られることは少なく注目度が低いのが実

情であった。しかし近年、80年代の伐採による涵養林の減少、そしてそれに伴う地下水の減少、また過放牧による自然荒廃などが指摘されてきており、環境保全対策の実施も行われ始めている。本調査流域には約6万人の人々が生活しているが[黒河流域水資源 p14より算出]、彼らがこれらの政策によって受ける影響は新たな黒河流域の問題提起の一つとして注目すべき点であると筆者は考えている。その為にもまず人々の生業形態及び水利用、そして水に関する認識を把握することは必要不可欠であるだろう。本論では、第2章で調査地点の基礎データ及びその特徴を記し、第3章ではそこで生活する人々の類型化を試みる。そして第4章ではその類型の具体的事例を紹介し、第5章では各々類型の水利用及び水認識に関し記述することで、当地域の水利用および生業に関する見取り図を示していきたい。

本地域にはチベット族、ユーグ族、モンゴル族など様々な民族が居住しており、その生業も第3節で示すように様々である。このような多様な民族分布は以下のような地勢的条件に加え、歴史的条件によりもたらされた結果である。右の断面図は調査

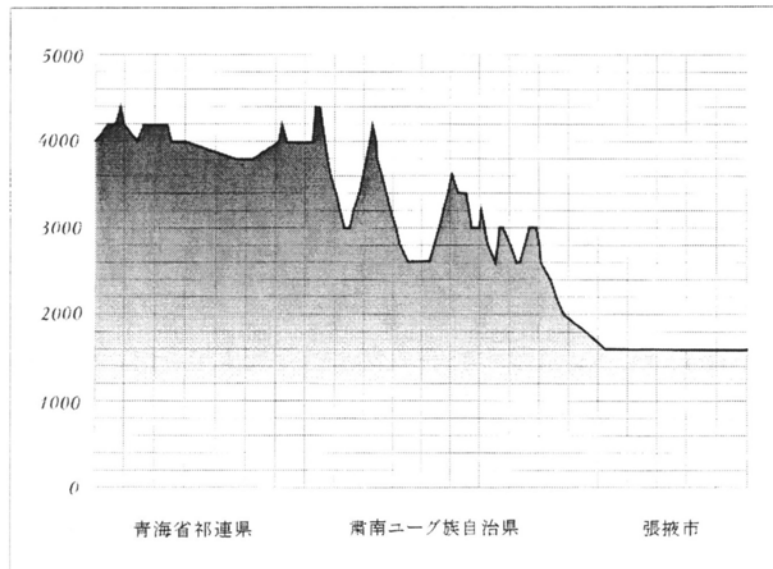


図1 黒河上流域断面図

地域を張掖から肅南県寺大隆林場を通り、青海省祁連山城西側に至るまでを直線で切ったものである。これを見ると、青海省側には青蔵高原へ連なる平原、張掖側には内モンゴルへと連なる平原が広がっているのに対し、肅南ユウグ族自治県側は基本的に急勾配であることがわかる。実際、筆者の現地に立った印象としても、祁連山側は広々とした河谷平原であるのに対し、肅南県側は 200m 間隔の等高線に反映されないような細かなアップダウンも含め、狭い河谷に山が迫っているような見晴らしの悪い地域が多く感じられた。

さて、こうしたマクロな地勢は、大雑把ではあるがそこに居住する人々の生業を伝統的に規定してきた。張掖の北に連なる平原は主として乾燥、青蔵高原は主として低温により、その大部分は農耕に不適である。そのため、この両地域の主な生業は牧畜を中心としたものであった。さらに、両地域の環境により適応的なスタイルとして、前者はヤギやラクダを特徴とする、後者はヤクを特徴とする牧畜が営まれてきた。そして、大雑把な分類ではあるが、民族的には前者がモンゴル族、後者がチベット族に対応する。厳密には、清朝時代は黒河上流の八宝河流域を含む青海東部にはモンゴル王侯の統治する旗が存在したが、現状としては青海においてモンゴル族の「チベット化」が見られる点からも、当地域は基本的にはチベット族的な牧畜、さらには生活のあり方に適合的だということがうかがえる。

こうした観点から見ると、青蔵高原から内モンゴル平原へと下る祁連山脈北麓は両牧畜地域の境界であるといえる。その点で、本地域に住むユウグ族が、住居及び飼育家畜、食文化などの面ではチベットのつまり高地的であるが、言語的にはモンゴル系（東部）もしくはトルコ系（西部）という乾燥地的な特徴を持つ牧畜民であるのは非常に示唆的である。つまり、自然生態的側面だけでなく、そこに住む人々の文化的側面においても、この地域は境界的な存在となっているのである。また、最も標高の低い側に現在モンゴル族が居住しているというのも、この文脈から考えると整合的な事象である。

次にこの地域の農耕に関して考察してみたい。農業可能な条件という点で水へのアクセスおよび気温が重要になる。広域的にこうした条件を満たす地域は、降水量は少ないものの祁連山脈から流れ出る水に恵まれており気温が比較的高い祁連山麓の扇状地、つまり張掖を含めた河西回廊となる。この地域は古くから農耕地域として存在し、特に現在は漢族人口が多い人口密集地帯となっている。

それでは、標高が上がるとこの様な条件はどう変化するだろうか。標高の高い地域は河西回廊と比較して降水量は豊富である一方で低温が問題となってくる。ただし、細かい条件は祁連山脈を挟む肅南県側と祁連山側では異なる。祁連山脈南麓の河谷平原については、山の南麓であること・平原であることに加え、肅南県城など北麓より曇天率が低い。そのため、祁連山脈南麓の河谷平原では農耕の可能性が高く、事実、土地面積に占める農耕地の割合は北麓に比べ高くなっている^①。現在この地域では、回族農民が耕作を行っている。彼らが当該地域へ移住してきたのは民国期以降であり、それ以前は現在の耕作地でもユウグ、モンゴル、チベット族が牧畜を行っていたのであるが、こうした歴史的経緯はこの地域が可耕地としてマイナーであった点と、各エスニック集団の力関係の変化を反映していると理解出来る。なお、祁連山脈の北斜面においては、もともと地勢的に河谷平原が乏しく、現在でも農耕の行われ

^① 『黒河流域水資源』 p.14 の表から算出すると、南麓側は耕地面積の割合が約 40%であるのに対し、北麓側は約 26%である。

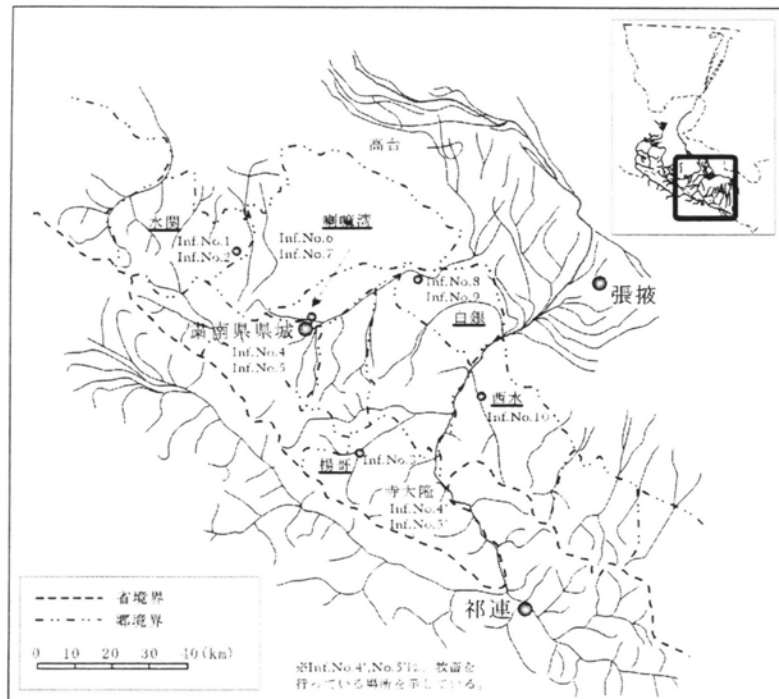
ている地域は狭小であり、しかも農耕は大躍進～文革期に当該地域へ流入してきた漢族が従事しており大幅に過去へさかのぼるものではない。確かに祁連山脈の南北を問わず牧畜民が冬季の飼料用として燕麦などを小規模に栽培する事例が見られるが、これは人間の食糧用ではないのでむしろ牧畜に付随する作業と見なすほうが適当と思われる。

最後に、現在この地域に期待されている役割について述べたい。まず、少なくとも甘粛省のエリアに限れば、この「黒河上流」^②地域は水源地帯という位置づけである。つまり、河西回廊のオアシス地域で使用する水を生産・保持する地域として期待されている。その明確な政策的表現は、後で具体的に述べるような当該地域における環境保全・植林などの運動およびオアシス地域の用水確保を目的とするダム建設である。また事実問題として、この地域の住民は、特に標高が高くなるにつれ自らの必要水量に関して不足を感じることはほとんどない。もちろん、森林伐採に伴うと思われる河の流量減少などは彼ら自身認識はしているものの、彼らの水使用量から見れば不足していることはない。また伐採を行っている主体は彼らではなく、外部の人々である。つまり後述するようにこの地域に居住する人々にとって、基本的に水問題とは外部との関係によってもたらされる問題であるというのもまた否定できない事実と思われる。

2. 当該流域における調査地点の位置づけ

今回は、地図上に示した5地点10世帯から聞き取りをおこなった。この地域は山岳地域に当たるため高度差が激しく、それに伴い気温、降水量など自然環境も多彩である。そのため狭い地理的範囲内にもかかわらず、調査地点の特徴はそれぞれ大きく異なってくる。

本章ではこれらの点を踏まえ、現地収集した各郷の人口、世帯数家畜頭数などの統計データを明示するほか、自然環境や主な生業などから各地点の特徴を明らかにすることをやりたい。



地図 2 インフォーマント分布図

^② この地域は青海省側のいわば「黒河最上流」とはさまざまな点で異なっているのだが、「最上流」は甘粛省が直接的に干渉し得ないこともあってか、少なくとも甘粛省レベルの言説・政策において対象となる最も上流域は実際上ここまでである。

2-1. 水関郷

水関郷人口家畜頭数統計表

	人口	戸数	ヒツジ	ヤギ	ウシ	ウマ	ロバ・ラバ
西岔水村	402	114	15426	1231	1153	162	146
西河村	290	38	3387	1576	141	11	31
合計	692	152	18813	2807	1294	173	177

【行政幹部からの聞き取りより作成】

水関郷は、標高は 2570m、年平均降水量は約 291.5mm^③、年平均気温 2.0℃[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994:36-39]であり、半湿潤山地草原気候区に属する[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994:22]。

郷政府関係者の話によると、住民の 80%が牧畜を行い、残りの 20%が農業を行っているという。海拔 2600m以上は牧民の割合が高く、高度が下がるにつれ農民の割合が増える。ただし家畜の飼草として育てられることの多い青稞、燕麥は 2600m 以上でも栽培可能であり、牧民が自家消費用にこれらの作物を育てるケースは多い。

また、近年の環境保護政策の一環として、今後「退牧還草」(牧畜を中止し、牧地を自然の草原に戻す)を行う予定である。この政策は、2003年8月22日に県で決定された。調査当時は政策の宣伝中であり国から補助金が下りてくるのを待っているところであったため、政策実施に至ってはいなかった。具体的には休牧^④を行う予定であるという。

この地域は黒河の本流からは外れている地域ではあるが、黒河本流の中流域に位置する高台县が郷の領域内にダムを建設し、取水した水を独占的に利用している。ダムは摆浪河、東河、西河の3河川に建設されており、管理も高台县が行っているのみならず、もし水関郷の人がダムに貯水された水を使う場合には使用料を支払う必要があるという。こうした意味で、この地域は黒河本流に隣接する地域、特に中流の農耕地域と深い関連があるといえる。

2-2. 楊哥郷

楊哥郷人口家畜頭数統計表

	人口	戸数	ヒツジ	ヤギ	ウシ	ウマ	ロバ・ラバ
楊哥村	248	53	11181	0	3188	179	0
寺大隆村	212	36	5139	0	2890	167	2
合計	460	89	16320	0	6078	346	2

【行政幹部からの聞き取りより作成】

^③ 大河区のデータである。

^④ 「休牧」: 家畜をすべて売却(無税)、5年間草場を閉鎖する、保証金は1ムーあたり15元、さらに食糧配給があり、草場の税金も無税となる[郷政府関係者談]。

楊哥郷は、楊哥村と寺大隆村の2村からなる。海拔2200m（黒河の谷底）～4500m（山頂）、年平均降水量は約401mm^⑤、年平均気温0.6℃[甘粛省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:36-39]であり、他の地域に比べ年平均降水量が高く、半湿润山地草原気候区に属する[甘粛省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:22]。

黒河本流の直接的な上流域に当たるこの地域には涵養林が広がっている。インフォーマントの話によると、70年代～80年代にかけて森林伐採が行われ、一日に50台前後のトラックが木材運搬のために行き来したそうである。しかし、黒河の水量が減少し、特に酒泉、張掖、武威の農業用水が減少する兆しが見られた為、2002年に全面的に伐採を禁止したという。

この地域の居住者の殆どは牧畜に従事している。2村には統計上460人が登録されているが、県城から遠く、また郷の中心地のインフラ状況も思わしくないため（病院や学校事情など）、老人、子供は県城に居住するケースが多々見られる^⑥。また、牧畜労働者を雇い楊哥郷で牧畜をさせ、家族は郷中心地へ移住する場合も多々ある。「牧畜に直接的に従事している者以外は現地には住まない」という形式は、この地域の一つの特徴であるといえる。

牧畜に従事している者は年3回季節移動をおこなう。冬・春季は郷中心にある固定家屋に住み、夏は標高の高いところまで上りテント居住をして放牧を行う。秋になるにつれ少しずつ山を下り、冬に郷中心地に下りてくる、というパターンである。筆者が調査を行った9月は、牧民は秋営地に赴いている時期であり、標高の低い郷中心地には殆ど人がいない状態であった。

2-3. 喇嘛湾郷

喇嘛湾郷人口家畜頭数統計表

	人口	戸数	ヒツジ	ヤギ	ウシ	ウマ	ロバ・ラバ
白庄子	29	207	2195	367	0	0	55
喇嘛湾	23	358	3360	0	0	0	78
西柳沟	54	194	2618	0	0	0	87
旧寺湾	74	83	1106	0	0	0	21
紅辺子	36	149	1683	88	0	2	31
合計	216	991	10962	455	0	2	272

【行政幹部からの聞き取りより作成】

喇嘛湾郷は黒河支流の梨園河沿いにあり、県城に隣接した郷である。詳細なデータは見つからなかったものの、県城から1kmも離れていないところに位置するため、標高2000～2500m[甘粛省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:21]、年平均気温3.6度、年平均降水量は253mm[甘粛省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:21]、年平均気温3.6度、年平均降水量は253mm[甘粛省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:21]。

^⑤ 寺大隆のデータである[甘粛省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:39]。

^⑥ この小学校は、教師1人、生徒2人だという。

固族自治県地方誌編纂委員会 1994:36-38]前後であると推測される。

郷内の生業は牧畜業が多いものの、農業も行われており小麦、青稞、大豆、豌豆、ゴマ、ジャガイモなどが植えられている。

2-4. 白銀モンゴル族自治郷

白銀モンゴル族自治郷人口家畜頭数統計表

	人口	戸数	ヒツジ	ヤギ	ウシ	ウマ	ロバ・ラバ
西牛毛	119	36	964	6352	66	44	70
東牛毛	121	30	422	8082	25	32	86
榆木庄	201	40	0	105	38	0	4
黒窑洞	226	51	0	90	77	0	0
合計	667	157	1386	14629	206	76	160

【行政資料より作成】

※閲覧した行政資料の人口と政府関係者の話に数的開きがあったが、この表は行政資料に基づいている。但し、以下の記述は行政幹部の話に基づいており、数値もそれに従う。行政幹部の認識では“郷全体で200戸800人がいる”とのこと。

白銀蒙古族自治郷は黒河支流の梨園河沿いにあり、県城傍を流れる河の下流域にあたる地域である。標高約1880m、年平均気温5.8度、年平均降水量は170mm[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:36-38]であり、他の地域と比べ気温は高く、降水量は少ないという特徴がある。気候は乾燥草原気候区に属し、草原も半荒漠草場である。郷内の西南は標高が高く、東北が低い地勢となっている[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:18]。

東牛毛村、西牛毛村はモンゴル族の村であり、郷全体でモンゴル族は65-66戸、260人おり、皆牧畜を行っている。郷の総家畜頭数は20,000頭いるがそのほとんどはヤギであり、400頭のみが大家畜である、と政府関係者は認識していた。私有化時代にはラクダが200頭いたものの、旱魃の影響により現在は1頭もない。一方漢族は140戸540人おり農業を行っているという。

農業は標高の最も低い梨園河周辺行われる一方でその他の土地は全て牧地として利用されており、土地面積は耕地1,000ムー、草原710,000ムーとなっている。

2-5. 西水チベット族自治郷

西水チベット族自治郷人口家畜頭数統計表

	人口	戸数	ヒツジ	ヤギ	ウシ	ウマ	ロバ・ラバ
芭蕉湾村	290	70	11082	2589	263	32	57
楼庄子村	199	53	7064	1931	266	0	49
二加皮村	180	39	8106	0	561	26	21
正南溝村	178	41	7427	0	375	26	31
八一村	286	70	10061	1498	879	43	69
合計	1133	273	43740	6018	2344	127	227

【行政幹部からの聞き取りより作成】

黒河本流沿いにあるこの郷は、ダム、西水林業、張掖地区処水源涵養研究所などがあり、また筆者が調査を行った時期には黒河を利用した水力発電所の建設が進められるというように、黒河水利用において重要な役割を果たしている地域である。

郷政府のある西水の海拔は 2100m[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994:36]、郷の東南部が高く、西北部が低い地勢になっている[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994:17]。年平均降水量は約 368mm、年平均気温 4.4℃[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994:36-39]であり、湿润山地草原気候区に属するという[甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994:17]。現地行政関係者の話によると、利用可能な草原は 890,000 ムー、森林 400,000 ムー、耕地 1,138 ムーである。耕地は川沿いの低地に広がり、山地の上部北斜面が森林地帯、そして中間部が草地という土地利用になっている。

この様な自然環境を生かし、郷内の大半の住民は半農半牧を行っている。しかし近年、就学、出生率低下、死亡、「農転非」(農業人口が非農業人口になる=都市の仕事について、家族全員で移動していく)、などの理由により人口減少^⑧が続いている(郷政府関係者談)。また、「草原も家畜も少ない」という理由から明花開発区(許三湾)に移住した者も 8 戸 10 数人いる。この様な事例は各村にみられる。さらに近年のダム建設により、牧畜方法を変えざる得ない状況にもなっており、様々な問題を抱えた郷であった。

3. 生活様式をめぐる諸類型の提示

今回調査を行った世帯は、牧畜、農業、もしくは牧農兼業という生業形態で生活をしてきた。これらの事例を単純に生業形態別に 3 分類することも可能ではあるが、応用可能性を考え本論では生業の質に着目して分類を行いたい。

生業の質を決定する要因には、標高差に伴う自然環境の差異、川沿いであるかどうかなどの立地条件、

⑧ 88-89 年には約 1400 人住民がいた。

そして民族性の違いが大きく起因しているように見受けられる。例えば事例上農業可能かどうかのラインは、まず海拔 2600m である[インフォーマント談]こと、さらに川沿いの土地を保持しているかどうかで定まる。しかしながら川沿いの土地を保持している人が必ずしも農業を行うわけではなく、牧畜農耕を選択するのは個人の文化的社会的背景（例えば民族性など）に起因している。そのため類型化は自然的ファクター、文化的ファクターという両者の違いに注目しつつ行う必要があるのだが、このような視点から見た場合インフォーマント 10 世帯の事例は次の 3 つに大きく分類できるだろう。

①高地牧畜

まず、標高が 2600m 以上に属する地域で牧畜を行うケースである。このケースは自然環境に特に影響を受け、寒冷地に強いヤク、チベットヒツジ、ヤギを飼育している。また、家畜の飼草として青稞、燕麦を栽培する世帯も多い。この生活様式は民族的差異による影響はあまり見られなかった。

このケースには楊哥郷、水関郷の一部が含まれる。

②牧農兼業・農業

このケースは標高 2600m 以下、2000m 以上のインフォーマントに多く見られた事例である。水関郷の一部、县城近辺、西水チベット族自治郷がこれに相当する。改良ヒツジ、ヤギ、ヤクなどを少量飼い、同時に農業を行う。農作物は小麦、蚕豆、えんどう豆が多い。農作業時期は、標高の比較的低い地域は 3 月～7 月、高い地域は 4 月～8 月と、どちらも計 5 ヶ月間であった。

一例農業のみの世帯 (Inf.No.7) も見受けられたが、彼の場合漢族であること、そして別の職業からの農業転向^⑥であることなど、他のインフォーマントと違った要因があった。しかしながら生業暦及び農業方法は牧農業兼業の世帯の“農業部分”と大差なかったためこの分類に当てはめる。

③乾燥地牧畜

これは主に標高 2300m 以下の、乾燥域において見受けられた事例である。この例には白銀蒙古族自治郷のモンゴル族インフォーマントが相当する。ここの住民はヤギのみの飼育であり、類型①と比較しある家畜に特化した牧畜である。インフォーマントによると、「以前はウシ・ウマを飼育していたが、漢族が耕している川沿いの畑を荒らしたことで、また旱魃といった要因により飼育することが出来なくなった」ということである。

そして類型③と類型①との差異は営地選択の条件にも見出せる。先述したように類型①は高度差に伴う植生が営地選択の要因であるのに対し、類型③の場合、5 節で扱うように水場の選択が営地選択の要因となっているのである。

^⑥1933 年高台で生まれた。酒泉紅旗被服廠で労働者をやっていた。肅南には服を縫える人がいないので、県が呼び寄せた。59 年に大河区被服廠（公銷社とも言っていた）へ移動。最初、大河でも裁縫の仕事をしていたが、62 年に「精兵簡政」の政策で工場の縫製員たちはリストラされた。その後は農民になり、85 年に肅南へ戻って農業を続けた。

4. 各類型における典型的な事例の紹介

①高地牧畜 (Inf.No.5)

- 居住地 : 甘肅省肅南ユウグ族自治県紅湾寺鎮 ※ただし登録地(所在単位)は楊哥郷寺大隆村
- ※生業暦で利用する Inf.No.3 の情報: 甘肅省肅南ユウグ族自治県楊哥郷楊哥村
(北緯 38 度 32 分 42 秒、東経 99 度 45 分 03.5 秒、標高 2950m)
- 世帯主 : A.LF (M、1937 年生まれ)
- 世帯構成 : 妻 (1947 年生まれ、ユウグ、既婚、同居、牧民)
- 員 <以下、同敷地内に住んでいるものの家計は別の家族>
- 息子 (1964 年生まれ、ユウグ、幹部)、息子の嫁 (1965 年生まれ、ユウグ、牧民)、
- 孫娘 (1992 年生まれ、ユウグ、学生)、孫息子 (1996 年生まれ、ユウグ、学生)
- 家畜構成 : 綿羊(母畜 80、去勢畜 20、子畜 20)、ヤク(種畜 1、母畜 9、子畜 8)
- 収入構造 : ヒツジ売却 30 頭×300 元=9000 元、ヤク売却 5 頭×1000 元=5000 元、バターとチュラ 4000 元、羊毛 4000 元
- 支出構造 : 税金(牧業税年間 280 元)、生活物資月 1000 元前後(病院代が結構かかる)、牧業生産支出年間 100-150、用水費(水道代一人年間 10. s 8 元)

もともと寺大隆の住人であったが、10 年前にインフラの不整備^⑨などを理由に県城へ移住してきた。移住の際、寺大隆で自分の家畜を飼育させる牧畜労働者を雇い、以来牧畜労働者が家畜を飼育する形式を継続させている。牧畜労働者との契約内容は次のようになっている。

<群れの管理>

両者の所有分をまとめて放牧。

<牧畜に伴う出費>

- ・薬品…疫病防止の薬品は雇い主の負担。他の薬品は牧畜労働者負担。
- ・飼料…牧畜労働者負担。
- ・税金…雇い主の負担。

(補足) 88 年に家畜囲い建設に 1 万多元投じたが、その際の資金は雇い主が負担した。

<畜産品の分配>

- ・羊毛…半分ずつ分配。
- ・子羊、子ウシの分配…10 頭のうち 4 頭が雇い主(インフォーマント)、6 頭が牧畜労働者の取り分。
- ・牛乳…6-9 月はインフォーマントが寺大隆に住み、自分で搾乳(妻、娘が行っている。毛? 子に住んでいる。バターやチュラは県城に持ってきて売る。)

^⑨ 「楊哥には医者もない、しかも交通も不便」[インフォーマント 5 談]。彼によると、このような生活条件が理由の県城移住は一般的らしい。

上述したように現在は牧畜労働者が家畜管理を行っているため、このインフォーマントは牧畜の生業暦を把握していなかった。その為近い事例として Inf.No.3 の生業暦を記しておく。

この地域の牧民は、冬春期は郷の中心部の固定家屋にて生活をするのが一般的である。ここで家畜出産を迎えるが、6月になると標高の高い夏営地へ移動する。夏営地には特に固定家屋があるわけではなく、チベット式テント（正確にはチベット式のテントよりも小さい）を住まいとして牧畜を行う。9月には夏営地よりも標高が低い秋営地へ移動し、一ヶ月ほど滞在して10月、郷の中心部へ戻ってくる。営地を変える理由の一つではないが、最も重要視されているのが草資源であった。

また、冬場に備えて小規模ではあるが燕麦などを植える世帯も見受けられた。

牧畜	
1月	
2月	家畜出産（3月まで）
3月	
4月	
5月	
6月	剪毛（下旬） 夏場へ移動（末）
7月	
8月	
9月	秋場へ移動（初旬）
10月	種付け（初旬） 冬春場へ移動（下旬）
11月	
12月	

②牧農兼業・農業 (Info.No.2)

- 居住地 : 甘肅省肅南ユウグ族自治県水関郷
北緯 38 度 59 分 50.1 秒、東経 99 度 24 分 39.5 秒
標高 2580m
- 世帯主 : Z.HL (M、1956 年生まれ)
- 世帯構成 : 妻 (1956 年生まれ、ユウグ、既婚、同居、農民)、娘 (1981 年生まれ、ユウグ、未婚、同居※現在西安にいる、旅遊景點で働いている)
父親 (1933 年生まれ、ユウグ、妻とは死別、同居)
- 家畜構成 : 綿羊 (母畜 80、去勢畜 20、子畜 20)、ヤク (種畜 1、母畜 9、子畜 8)
- 作付面積 : 春小麦 6 ムー、エンドウ豆 2 ムー、休耕地 6.5 ムー
- 収入構造 : (牧畜) 羊売却 5 頭 × 200 元 = 1000 元、ヤク売却 8 頭 × 700 元 = 5600 元 ※羊毛は運ぶ途中車から落ち売り物にならなかったため売却せず。
(農業) 春小麦 6 ムー × 400 斤 = 2400 斤 0.5 元 × 2400 斤 = 1200 元、エンドウ 2 ムー × 300 斤 = 600 斤 0.7 元 × 600 斤 = 420 元
※自家消費の飼料 (春小麦の藁) 1600 斤…時価 320 元相当。
- 支出構造 : 税金年間 396 元、生活物資年間 3600 元、牧業生産支出 160 元、農業生産支出 120 元、用水費 12 元、農地の水代 (地畝費) 8 元 × 14.5 = 116 元

この世帯は牧農兼業ではあるが、牧畜用の草地は保持していない。その為夏は付近の適当な草 (道と囲いの間に生えている草など) を家畜に食べさせ、冬は飼料を食べさせている。また、草原がないので搾乳すると子牛が死んでしまうという。そのためここでは搾乳は行っていなかった。その他、日本の技

術を使った人工授精^⑩を行っていることもこの地域のみで聞かれた話であった。なお、彼らの生業暦に関しては以下の通りである。

	農業	牧畜
1月		
2月		
3月		
4月	播種、月一回の灌漑	
5月	月一回の灌漑	出産
6月	月一回の灌漑	剪毛、薬浴
7月	月一回の灌漑	
8月	月一回の灌漑、収穫	
9月		
10月		
11月		
12月		人工授精（初旬）

③乾燥地牧畜 (Inf.No8)

- 居住地 : 甘肅省肅南ユウグ族自治県白銀モンゴル族自治郷
北緯 38 度 5 4 分 48 秒、東経 100 度 00 分 04 秒
標高 2100m
- 世帯主 : D (M、1931 年生まれ)
- 世帯構成 : 妻 (1940 年生まれ、モンゴル、既婚、同居、牧民)、六男 (1981 年生まれ、モンゴル、未婚、同居、牧民)、四女 (1983 年生まれ、モンゴル、未婚、同居、牧民)
- 家畜構成 : ヤギ (母畜 80、去勢畜 140、子畜 80)
- 収入構造 : 今年…羊売却 40 頭×110 元=4400 元
昨年…カシミヤ 8000 元、今年：カシミヤ 9000 元あまり。
- 支出構造 : 税金年間 2100 元、生活物資年間 9600-12000 元、牧業生産支出年間 3600 元前後、水道代一人年間 7 元。
※この辺には水道はないが、郷・区には水道があるので、頭割りで税金を請求され、水道を使っていない人間も払わなければならない。家畜 1 匹 0.5 元。

^⑩ -198℃の凍らせた「凍精」(冷凍精子)を用いる。

この世帯の営地は夏・秋・冬春に分かれていた。聞き取りを行った場所は冬営地であり、ソムにある4本の川のうち一番南に相当する「馬蓮溝」沿いに設営されていた。調査を行った9月は本来秋営地にいるはずの時期であるが、一年に一度行う読経の為冬営地に滞在しており、読経後秋営地へ移動するとのこと^④であった。夏営地は山の上部へ構え、秋営地は梨園河沿いに設けている。聞き取りの帰りに彼らの秋営地脇を通過したが、河から50mくらいの場所に簡単な固定家屋がある、簡素なものであった。郷幹部の話では、この地域は類型①と違い秋営地が最も標高が低いとのことであったが、この世帯も例にもれず、秋営地は標高1800mであるのに対し冬営地は標高2100mであった。

牧地は2000-3000 ムーあるもののそれだけでは足りないの
で、張掖の農民から1200-1300元の干草を購入している。ヤギ
の搾乳は行い、ツァガンイデーも作っている。

以前この周囲にはラクダもいたが、旱魃により減った。更に牧地の保護の為禁牧・輪牧・休牧も行われている。

5. 水資源利用とその認知

①高地牧畜

〈水源及び水利用〉

高地牧畜の場合、人間家畜両方とも自然水を利用していた。夏は泉水を用い、冬は黒河や雪水を利用する。他の事例では見られるような家畜への水やりは行わず、家畜は放牧途中に河川の水などを飲んでいく (Inf.No.3,4,5)。

ただし2-2で触れたように、「中流域の水不足により周辺の森林伐採が禁止された」などという環境保護政策の話は認識している (Inf.No. 4,5)。

〈水認識〉

汚染などは全く感じていない。しかしながら、「今年は例外だがここ数年河川の水は減少していた」との発言も見られた (Inf.No.3)。ただしこの場合も牧畜を行ううえでの不便は感じていない。

②牧農兼業・農業

^④ アラシヤンのパローン=ホショー (アラシヤン右旗) から招いたラマ3人が読経を行っていた。「ジャサー」(規則的勤行、宗教的つとめ) とのことで、10時~19時まで読経する。この地域では家ごとに特別に祈っている仏があり、ここの家では лхам (цагаан луус) を祈らせていた。

牧畜	
1月	春営地に移動 (冬営地と隣接)
2月	
3月	
4月	
5月	
6月	夏営地へ移動 (未)
7月	
8月	
9月	秋営地へ移動
10月	冬春場へ移動
11月	
12月	

〈水源〉

水関郷の場合、水源は村ごとに異なっている。まず西岔河村の場合、6km 西北にある「前大板泉」から村まで水道を引いていた。この水道は 90 年に作られた。西岔河村の住民 114 戸のうち、水道を用いている世帯は 78 戸、河水、泉水、雪水などの「天然水」のみを利用している世帯が 36 戸とのことである。

もう一つの村である西河村（全 38 戸）には 2 系統の水源がある。ひとつは「大石河門泉」で、76 年に水道を作ってあったものを 2002 年に「改建」した。埋設した水道管の長さは 3825m になるという。33 戸がこの水道を利用している。残り 5 戸は 93 年に小泉河から引いてきた水道を利用している。水道管の長さは 1.5km とのこと。

ただし上述の水道が引かれている場所はすべて「定居点」であり牧地ではない。

また Inf.No.10 は年間を通じ河川利用をしていた。

〈水利用〉

農業に関しては、播種から収穫までの 5 ヶ月間、1 ヶ月に 1 回灌漑を行う。ただし最初の一月は 2 回灌漑を行うケースもある。一般的に一回約 8 時間、一時間に 26 t ずつ水を入れる（Inf.No.6,7）。

一方牧畜は河水、泉水、雪などの自然水を利用しており、とりたてて水を与えるということはない。

〈水認識〉

水に関しては基本的に問題意識を持っていなかった。

③低地乾燥地牧畜

〈水源及び水利用〉

この地域は乾燥域のため、様々な水源から水を採取している。4 章で述べたように夏営地は山の上に、秋営地は河の側に、冬営地は沢沿いにそれぞれ設営するが、水は夏季は泉を利用し秋は河川水を、そして冬春は河川及び井戸水を利用する。

冬営地の井戸は営地のすぐ側に作られているもので、深さ 22m モーター付きのものであった。この井戸は 80 年に作られたものであるが、80 年以前は梨園河、大瓷窑河を利用の河川水を利用していたという。また、冬期 3 ヶ月（10-12 月）の間はモーター駆動用の燃料がブリガード（大隊）から支給される。しかしこの井戸水は苦く人間の飲料水としては向かないため飲用水としては、深さ 4 m、4 トンの水がたまる「罕井」を営地内に設置し車で梨園河から水を運んできて貯めておく、という方法を取っている。

〈水認識〉

今回の調査地の中で、水関係に関し最も不満が噴出した地域であった。

まず一つが行政の税金に関する問題である。類型③に相当する Inf.No. 7,8 の両世帯とも水道水は利用していなかった。しかしながら郷・区には水道がありその使用税は水道の利用の有無にかかわらず頭割り請求される。その為彼らも税金支払いを余儀なくされ、「税金を取られるとお金はいくらも残らない」

と不満を述べていた (Inf.No. 8,9)。

もう一つ彼らが挙げていたのが水資源の質的量的悪化である。4章で触れたように、水資源の減少によりラクダなどの大家畜飼育が不可能になりヤギに特化した牧畜へ移行を余儀なくされた。またさらに、水の硬度が高く家畜の毛が黒くなる現象も16-20年前から起こっており、インフォーマントは水資源の減少と質の変化にかなりの関心を抱いている。

6. 小結

今回は、生業形態の分類とそれに付随する水利用という観点から事例を分類しその意味付けを記述する作業を行った。その結果、標高2600m以上で人畜ともに自然水を利用し牧畜を行う「高地牧畜」型、標高2000m~2600m未満にて自然水を利用し牧畜農耕両者を行う「牧農兼業」型、標高2000m以下の乾燥地にて、河川や井戸など様々な水源を利用しながら牧畜を行う「低地乾燥地牧畜」型の3つに分類出来る事が明らかになった。今回事例を得ることは出来なかったが、この地域にはさらに乾燥地にて農耕を行う人々、青海省側(最上流域)にて牧畜や農耕を行う人々などがある。今後さらに調査を進めることにより、より類型化の意味づけ及びモデリングが進むことが期待できる。

また、乾燥地域の牧畜の事例は筆者が2002年に内モンゴル自治区アラシャン盟エチナ旗の現地調査で聞き取り及び観察した牧畜の事例と非常に似通っていることも事実である。簡単に言うならば、草よりも水に規定される牧畜である。しかも、水資源は地下水も含めて川沿いに集中する為、農耕地との対立が発生する可能性が高い。その点において、当該地域は単に「黒河上流」にとどまらず中下流域にも広がる牧畜の一形態を代表している、との見通しを持つことも出来るだろう。

さらに今後の調査に関しては次のように考えている。まず、現在までの調査が年間で最も降水量の多い4ヶ月に集中しており「冬季の現地調査データ」が乏しい。冬季の調査は通年の水利用形態を理解する上で不可欠であるばかりでなく、特に高地牧畜型の場合、夏季・秋季に山の高部で牧畜に従事している人々が冬季には中心地へ戻ってくるため、彼らからの聞き取りを行えるという利点もある。また、2003年は近年では珍しく降水量の多い年であった。その為2003年の調査データの持つ代表性を明らかにするために、今後の追加調査において過去のインフォメーションを得ていく作業が必要となるとも考えている。

7. 参考文献

- 甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994 『肅南裕固族自治県誌』 蘭州：甘肅民族出版社。
蔣旭光〔主編〕 2001 『綠色頌歌—黄河、黒河、塔里木河調水実録』 北京：中国水利水電出版社。
潘 後民・田水利〔編著〕 2001 『黒河流域水資源』 黄河水利出版社。

黒河中流地域における人間活動と水利用 ——肅南ヨグル（裕固）族自治州明花区の事例——

マイリーサ（立教大学）

一、 調査地点の位置づけ

本稿は、総合地球環境学研究所における研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変動」の一環として「文化人類班」が行った現地調査報告の一つである。

筆者は、2003年8月に約半月にわたり、黒河中流域乾燥地域にあたる肅南ヨグル族自治州①の明花区に赴き、現地住民の生活様式や水の利用状況などについて調査を行った。

ここにはヨグル族、チベット族、回族、漢族など多くの民族が居住しているが、ヨグル族は人口の89%を占める。この地域の人々は昔から遊牧業を中心に生業を営んできた。明花区は、地理的にオアシス地域とゴビ砂漠地域が交差するところに位置し、高台と酒泉という二つの農業大県に囲まれている。そのために、この地域の牧民たちの生存空間は絶えず周辺地域の農地開拓によるオアシスの膨張に圧迫されている。

明花区の牧民たちは、1940年代から50年代にかけて定住生活を始めているので、居住地を中心に四季に渡り繰り牧草が返し利用されているが、春先から夏までは遠隔地の周辺地帯や砂漠地帯に出かけて遊牧をしてきた。しかし、この数十年にわたる周辺農業地域による大規模な農地開拓に伴い、ヨグル族自治州は広い面積の牧草を失った。それに、1982年から始まった生産責任制による土地と家畜の私有化が進められて以来、自然に頼る放牧生活はさらに厳しくなった。それにより、明花区に生活する一部分の人たちは自分の家畜の飼料を確保するために農地を開拓するようになった。

さらに、近年は黒河流域における生態環境保全のプロジェクトの実施②にあたり、ここに国家の農業開発区と生態移民村が作られ、牧民たちは農業への生業転換を迫られている。

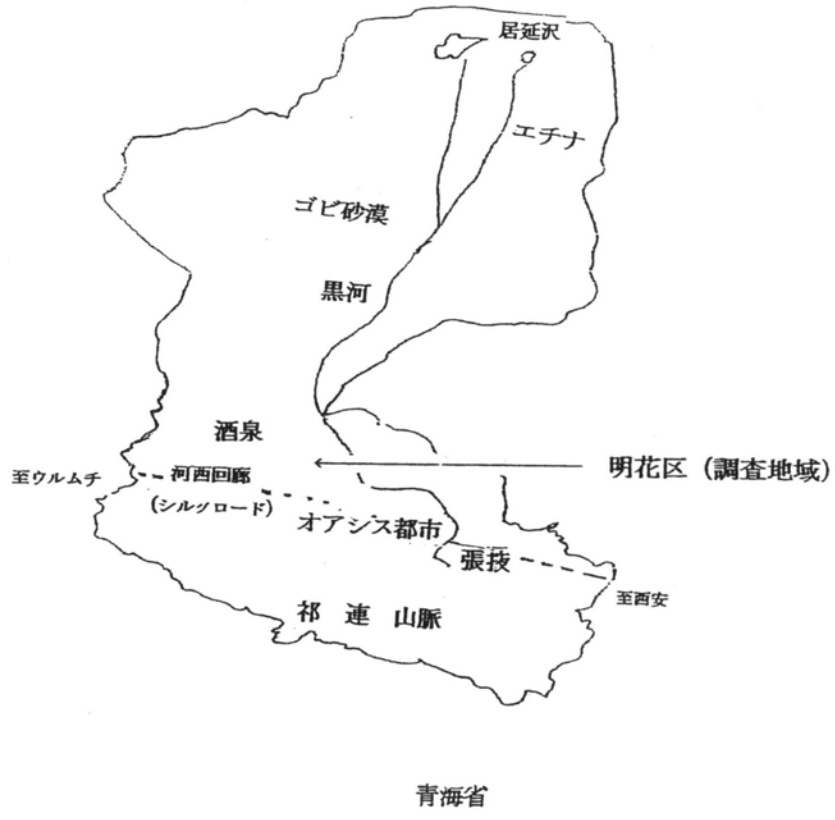
このように、この半世紀の間、この地域では人口移動が絶えず発生してきたが、これが地域の生業のありかたに大きな影響を及ぼしている。それに伴い、水をめぐる葛藤が生じ始めた。

二、 調査地域の概要

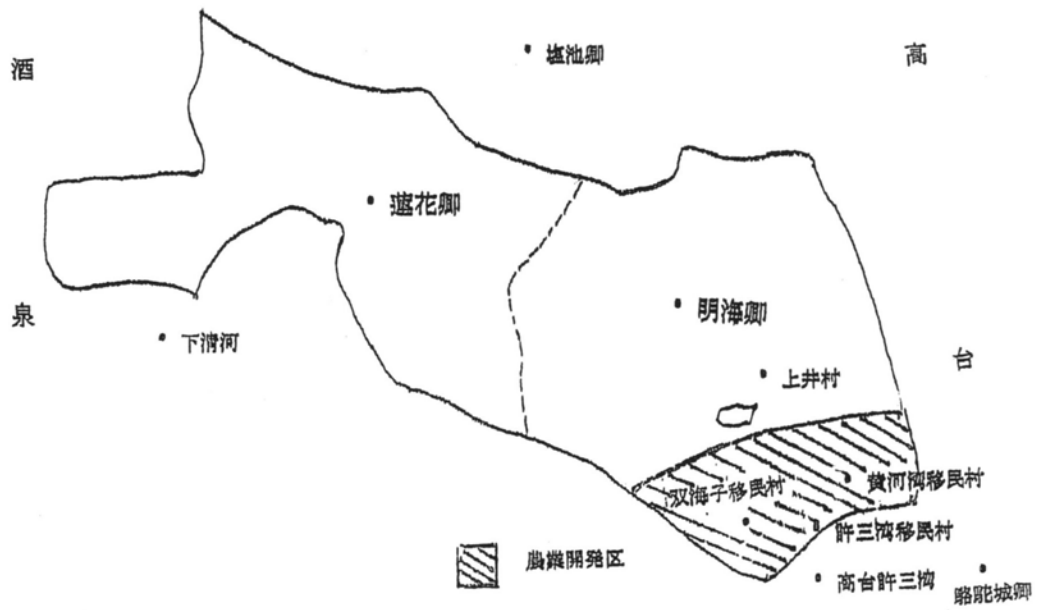
肅南ヨグル（裕固）族自治州明花区は、河西回廊中部バタンジル砂漠南端に位置し、東北側は高台県に、西南側は酒泉市に隣接し、自治県の所在地から遠く離れた飛び地である。平均海拔は1381mで、年間降水量は66mm、平均気温は7~8℃である。行政区域内には二つの内陸湖があり、草原総面積は200.4万ムで、その中で開発農地は4万ムである。主な植生には芨草（ソクズ、スイカズラ科）、「駱駝草」「紅柳」「白刺」などがある。行政区内には三つの行政郷と14の行政村がある。その中で蓮花郷と明海郷の住民の間では、西部ヨグル語（チュルク諸語に属するサラ・ヨグル語）が使われている。

同行政区では、20世紀70年代、特に、90年代以来、産業構造が遊牧業から「半牧半農」に転換しはじめた。

本稿は、「文化人類班」の2003年度の研究課題である流域住民の「生活様式をめぐる諸類型の提示」に



地図1 調査地域における黒河流域の位置



地図2 肅南裕固族自治県明花区とその周囲

基づき、明花区の二つの行政郷である蓮花郷と明海郷を調査対象地域とするものである。

蓮花郷に住む人たちは牧畜業により生計を立てている。ここでは、現在二種類の生活様式が並存しているが、その一つが「粗放的放牧型」で、蓮花郷ではほとんどの世帯がこのような生活をしている。こうした生活の基盤は自然の牧草地によって支えられている。

もう一つの生活様式は「自然放牧と飼料生産との結合型」であり、このような生活様式をもつ世帯は、郷の中心部と沿路地帯に住んでいる。ここでは立地条件として1980年代にすでに電気の使用が可能になっていることが挙げられ、ここに住んでいる世帯のほとんどが当時は比較的恵まれていた人たちであった。

もう一つの行政郷である明海郷に生活する牧民たちの生活様式は、前者の「粗放的放牧型」とはそれほど変わらない。同郷には、近年、国家農業開発区の設立に伴い、新たに二つの生活様式が生じている。その一つが「放牧業から農業への転換型」であるが、移民村の生態移民たちがこうした生活を営んでいる。もう一つの新しい生活様式が「粗放的放牧から近代的な牧畜業への転換型」である。農業開発区と移民開発によって自らの牧草地を失った明海郷上井村の牧民たちはこのような生活様式をもっているが、このような生活様式は、現在環境保全のモデルとして政府から奨励されている。

以上のような生活様式がそれぞれどのように自然、そして、水とかかわっているのか、本稿ではそれぞれの事例に沿って記述する。それにより、黒河流域の自然環境への人間の働き方がどのように行われてきたのか、また、どのように変化してきたか、それを考察する。

三、 流域住民の生活様式及びその変容過程

1、「粗放的放牧型」の事例

T世帯の場合（蓮花郷湖辺子村）

Tさんは今年56歳で、妻が52歳。現在は三人家族で、30歳の長男と同居している。2003年8月現在、山羊160匹（メス50、仔30、去勢45）を放牧している。

Tさんが結婚した1969年当時は「文革」の時期だったが、少数民族の放牧地域では「牧民不喫国家糧」（牧民は国家の食糧を食べない）というスローガンのもとで、農地開拓が行われていた。そのために、蓮花郷では地元の若い労働力を集めて牧草地を農地に開拓していた。その時期からTさん夫婦は、親世代から独立して、転々と人民公社の農場建設に携わってきた。当時蓮花郷では親世代は放牧生活をし、若い世代は民兵として、半日軍事訓練をし、半日農地開拓をしていた。それに、農地灌漑を行うために、農地と湖の間に用水路を作り、湖から水を引いていた。

その時期から、湖辺の周りの景観は一変した。Tさんの話によると、昔は湖のまわりに家畜がたくさん散らばって草を食べるものだった。特に夏は多くの家畜の群れがそこに水を求めてやってきた。しかし、「文革」の時代からは自然と調和したそうした湖の風景は急激に変化し、湖の周りには農地ができて、その近くに人家が集中する「居民点」が造られたが、現在は農地が廃墟されたために誰も住んでいない。

1982年から「生産責任制」の実施に伴い、Tさんは人民公社から50匹（頭）の家畜（山羊と羊を合わせて44匹、牛2頭、ラクダ4頭）を分けてもらい、それを基盤に家族単位の経営をスタートした。家畜の

分配は、各世帯の人数を基準にして行われたが、牧草地の分配は、原則として、人民公社時代の居住地をもとにして行われた。前述のように、Tさん夫婦は人民公社の農場を転々と回り、固定の居住地をもっていなかった。牧草地分配当時、Tさんは郷の中心部と道路沿いの牧草地を希望していた。そこでは電気を利用できるという便利さがあったからだ。結局、そうした場所の牧草地の多くは幹部や会計係りなどのものになった。Tさんのような若い世代（親からの相続者を除く）に与えられた牧草地は郷の中心部から遠く離れた辺境地のものだったが、それに対する若い人たちの不満を緩和するために、彼らには郷の共用地の使用権が与えられた。そのために、Tさん一家は二箇所の牧草地を使用できるようになっている。

前にも触れたように、明花郷の牧草地の面積は、この数十年以来激減している。それに、牧草地の私有化により、牧民たちは従来のように自然の牧草地で放牧することがたいへん厳しくなっている。そうした状況の中で、Tさん家族のような辺境地に生活している人たちは、二つの牧草地を上手に生かし、従来のような放牧のシステムをかりじて維持している。現在、Tさんの家は居住地の近くの牧草地で日帰り放牧をしているが、春先から夏までの約三ヶ月の間は、山羊の群れを共用地に移動させて自分の牧草地を休ませている。夏、農家が最も忙しくなる時期には隙を狙って、かつては自分たちの牧草地だった隣接する農村地帯に家畜を入れたりもするという。

共用地は砂漠の中に位置しているが、十数世帯がともに使える広い場所である。移動放牧はこの共用地でしかできないが、場合によっては、労働力を調整するために、他の世帯と協同で移動放牧することもできる。Tさんは、一年ごとに知人や親戚と交代でここを利用している。今年の移動放牧は、知人の番であるが、Tさんも山羊の群れをその知人に委託し、自分は居住地で草刈に専念している。今では皮肉だが、当時郷の中心部の牧草地を取った人たちは、今は自然に頼る移動放牧ができなくなっている。その人たちは、牧草地の借用をしたり、農地を開拓したりして飼料の栽培をしているほか、商売をしたりして厳しい状況に対応しているが、なかにはうまく対応できないものもいるので、みんなの笑いものになっている。

草刈は7月下旬から約一ヶ月続き、厳しい冬と春の家畜出産シーズンのために草を備える。しかし、草刈の時期が移動放牧の時期と重なるので、誰の家も忙しく、出稼ぎの子供たちもこの季節にはもどってきて親の仕事を助ける。

この二、三年、草刈は二、三十世帯が協同で行うようになっていたので、各世帯から男の労働力が一名ずつ出て、特定の日に特定の世帯のために草刈をするが、自分の家の番が回ってきたその日には、その家が草刈でお世話になるみんなのために、山羊を一匹つぶして食事を招待することになっている。

収入と支出

T家族は現在家畜と畜産品を売ることによって現金収入を得ている。昨年、50匹の山羊（メス32、去勢18）を売り出したが、メスは一匹が120円で、去勢山羊は一匹が260円で、合計で8500元だった。カシミヤの売り上げによる収入は一匹当たりが90円で、合計4500元だった。皮は一枚が20元だったので、20枚による収入は400元であった。芨草（硬い部分は売り、下の柔らかい部分は飼料になる）の売り上げによる収入は270円で、山羊の糞の売り上げは240元だった。このように、昨年の総収入は約15000円であった。Tさん家族は三人とも労働力であり、それに生徒を抱えていないために、平均収入が他の世帯に比べて比較的高いが、息子の結婚の準備で費用がかかっている。

郷の幹部の話によれば、蓮花郷は今でも「粗放放牧」をやっているために、家畜の生産性が低く、特に、自然の牧草地を頼りに生計を維持している牧民たちの所得は県の平均収入より低い。同県の統計によれば、蓮花郷の一人あたりの平均年収は 3338 元であるが、湖辺子村は 4450 元である③。ちなみに、「小康目標」（まずまずの目標）は一人あたりの平均年収が 5000 元とされる。

しかし、彼らは生産費の支出が少ないので、そうした生活にもメリットがあるという。T さんの家は、自給自足に近い放牧をしているために、昨年は生産材料費を 600 元以下に抑えることができた。このように、T さんの家の所得は少ないが、生活収支のバラナスが保持できている。

近年、ここ蓮花草原の牧民たちが育てた家畜の肉の安全性と味が評価され、売れ行きがよいことを記述しておきたいが、現在、中国では全体において家畜を飼うことで生業を立てている人が増えてきたために、「農家圈舎の家畜が草原の家畜よりも多く、草よりも羊が早く育っている」と皮肉られているほど、家畜の数が急増している。つまり、中国では現在、大量生産、大量出荷という市場経済の時代に入り、家畜の飼養も競争力を増し、自然の草ではなく、飼料などを利用した飼養方による羊や山羊の生産が牧民の伝統的な家畜の生産を圧迫している。一方、短期間で家畜を無理に肥らせるという飼育のあり方がすでに中国でも社会的な問題になり、消費者の健康な生活を脅かしている。それにより、現在、中国では安い商品を求める消費者の心理に変化が生じ、量よりも質を求める傾向が強くなってきた。

水源

T さんの家は現在井戸を二基もっている。一基は深さが 2、5m のもので、庭の中に位置している。生活用水にはこの井戸を使用しているが、夏は一日にバケツ 6 個分の水を使い、バケツ 1 個分は約 20 キロで、冬は約その半分を使うという。もう一基の井戸は、深さが約 10m の深い井戸で、家から約 50m 離れたところに位置している。

夏は家畜に二回水を飲ませ、全体で一日に約 540 キロの水を使うというが、移動放牧の際には共用の井戸を使っている。冬は家畜に一回水を飲ませるが、昔は家畜が雪を食べていた。

水利用について、T さんが言うには、現在は親の時代に比べてずいぶん楽になってはいるが、水に金がかかるようになった。それに、地下水位が毎年のように下がっているため、これからの生活には不安を感じるということである。

2、「自然放牧と飼料生産との結合型」の事例

H 世帯の場合（道路に近い居住地）

H さんは 1945 年生まれ。6 人家族で、妻が 58 才である。息子三人と娘一人をもつが、子供たちが出稼ぎなどで全部家を出ている。

H さんは 1960 年代に結婚し、上記 T さんと同じように、青年時代は村の農場建設に携わり、農業の経験を積んできた。生産責任制が導入されはじめた当時、人民公社から家畜 64 匹（頭）（牛 3 頭、ラクダ 5 頭、羊 21 匹、山羊 35 匹）と道路に近い牧草地を分けてもらった。

1990 年代、家畜の価格が落ち、逆に農産物の価格が上昇したことにともない、少しずつ農地開拓を行い

始めた。その時期から道路に近い居住地では農地開拓をする人が現れた。農地開拓をした背景にはここでは電気の利用ができたことが挙げられるが、それに、農作するにはそれなりの労働力が求められるので、Hさんの家には三人の息子がいたために、農地開拓ができた。当初は、農業は副収入の目的で導入されたが、その後は徐々に拡大され、現在Hさんの家は20畝の耕地をもっている。しかし、農産物の価格が下がるに伴い、家畜の飼料を栽培するようになった。現在Hさんの耕地では草が8畝、トウモロコシが5畝と小麦が4畝の面積で栽培されている。小麦は自給のためのもので、トウモロコシは家畜の飼料として栽培されているが、その半分は自給のためのもので、残りの半分を売っている。売り上げによる収入は2000元である。小麦とトウモロコシのわらは牛の飼料として使われている。

現在、Hさんの家は90匹(頭)の家畜をもっているが、それには、牛が2頭、ロバが2頭、豚が2匹含まれている。去年は子供の結婚のために牛6頭を売っている。Hさんが言うには、家畜の中で牛の収益が最もよいので、我が家のような金がかかる世帯(息子が三人いる)は、牛を飼う方がよい。しかし、近年は、この牧草地の悪化状況が厳しいので、牛のような大型家畜の放牧はできなくなっているという。そのために、牛を飼うには大量の穀物が必要になるので、飼料用の穀物の増産をしなければならなくなるが、蓮花郷の場合はそのために耕地及び機械井戸を揃えなければならなくなる。しかし、労働力の高齢化が進んでいる現在、「自然放牧と飼料生産との結合型」の生産様式をもつ世帯は、外に労働力を雇わなければならなくなるが、ここには雇われるほどの余分の労働力はいない。かつては隣接する漢民族の農家から労働力が流れてくることもあったが、現在は、特に草刈の時期は、農家も収穫の時期で、取り入れが忙しく、雇われてくれる人はめったにいない。現在はこのような生産様式をとっている世帯は少なくなっているが、秋の忙しい時期は日当20円で雇っても来る人が少ないので、その年その年のこの時期をどうやって凌ぐかは、こうした世帯にとってはたいへん悩む問題である。

余談であるが、2002年はちょうど私たちが訪れていたこともあり、Hさんの家は人を集めるために、いつかは日本から、北京からお客さんが来て我が家で宴会をやるので、その日に作業を進め、夕方からお客さんを囲んで賑わおうと誘いかけたが、この妙案はうまく当り、普段はなかなか来ない人たちを含め、約30人が集まり、農作物の収穫と草刈の作業も見事に完成できた。

Hさんの話によれば、今まで子供の結婚の費用を用意するために、働きつめに働いてきた。将来的には飼料栽培を止めて、放牧一本でやってきたいという。

水源

Hさんの家は井戸を3基もち、生活用水と家畜用水の状況は上記Tさんの場合とだいたい同じであるが、農地の機械井戸は深さが55mで、家から30m離れたところにある。この井戸を掘るために多くの費用をかけたそうだ。農地の灌漑は、夏は月に二回で、一回は四時間かかるが、夏季は全体で約80時間になる。灌漑の際はモーターで水を流し放しの状態にする。

G世帯の場合(湖辺子村居民点に住む)

Gさんは47歳で、妻が49歳。娘三人(再婚妻の連れ子)と息子一人の六人家族であるが、現在は息子と同居している。Gさんは、1992年に子供の通学のためにここに移住し、今は10畝の農地をもっている

が、移住以前の場所にも牧草地をもっている。彼は居民点のことを「上面」(上り)と言い、自分の牧草地の場所を「下面」(下り)と言っているが、毎年、10月になれば牧草地へもどって放牧し、3月になれば居民点に来て農作業をするようになっている。居民点にいる夏の間は、羊の群れを牧草地で他人に委託放牧させているが、その報酬は山羊一匹につき、日当0.6角である。

この湖辺子村の居民点は、「文革」時代に当たる1969年に建てられたもので、当初肅南ヨグル族自治州では中国農村地域の画一のやり方により、多くの居民点(牧民新村)が建てられた。蓮花郷の四つの村にはそれぞれ一つの居民点建てられたが、現在、蓮花郷にはこの湖辺子村居民点しか残っていない。それはこの居民点が郷の中心地に位置しているからである。

1969年に開拓された当初、湖辺子村居民点には15世帯が住んでいた。それ以降、毎年一世帯、二世帯ずつ増え、最も多い時期は25世帯に達した。1982年に生産責任制が導入された後、ほとんどの住民が元の牧草地にもどった。居民点に残ったのは、子供の教育のためにその住居をしばらく利用せざるを得なかった牧民たちだけであった。2000年にさらに一部の人たちが農業開発区に生態移民として移住させられた。

収入と支出

現在Gさんの農地には、5畝の小麦と2畝のトウモロコシと3畝の草が栽培されているが、これらの農産物と飼料はほとんどが自家用のためのもので、小麦の一部分(1800キロの内350キロ)が売り出され、その収入は390元だった。Gさんの家は現在主に家畜と畜産品の売却により、生活を維持しているが、昨年の収入は合計5880元で、その内訳は次の通りである。

山羊13匹 1800元

カシミヤ 700元

牛1頭 1100元

豚1匹 450元

鶏8羽 250元

干し草 1400元

羊の糞 180元

しかし、子供の教育費を払うために、Gさんは牧業と農業以外に日雇い、商いなどさまざまな生計活動を模索しているが、五月と十月の間に忙しい合間を抜いで約一ヶ月日雇いをしている。昨年の日雇いによる収入は、540元だった。夏と秋の間は商いをし、商いによる昨年の収入は2000元であった。

そのうえ、自分の農地に囲いを造ったり、修理を繰り返したりしなければならないので、Gさん夫婦は毎日のように走り回っている。Gさんの話によれば、ここで生活するには勤勉でなければならない、農地に囲いを造らない怠け者の畑は家畜が入るのでぜんぶ台無しになってしまった。でも、ここは「下り」(牧草地の場所)に比べて時間のゆとりがまったくないという。

水源

ここの居民点では水道が整備されているので、生活用水と家畜用水に水道が使われているが、停電の時は「手圧井」が使われる。Gさんの場合、夏は家畜を委託しているため、ここの水源を利用しない。農地

用水は7戸が共同で深さ 84mの機械井戸を使用している。夏は農地を7回灌漑するが、一回につき、10時間から12時間にわたって揚水を行う。

3、「放牧業から農業への転換型」の事例

1992年代後半、自治県の明花区明海郷の草原で国家農業総合開発区が作られ、牧民を集中移住させ、農地開発が行われはじめた。2000年まで県内の黒河上・中流域からヨグル族、チベット族、漢族など、約300世帯をここに移住させた。現在はここにすでに三つの移民村ができています。その中の一つである双海子移民村の住民は、上記の調査地域である蓮花郷から移住してきた人たちである。2000年から草原の負荷を減らすと同時に、牧民の「脱貧」（貧困から脱出する）問題を解決する目的で、一部分の牧民を蓮花草原から明海農業総合開発区に移住させ、農地開発をさせるという政策を取ってきた。それにより、蓮花草原の人口を減らし、草原の植生の回復を図ろうとしている。

現在はすでに約70世帯の牧民たちが農業開発区への移住を余儀なくされているが、移住者のほとんどが20代から40代にわたる若い世代や中年の人々である。したがって、移住しなかったのは、年寄りや家族に病人、または障害者などを抱えている世帯及び男の子をもたない世帯ばかりである。男の子をもつ世帯が積極的に移住した理由については、将来の子供の結婚に向けて住居を確保するためとも考えられている。移民村を作る際に、政府は移民の不満を最小限に抑えるよう、移住後の生活改善を約束し、政府の投資で水道、電気、井戸、道路などの基本的な設備や施設を整備した。そして、蓮花からの移民各世帯に住居建築補助金として一万元を給与するようにしている（ほかの二つの移民村の人々は政府からの補助金をもらっていない）。ちなみに、一世帯あたりの新築費は約2万元である。

移民たちは、草原を離れた時に家畜を売った金と政府からの補助金及び借金で住居を建て、農地を開拓しなければならないが、現在、移民たちはすでに新築に入居し、農業生産を始めている。

W世帯の場合（国家農業総合開発区生態移民村）

Wさんは44歳、妻が37歳で、娘2人と息子2人（双子）の6人家族である。Wさんの家は、2000年に150匹の山羊を売って、蓮花の草原を離れ、この移民村に移住してきた。当時は移住のために慌てて山羊一匹をただ80円の値段で売ってしまった。移住の理由としては、前に住んでいたところがあまりにも辺鄙であったこと以外に、新居地ではいろいろな優遇政策があったことを挙げているが、ここは子供が学校に行くのに便利で、蓮花にいた時は子供の学校が遠かったために、妻が子供の食事を作るなど、子供の面倒を見るために、家を離れ、学校の近くに子供たちと一緒に住み、夫婦がわかればなれに生活していた。

現在、Wさんの家族はすでに30畝の耕地を開拓し、小麦、トウモロコシ、ビールの材料用の小麦、草などを栽培している。Wさんの場合は、平均耕地1畝から200元の所得を得ているが、平均1畝にかかった経費は170元であったので、自家の食糧も外から購入しなければならなかった。農業生産は放牧業とは違って、たいへんコストのかかる産業で、電気、肥料、農薬及び設備などの投資により採算が取れないばかりが多い。このように、Wさんの二人の娘（上が16歳で、下が14歳、二人とも中学生）は、一昨年と昨年に相次いで経済的理由により学校を止めなければならなかった。娘たちはどうしても勉強を続けたか

ったが、母親は娘たちに、「学費を払う金で農薬や肥料がたくさん買える」と言ったという。すなわち、農薬と肥料を買わなければ農作ができなくなり、農作ができなくなれば家族全員が生活できなくなるということである。

Wさんの家は子供たちの学校のためにここに移住してきたが、皮肉なことに、ここに移住してきたために子供たちが学校に行けなくなってしまった。元の草原では貧しいから子供が学校に行けなくなるということにはなかった。現在、この二人の子供は出稼ぎに出かけ、家族のために仕送りをしている。

蓮花郷からの移民たちはほとんどが借金を負っている。県農業事務所の統計によれば、明海郷各世帯の平均負債額は6650元である④ので、負債の返済に迫られ、その対応として兼業化や出稼ぎの現象が現れ、移民たちは世帯主の半分以上が出稼ぎに出かけたり、元の牧地で臨時的に放牧したりせざるを得なくなっている。

2003年からこの移民村では新たな生態環境保全政策が推し進められ、これまでの農地開発は環境にはよくないと否定され、「農業開発区」という名称は「生態経済区」と変わった。この農業区の三つの移民村では、2004年から「退耕還草」（農地を牧草地に戻す）が行われる予定であるが、具体的には、自給の食糧以外の農産物を栽培することが禁止され、その代わりに、良質の牧草を大量に栽培することが奨励される。

「人工草」（栽培された草）の基地を作るに伴い、家畜の舎飼が勧められている。

郷の幹部の話によれば、「退耕還草」が実施されれば、移民たちが貧困の現状から脱出できるという。近年、食糧の価格が低迷してはいるが、代わりに肥料、電気代などの生産費が値上がりしている。明海郷では、1畝ごとの純収入は、

小麦が54,4元で、トウモロコシが143,4元で、草は294元となっている。現在、草の価格は農産品の価格より高いが、「退耕還草」をすれば国から補助金ももらえる。補助金の額は10畝の牧草の栽培につき、1000キロの食糧と200元の現金が与えられる。それをもらえるためには国の機関からの点検に合格することが必要である。したがって、牧民にとって、農地で草の栽培をすることは一石二鳥で、国からの補助金を得ながら草を売って収入を得ることができる。それに、牧草を栽培することは、労働力の節約にもつながる。

「労務輸出」（労働力輸出）を組織すれば、二、三年の間に移民村の貧困問題が解決されると言われている⑤。「退耕還草」プロジェクトは、生態環境保全のために、国家によって推し進められたものであるが、ここでは、誰もが（牧民も幹部も）環境保全より貧困の現状から脱出することを懸命に考えている。

Wさんの家は、将来的にもし金に余裕ができれば、耕地で牧草を作り、家畜を飼育したいと考えている。実際、この地域では「圈舎工程」（牧草地に囲いを作り、家畜を柵の中で飼うプロジェクト）が実施されている。移民村の一部分の人は銀行にローンを組んで、牛を飼い始めている。例えば、Wさんの隣人Gさんの家は畜舎を造って牛を飼うために二年返済で6000元のローンを組んでいる。畜舎を造るのに4000元かかるが、国が2400元の援助をしてくれる。Gさんは牛を二頭飼ったが、価格は4800元だった。2003年8月現在、双海子移民村の牛は22頭である。

Wさんの家はローンを組んで、早く牛を飼いたがっているが、負債を多く抱えているために、資金提供が断られている。

水源

この移民村を作る際に、政府が水道の設備を整えてくれたために、どの家も水道が付き、生活用水が蓮花にいた時よりずっと便利になった。

農地灌漑には共用の深い機械井戸（深さ 150m）を利用しているが、井戸一基を 16 世帯が使い、夏は 24 時間にわたり機械が止まることなく供水を続けている。このような深い井戸を掘るのに約 13 万円の費用がかかるが、移民村の設備として国がその金を出している。この農業開発区ではこのような灌漑用の井戸を 150 基掘る計画が進められている。

ここでは井戸ごとに「井戸長」が付いているが、「井戸長」は村長よりも権限が大きいと言われている。住民の間では井戸及び用水路の修理などをめぐっての「水付き合い」が始まっている。しかし、時折停電が発生して水の供給ができなくなり、混乱が生じることがある。それに、機械井戸の電気代が高く、月払いなので電気代滞納世帯が多く、電気代催促の知らせが貼られてあったが、払えない世帯は次の月からの水利用がストップされる。

「退耕還草」が実施されれば今の農産物の栽培より四倍くらいの水が節約できると郷の幹部に紹介された。

4、「粗放的放牧から近代的な牧畜業への転換型」の事例

B 世帯の場合（明海郷上井村）

明海郷上井村は、明花区の中の最も面積の広い村である。かつて、上井村の牧民たちは最も広い牧草地をもっていた。1990 年代の国家総合農業開発区設立に伴い、村の牧民たちは、莫大な共用牧草地を失った。それにより彼ら牧民たちは自然牧草地による生計を維持することができなくなったので、自らの生産様式を変えざるを得なかった。

B さんは 50 歳、妻が 54 歳で、24 歳の長男と 16 歳の次男からなる 4 人家族である。長男は村の会計係りで、郷の所在地に事務の仕事をしているのでそこに住んでいる。高校生の次男は学校の寮に寄宿している。B さん夫婦と同居しているのは B さんの姪（15 歳）であるが、彼女は同居というよりも B さんの家に手伝えに来ているので、毎月 200 元が支払われている。

B さんは 1978 年に結婚しているが、当初は妻の家族と同居していた。そのために、1982 年に「生産責任制」が導入された時は 7 人分の家畜として、人民公社から山羊 70 匹、羊 35 匹、牛 3 頭、ラクダ 7 頭を分けてもらった。牧草地も自分用の 100 畝以外に、10 世帯共用の牧草地 5000 畝をもらったほか、村の共用牧草地も利用できることになっている。また、農地（「文革」時代に開拓された）を 5 畝分けてもらっている。

現在、B さんの家は山羊 150 匹、羊 89 匹、牛 25 頭、豚 3 匹、鶏 30 羽を飼っている。一方、農地も「生産責任制」導入当初の 5 畝から 52 畝まで拡大している。耕地では農産品と飼育用の草などを作っている。作付けの内訳は、小麦 35 畝、トウモロコシ 7 畝、牧草 15 畝である。小麦は 1 畝ごとの生産高は 350 キロで、合計 10500 キロを収穫している。その内の 4500 キロが売られ、約 4500 の収入を得ている。トウモロコシは家畜の飼料として使われ、小麦とトウモロコシのわらは粗資料として使われているが、牧草は年に二回収穫できるが、15 畝からの収穫は 5000 キロ以上である。以上のように、B さんの家は、農地を生産

基盤とし、家畜の多頭化を促している。というのは、Bさんの家畜は一年の中で自然牧草地に頼るのはわずか5ヶ月である。つまり、5月と6月の二ヶ月は居住地付近の牧草地で放牧し、7月から9月までの3ヶ月はテントをもって共用牧草地で放牧している。それ以外の時期は自然の牧草地で刈った干草と栽培された牧草、そして、農産物のわらやトウモロコシを家畜に食べさせている。このように、上井村の牧民たちはほとんどBさんの家のような生活様式をとっている。その中で遠隔耕地を増やし、耕地で放牧する世帯もある。その一例として、明花区元副区長である別人Bさんの60畝の耕地は全部遠隔耕地であり、その耕地は異なる三つの場所に位置しているが、三つの場所にはそれぞれ住まいと畜舎をもっている。2004年からこの三ヶ所で牧草を作り、交替で季節移動をする予定であった。

上井村の牧民たちの耕地はそのほとんどが開畑ブームの時に拡大されたものである。その背景には、1990年代から「再造一個河西」（もう一つの河西を造る）という国家レベルの農田開発事業が推し進められてきたことがあり、その事業は普通「再造戦略」と呼ばれていた。当時は農田開発を行ったものに農田開発補助金を与えるという優遇政策があった。当時は農田開発を行ったものに農田開発補助金を与えるという優遇政策があったが、それには畜産品価格の下降と農産品価格の上昇という要因もあった。明海郷の各村から、一部の若者（男の子が多い世帯）がかつての上農業区（「文革」時代は明海郷の農場だった）に廃棄された農地に再び集まり、農地開拓を始めたものである。現在、この人たちはすでにこの上農業区に定住し、農産品、あるいは牧畜の飼料を生産している。その世帯数は約70で、人口は300以上に達している。その数はもともと上井村に住んでいた住民の数、260人を上回っている。続いて、村の境内に農業開発区を造り、移民開発と外来開発を同時に進めている。当時政府は上井村の牧民たちに農地開拓を勧めた。具体的には、17世帯が共同で一つの「方田」（大面積の畑）を開拓し、平均一世帯23畝の耕地を確保するようにした。灌漑用の機械井戸には国から70%の資金が提供され、残りの30%は個人が出した。

収入と支出

Bさん家族の昨年の農産品による収入は4500元だが、それは小麦の売り上げによるものだけである。家畜の売り上げによる収入の内訳は、山羊10匹、一匹当たり約115元で、計2100元で、牛10頭で、6400元。豚1匹で、500元、合計9000元である。畜産品による収入の内訳は、カシミヤが3200元、羊の皮が150元、羊毛が90元で、合計4250元になる。Bさんの昨年の総収入は17750元であるが、これはかなりの高収入に当たる。このように、自然牧草に頼る放牧に比べて、飼料で飼った家畜の生産量が高いことは確かである。

明花区の中でも上井村の牧民たちの収入は最も高い。そのためか、上井村の牧民の生活様式は、牧畜業の近代化と生態環境保全型経営のモデルとして今後明花区牧民の間に普及されていくと予測されている。明花区では2004年から「禁牧」（放牧の禁止）措置が取られた。同県の「西部大開発戦略計画実施」という文書の記述によれば、家畜の生産様式を5年以内に天然放牧から次第に「半圈舎」か「全圈舎」に転換させ、高生産の牧草地と飼料基地を整備する。それにより粗放的放牧による牧草地の負荷を減らし、経済、社会、生態を調和させ、持続的發展を図るということである。

しかし、Bさんの家のような生活様式の場合は、生産コストが非常に高い。つまり、Bさんの昨年の年収は17750元であったが、その内、生産飼料の支出は、具体的に、電気代、肥料代、農薬代、機械の燃料

代などを合わせて、約 11600

元で、土地税と家畜税が 1100 元で、姪に支払った人件費は約 2000 元なので、純収入は蓮花の牧民たちの場合とそう変わらないが、場合によっては蓮花郷よりも低くなっている。つまり、経営規模の拡大がそのまま増収にはつながらなかった。B さんの家にとって、粗放的放牧方式から近代的牧畜経営への転換という目標に近づけば近づくほど家計が苦しくなるということである。このように、B さんは子供の教育費を支払うために、放牧と飼料栽培のほかにも日雇いで稼がなければならない。そのために、B さんは自分のトラックを使って他人の農地整備の仕事を手伝えている。昨年、一年間 B さんは忙しい合間を抜いて 200 日も日雇いの仕事をし、5000 元の収入を得ていた。このように、B さん夫婦は放牧や飼料栽培と日雇いなどで幅広く収入源を広げているが、体力も追いつけなくなっているようだ。

水源

B さんの家は現在、4 基の井戸をもっているが、そのほかに農地灌漑には共用の機械井戸を使っている。家から 50m 離れたところに「土井」（本来は周囲を石などで固めない掘っ立て穴の状態のものを意味していたが、現在は「浅い井戸」を指す）があるが、今はほとんど枯れている。現在、家畜用水には深さ 25m の「手圧井」を使っているほか、台所にも同じく深さ 25m の「手圧井」があり、生活用水に使われている。そのほか、家から 200m 離れたところにも深さ 40m の「浅機械井」がある。この井戸は大規模農地開発以前から農地灌漑に使われていた。上井村の地下水位は年々下がっているためか、ここの住民は、水源確保のために、どの家もいくつかの井戸をもっている。

夏は、農作物は 8 回、栽培草は 5 回ほど灌漑される。一回の揚水は 3 日間（昼夜）にわたって行われるが、これには共用の機械井戸が使われる。

冬も栽培草には一回灌漑する必要があるそうだが、一回の灌漑には約 15 時間かかるという。

四、乾燥地域の人間活動と水利用

蓮花郷の水利用

明花区は昔から水源の豊かなところだった。同区の二つの行政郷である蓮花郷と明海郷は、それぞれ「蓮花海子」（「海子」は「湖」の意味）と「明海子」という二つの湖の名前に由来するものである。そのうえ、地下水の状況もよかった。年配の人の話によれば、1950 年代までは約一メートル掘るだけで水が出たそうだ。そのために、この地域ではどの家も自分で掘った井戸をもっている。昔、家畜は湖や季節川、または窪地にたまった水と井戸の水を飲んでしたが、長年旱魃が続いたこともあり、現在は、「海子」は涸れた状態に近いものになり、季節川もなくなっている。そのために、家畜用水は地下水（井戸水）のみに頼るしかなくなっているが、この数十年以来、地下水位も明らかに下がっている。その証に多くの家では涸れ井戸を「冷蔵庫」として使っていることが挙げられる。井戸の干上がる要因は、天災よりも人災の方が大きいと言われている。明花区の上流側地域の農業地帯では今までずっと大規模な灌漑農業開発が行われていた。中華人民共和国建国以来、政府は国土資源の開発のために、幾度の人口移動を動員してきた。西北地域の主な移入地は河西回廊のオアシスであったが、現在、「河西回廊オアシスは国家レベルの食糧基地」として

発展しているが、甘肅省の食糧の70%がこの河西回廊で生産されている。こうした上流側の農村地帯における過剰の揚水は明花区の地下水位下降の主な原因であると現地の牧民の間では言われているが、地下水位の下降により牧民たちが新しい井戸を掘ったり、ポンプを購入したりするなど水利用に金がかかるようになった。現在、蓮花郷の牧民の家はだいたい井戸を二基もっている。生活用水にはだいたい5mほどの「土井」を使っているが、現在「土井」は浅いために水質が悪くて生活用水として飲めなくなっているのので、洗濯などの日常生活で使っている。家畜用水の井戸には、「大口井」（手押しポンプ水を汲み上げる井戸）と「手圧井」があるが、深さは両方とも約10mである。

蓮花郷には飼料栽培と農産物生産の世帯が現れることに伴い、深い井戸が掘られるようになり、水の使用量が急増している。蓮花郷には現在、872 畝（1999 年の統計）もあり、その多くは、郷の中心部と道路沿いの場所に集中している。耕地をもつ世帯はだいたい井戸を三基もっている。生活用水と家畜用水の状況は上述の自然牧草地で放牧する世帯の場合とほとんど同じである。耕地用水の深い井戸は1980年代に掘られたもので、深さは浅くても30m以上で、50mくらいのもが多いが、揚水は手押しポンプからモーターのものに変わっている。居民点では深さ80m以上の共用の機会井戸が使われているが、地下水の大量汲み上げにより牛のような大型家畜の生産が維持できるようになった。現在、労働力の高齢化が進んでいる蓮花郷では自ら経営をやり直し、飼料栽培を放棄する世帯も現れている。しかし、近い将来、ここでは環境保全のための「禁牧」政策が実施される予定である。すなわち、これからはここにおいて、自然牧草地の利用を全面的に禁止し、その代わりに、人工牧草の大量栽培が奨励される見通しである。しかしながら、人工牧草地を造成するには、大規模の汲み上げ灌漑が欠かせない。実際、こうした転換プロジェクトが移民の新居地で行われている。

明海郷の生活様式と水利用

明海郷は蓮花郷と同一の行政区に属するが、約50キロにわたる砂漠地帯に隔てられて蓮花郷に隣接し、その面積は蓮花郷の面積より倍くらい広い。明海郷の境内には有名な倉爾湖もあり、かつてここは、自然利用条件と牧民の放牧空間が蓮花郷より恵まれていたが、明海郷は地理的に高台という農業大県に囲まれているため、現在、その牧草地の悪化状況は蓮花郷より厳しい。1980年代、上流側の馬營河など九つの河が断流したことにより、明花区では季節河が消え、続いて、2000年ころから倉爾湖も完全に涸れてしまった。それにより、現在明海郷には地表水がなくなり、ここの住民は地下水に依存せざるを得なくなったが、地下水も近年急激に下降している。現地幹部の紹介によれば、1960年代から2000年までの間、水位の下降により、牧民たちは下記のように井戸の掘り直しを三回やったという。すなわち、1960年代には深さ約5mの「土井」を、1990年代には深さ約10mの「大口井」を、そして、2000年ころは深さ約25mの「手圧井」を掘ったという。特に、農地開拓ブームであった1990年代には上流側の農村地域に限らず、ここ上井村の境内でも約100基の機械井戸が相次いで掘られ、過剰の揚水が行われた。それにより、初期の浅い井戸の水脈が完全になくなった。2000年に国が300万元を投資し、各世帯に約25mの「手圧井」を整備してくれたために、牧民たちの用水危機が一時的に解決された。地元の幹部は、「現在、牧民の家畜はこの「手圧井」の水を頼りにしているが、その深さは何年間維持できるか知らない。牧民たちは水の将来をたいへん不安に思っている」と言い、「国が考えてくれるだろう」と溜息をしている。

さらに、明海郷境内における国家農業開発区の誕生が草原での水需要の爆発的増大を引き起こしている。移民村では国が水道や灌漑用の機械井戸を整備してくれたために水利用は便利になったが、移民たちにとって水は遠い存在となり、蓮花郷にいた時とは違って、用水問題は自力では解決できなくなっている。私たちが現場で行った聞き取り調査の「どのくらい水を使っている」という質問に対し、その答えとして電気使用料金の具体的な数字を言ってくれる移民がほとんどだった。それは、灌漑用の機械井戸に電気が使われ、水の利用は水代ではなく、電気代で請求されていることと関係があり、電気代の滞納が水利用のストップにつながるの、移民たちには水利用イコール電気利用と意識されているようだ。

それに、移民村は草原の生態環境保全のために造られたものだが、ここでの資源浪費は、放牧生活をしてきた蓮花郷の場合とは比べものにならないほど深刻である。移民村では、夏期間は24時間にわたり機械井戸での供水が行われ、水資源だけではなく、エネルギーなどの大量消費が引き起こされている。農業開発区では移民開発だけではなく、外来開発の誘導も行い、外来企業による「万亩葡萄基地」「万亩薬材基地」の造成が進められ、それにともない、深150mの機械井戸を150基掘る計画がなされている。

明海郷の統計によれば、2003年4月現在、80～150mの深い井戸が132基、80m以下の機械井戸が76基、合計208基の機械井戸が掘られている。その背景には肅南ヨグル自治県が明花区周辺農業地帯の井戸の数を意識し、それに危機を感じ、水資源の確保をしていることがある。同県の統計によれば、明花区周辺の農業地域の機械井戸数は、駱駝城郷は深さ80m以上の井戸が350基、高台县許三湾農業開発区には深さ100m以上の井戸が48基、塩池郷は48基、酒泉市黄泥堡郷は260基など、合計740基である。

そして、上記のような地域開発は、地元上井村住民の生活基盤を急激に変化させている。前にも触れたように、かつて、この牧民たちは明花行政区の中で最も広い牧草地をもっていた。しかし、耕地開発と移民の入植に伴い、上井村住民の飼料栽培が奨励されてきたために、現在、上井村の牧民はみんな広い面積の耕地をもつようになっている。彼らはこの開拓された大面積の耕地を生産基盤とし、飼料栽培による家畜の多頭化経営方式を展開している。したがって、飼料の増産は灌漑に依存しなければならないので、上井村では農業開発区と移民村と同様ように水資源の開発がどんどん進んできた。そして、灌漑により夏作と冬作を組み合わせた二毛作ができるようになった。しかし、灌漑は、家畜の高い生産効率をもたらす一方、皮肉にもその存続の基盤を崩壊するような作用をしている。耕地へのエネルギーの大量投入、地下水の大量の汲み上げ、化学肥料の投入などにより地域資源の乱用と枯渇が拡大している。

2004年から蓮花区において「禁牧」政策が実施されはじめるので、上記上井村のような生産様式が環境保全型のモデルとして「粗放式放牧」を徐々に代替していくであろう。

この研究調査報告書は、研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変動」の「文化人類班」のリーダーである小長谷有紀教授が提示した共同研究の枠組みによって執筆された。現地調査では、長い年同地域を研究対象にしてきた中央民族大学助教授鐘進文氏に多大なご協力と貴重なアドバイスをいただいた。ここに両氏に深くお礼を申し上げたい。

注

- ① 肅南ヨグル（裕固）族自治県は、ヨグル族を主体民族とする多民族居住地域で、甘肅省の河西回廊中

部と祁連山北麓に位置し、他の市や地区に隔てられている三つの地帯から構成する。人口は 35000 強で、その中でヨグル族が 28%、チベット族が 24%を占めるほか、モンゴル族、回族、保安（バオナン）族、東郷（ドゥンシャン）族、土（トゥ）族などが居住し、少数民族が全人口の 56%を占め、統計上は少数民族が漢族の人口を上回っている。

- ② 現在、中国では黒河流域における生態環境保全の対策として、流域の人口構成の調整を行っている。具体的には、水源涵養林地帯では放牧業を停止させ、中流地域では土地の利用構造を調整し、節水灌漑や生態経済的な農業を行っている。また、下流域のエチナ河沿河地帯では遊牧民と家畜を移出させ、遊牧を停止させるような措置が取られるという流域の人口分布調整政策がすでに始まっている。
- ③ 「蓮花郷湖辺子村年収支調査表」（2002 年に 6 世帯 14 人に対して行った収入調査）
- ④ 肅南県農業弁公室『肅南県明花区生態環境現状与経済可持續發展情況調査報告』2003 年
- ⑤ 「退耕還草」「禁牧」の実施に伴い、県政府は将来、「労働力輸出により群衆の経済的収入を増やす」と考えている。同④

主な参考資料

甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会『肅南裕固族自治県誌』1994 年

甘肅省肅南裕固族自治県統計局『甘肅省肅南裕固族自治県統計年鑑 2001』

肅南裕固族自治県人民政府『甘肅省肅南裕固族自治県 県情与開発』1999 年

鐘進文 主編『中国裕固族研究集成』2002 年 民族出版社

肅南県人民政府、県委『肅南裕固族自治県西部大開發戰略規画（討論稿）』2000 年

肅南県政協視察組『關於蓮花郷民族經濟發展情況的視察報告』1999 年

肅南県畜牧獸医工作站『肅南県畜種改良工作調査報告』2003 年

肅南県草原工作站『肅南県草原利用情況調査報告』（発行年不明）

肅南県深化牧区改革小組領導少組弁公室編

『肅南裕固族自治県夏秋草場承到戸以草定蓄草原有償承包飼料彙編』2002 年

肅南県明花農業綜合開發区、県郷鎮企業管理局

『甘肅省省級郷鎮企業師範区申告資料』2001 年

郭正賢初校 鐘進文整理

「關於 20 世紀 70 年代肅南県蓮花郷部分牧民搬？草古城一帶開荒造田大弁農場情況」

（手書き資料）2003 年

蓮花郷公署「20 世紀 50 年代到 2000 年的蓮花郷經濟發展情況」（手書き資料）2003 年

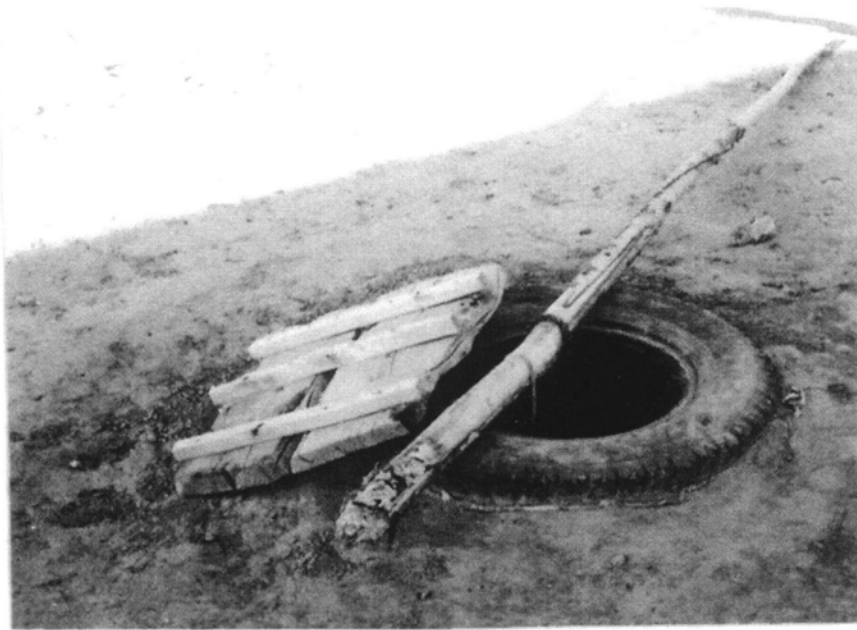
明海郷公署「20 世紀 50 年代到 2000 年的明海郷經濟發展情況」（手書き資料）2003 年



蓮花草原のオボー（湖の近くにあることが多い） (1)



「文革」時代に掘った湖からの引水路。すでに枯れている。 (2)



「冷蔵庫」として使われる枯れ井戸

(3)



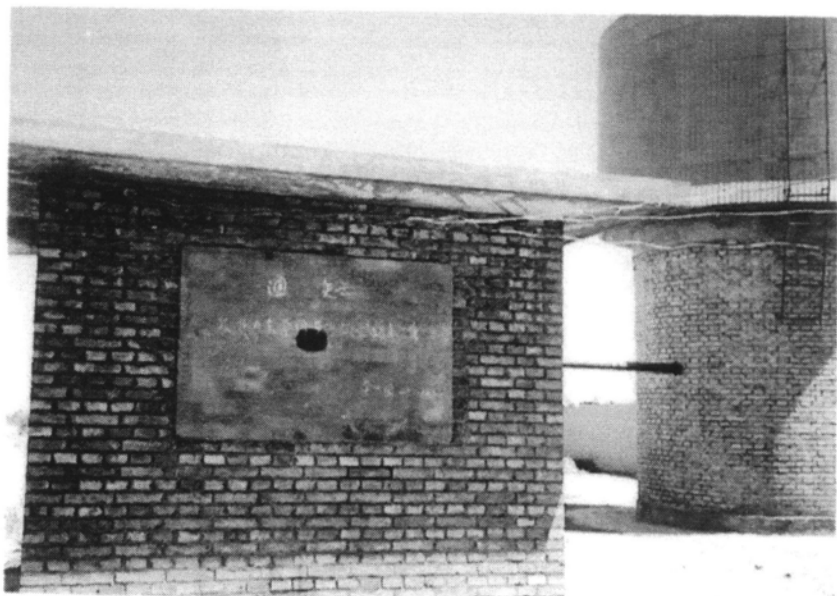
農業開発区に建てられた「生態建設と土地開発の結合」
を掲げる看板

(4)



24時間止まらない農地灌漑

(5)



水道の掲示板（水道代滞納者への催促）

(6)



繁殖が速いために人気を集める輸入品種改良羊

(7)

黒河下流域の調査報告

- 自然・社会環境変動下における現代牧畜民の適応戦略 -

児玉香菜子（名古屋大学）

1. はじめに

黒河下流域エチナ（額濟納）旗は過去 50 年の間に自然環境と社会環境において大きな変容をうけてきた。エチナ旗では黒河中流域の大規模な灌漑によって、河川流量が減少し、それともなう牧地の荒廃が大きな問題となっている。同時に、エチナ旗は人民公社化という社会主義集団化から市場経済化をめざした牧地分配と牧地使用权の個人化という大きな社会変容を経験してきた。50 年前のエチナ旗と現代のエチナ旗は自然環境と社会環境のどちらの文脈においてもまったく異なったものである。こうしたなかで、エチナ旗に暮らすモンゴル族牧畜民の生活もまた大きな変容を余儀なくされてきた。

本稿では、まずエチナ旗の過去 50 年間の自然環境と社会環境の変動を述べる。次に、こうした変動を経験してきたエチナ旗に暮らす現代のモンゴル族牧畜民の多様化する牧畜経営を詳述する。最後に、多様化する牧畜経営が水資源、そしてその変化とどのように関わっているのかを考察する。

2. 黒河下流域の過去 50 年の自然環境と社会環境の変動

エチナ旗は過去 50 年の間に劇的ともいえる自然環境と社会環境の変動を経験する。

2.1. 自然環境の変動

黒河はタリム河に次ぐ、中国第 2 の内陸河川である。黒河は青海省祁連山脈に発し、青海省、甘粛省、内モンゴル自治区に入り、下流の末端湖に注ぎこみ、砂の中に消える（図 1）。黒河の流域面積は 14.29 万平方キロメートルにおよぶ（楊 2002:1）。この黒河の下流域にあたるのが内モンゴル自治区アラ善（阿拉善）盟エチナ旗である（図 1）。黒河は下流域エチナ旗に入ると「十号」とよばれる国防科研基地¹から 2 つの川に分流する（図 1）。西側の分流はモンゴル語でムレン河、東側の支流はナリン河とよばれる（図 1）。ムレン河はガションノール（西居延海、秋順收尔）湖、ナリン河はソゴノール（東居延海、蘇泊收尔）湖に注いでいる（図 1）。

エチナ旗は年間平均降水量がわずか 37.9 mm にすぎない極乾燥地である（額濟納旗誌編纂委員会 1998:98）。しかし、河川沿岸、とりわけ黒河下流域の三角州には胡楊²やタマリスク³が繁茂し、緑豊かな湿地帯を形成している。エチナ旗におけるこうした自然環境は現地に暮らすモンゴル族牧畜民の自然認識にも反映されている。モンゴル族牧畜民は黒河下流沿岸流域一帯を、河を意味するモンゴル語「ゴル」とよび、それ以外の礫砂漠を「ゴビ」とよんでいる（図 2）。

¹ エチナ旗で「号」がつく地名は軍事用地を意味する。主に国防軍事用地をさす「特殊用地」面積はエチナ旗総面積の 3.5% を占める（阿拉善盟計画委員会主編 1991:25,29）。

² 胡楊はヤナギ科落葉高木で、モンゴル名はトーレー（Toorai）、学名は *Populus euphratica* である。同定は温都蘇編（1992）と『内蒙古植物誌』編輯委員会（1990,1998）、劉題心主編（2002）と竹内（2002）によった。

³ タマリスクはギョリュウ科落葉低木で、モンゴル名はソハイ（Soqai）、漢語名は紅柳、学名は不明で *Tamarix* 属である。同定は竹内（2002）によった。

モンゴル族牧畜民は「ゴル」の豊富な水資源と植生を利用した「オアシス遊牧」(小長谷 2002:6)をおこなっていた。

過去 50 年の自然環境の変動は、何より黒河中流域における大規模灌漑とそれに起因する下流域水量の減少、植生悪化と牧地荒廃である。

1950 年から現在までに黒河流域に建設されたダムのは数は大小合わせて 98 にのぼる(楊 2002:30)。中流域ではこうしたダムなどの設置によって大規模な灌漑が可能となった。中流域における灌漑面積は 1949 年中華人民共和国成立初期の 160 万畝-180 万畝から、現在までに 405.7 万畝(内有効灌漑面積 355.2 万畝)と 2 倍以上に増加した(楊 2002:30)。

河川水を利用した中流域の大規模灌漑によって、下流域エチナ旗の河川流水量が著しく減少する。図 3 は上流域、中流域、下流域のそれぞれ主要な水文測定所の流水量をグラフ化したものである(図 3)。図 3 から上流域の鳶落峽(図 1)は各年変動が大きいものの、50 年間ほぼ一定の流水量を維持しているのに対し、中流域の正義峽(図 1)は 50 年の間に流水量が半分近く減少していることが指摘できる(図 3)。とりわけ 1990 年代以降の減少が著しい(図 3)。下流域の狼心山(図 1)もやはり流水量が著しく減少している(図 3)。

こうした河川流水量の減少によって、ガショーンノール湖は 1958 年に 267 平方 km あったが、1961 年に干上がり、湖底を 2m 掘っても地下水が出ないようになる(楊 2002:6-7)。ソゴノール湖も 1958 年に 35.5 平方 km あったが、年々縮小し、1992 年に完全に干上がっている⁴(楊 2002:6-7)。それにともない、ナリン河、ムレン河沿いにあった大小の湖沼も枯れてしまう(楊 2002:6-7)。

黒河中流域で河川水を灌漑用水として大量消費する晩春から夏にかけて、下流域エチナ旗の河川の断流が恒常的におきるようになる。例年河道の断流の日数は 200 日以上にもなっている(楊 2002:53)。2001 年には狼心山(図 1)で 3 月 22 日から 9 月 10 日まで断流し、再び 10 月 26 日から年末まで断流し、年間断流日数は 238 日にのぼった(楊 2002:53)。河床では 2m 掘っても地下水がでなかった(楊 2002:53)。

このような河川流水量の減少と湖の消失・縮小にともない、植生悪化と牧地荒廃面積の増加が引き起こされている。河川流水量の減少によって、1958 年から 1980 年の間に下流域三角州の河岸沿いの川辺林、胡楊、沙棗⁵、タマリスクの面積が 85.95 万畝消失した(楊 2002:12)。さらに 1980 年代から 1990 年代半ばまでに胡楊、タマリスク、沙棗などが 288.6 万畝消失した(楊 2002:12)。現存する胡楊も疎林が主で、幼林の更新はほとんどおこなわれていない(楊 2002:12)。

一方、1980 年代から約 20 年間の下流域における牧地荒廃面積は約 1.3 倍増加し、総面積に占める割合が 11.58% 増加している(表 1)。枯渇した湖や牧地荒廃が砂嵐、黄砂発生源になっている(楊 2002:7)。こうした河川流水量の減少に加えて、近年干ばつが頻発している。

⁴ ガショーンノール湖がソゴノール湖より 30 年も早く枯れたのは、エチナ旗人民政府所在地のあるナリン河に優先的に水を流すようにしたためである。

⁵ 沙棗は漢名で、グミ科落葉高木である。モンゴル名はジクト(Jigde)、学名は *Elaeagnus angustifolia* である。同定は劉題心主編(2002)と竹内(2002)によった。

2.2. 社会環境の変動

エチナ旗に暮らすモンゴル族牧畜民たちはこの 50 年の間に自然環境だけでなく、大きな社会環境の変動を経験する。

1949 年中華人民共和国が成立し、1958 年人民公社が設立される。この年には軍用地接収による住居の強制移住がおこなわれている。さらに 1966 年からはじまった文化大革命では多くのモンゴル族が迫害を受けた（小長谷 2003）。今なおその傷は深く、モンゴル族牧畜民の記憶に深く刻まれている（小長谷 2003）。

文化大革命が終わり、人民公社が解体して生産請負制がはじまる。1983 年「草畜双承包」が施行され、家畜の私有化と牧地使用权の個人化、いわゆる牧地分配が実施された。家畜の私有化は中国国家政策の市場開放化政策とあいまって、牧畜民の牧畜経営に大きな変化を引き起こした（児玉 2002,3003）。さらに、牧地分配はこれまでの移動性の高い遊牧生活から「定着化」をもたらすことになる（小長谷 2001, 児玉 2003）。

2001 年下流域エチナ旗で「生態移民」という名の移住政策が開始される（小長谷 2002）。北京での砂嵐が深刻化するなかで、黒河下流域エチナ旗の植生悪化と牧地荒廃がその元凶の一つとされたのである。「生態移民」、胡楊林の保護のために 1500 人の移住が計画された（小長谷 2002, 楊 2002:130）。また、中国政府は胡楊林、牧地保護のために囲い牧地の設置と牧草栽培による畜舎飼いを推進している（楊 2002:129-138）。

こうしたなかで、エチナ旗は以下 4 つの大きな社会変化を経験する。

① 人口増加

1949 年以降、漢族移民の大量流入がはじまった。1949 年 2255 人に過ぎなかったエチナ旗の総人口数は 1990 年には 15102 人、約 6.7 倍も増加する（額済納旗誌編纂委員会 1998:154-155）。

② 農耕開拓

エチナ旗における耕地面積も人口増加にともない増加した。エチナ旗の耕地面積は 1956 年 0.04 万畝から 1970 年から 1980 年代前半にかけてピークを迎え、5 万畝以上に達する（額済納旗誌編纂委員会 1998:244-245）。1980 年代後半から耕地面積は減少していくが、1990 年でも耕地面積は 3.2 万畝に達し（額済納旗誌編纂委員会 1998:244-145）、これは、1956 年の耕地面積のじつに 80 倍に相当する。

③ 栽培作物の変化

栽培作物は小麦が主であったが、1988 年、1989 年からトウモロコシの栽培面積が増加する。トウモロコシの発芽から収穫までの水消費量は小麦の約 9 倍であり（松本 2002:7-8）、トウモロコシ栽培の水消費量は非常に大きい。

④ 家畜数の減少

表2はエチナ旗に暮らすモンゴル族牧畜民を対象におこなった聞きとり調査家族⁶の一覧表である。この表の項目は所属行政区分⁷と世帯主の世代、所有家畜数、品種改良の有無、牧草栽培面積、綿花栽培面積、移動の有無、2002年の収入とその内訳からなっている。

モンゴル族牧畜民にとって、家畜とは「マル (mal)」とよばれる五畜、ヒツジとヤギ、ウマ、ウシとラクダである。エチナ旗ではヤギの頭数が一番多く、次いでヒツジとラクダが多い(表2)。ラクダの所有は家族によってかなりばらつきがある(表2)。現在ウマとウシの所有は皆無に近い(表2)。

近年、家畜数の減少が著しい。表2の調査家族中、1990年代から現在までに家畜数が減少した家族は21家族にのぼり、そのうち10家族が半数以下に減少した(表3)。なかでも調査家族No.8は1998年小型家畜ヤギとヒツジ800余頭あったのが、現在200余頭にまで減少した(第3章2節参照)。調査家族No.28は1996年に小型家畜が900頭あったのが、200頭にまで減少した。

家畜数の減少の理由として、水資源の減少やそれに起因する牧地荒廃をあげる家族が多かった(表4)。ヤギの流産や未妊娠の事例も多数報告された。自然環境と社会環境の変動、生態移民政策のため、家畜数を減らす、減らさざるを得ない家族が増えている。

牧畜民家族の収入は主に家畜の生体売却と畜産品の売却である(児玉 2003)。とりわけ、カシミヤ毛売却による収入が大きい。よって、家畜数の減少は収入の減少につながる。

エチナ旗は過去50年の間に自然環境と社会環境において著しい変動を経験する。エチナ旗では中流域の大規模灌漑による河川流量の減少にもかかわらず、人口増加と農耕開拓によって水資源の過度利用が進んでいるといえよう。こうした劇的ともいえる自然・社会環境の変動のなかで、モンゴル族牧畜民は家畜数の減少を余儀なくされ、牧畜経営を多様化させている。

3. 現代における牧畜経営の多様化

3.1. 牧畜経営分類

エチナ旗ではこうした現状に対して品種改良と牧草栽培と綿花栽培がおこなわれている(表2)。マーンジャン・ソムに移住した家族もある(表2)。表5は表2の調査家族を収入順に並べ替えたものである。収入の内訳をみると、牧畜のみを収入源とする調査家族がほとんどであるが、収入のばらつきが大きい(表5)。そのなかで、2002年に綿花栽培をおこなった家族の収入は少なくとも2万元以上ある(表5)。牧畜経営の特徴は綿花栽培の有無と移住の2点であるといえる。

ここでこれら牧畜経営に着目して、調査家族を3つに分類してみよう。

まず、綿花栽培をおこなわず、ヤギ飼養に特化している調査家族を「ヤギ特化型」とする(表6)。

次に、牧畜以外に現金収入を得ている、なかでも綿花栽培をおこなっている家族を「綿花栽培型」とする(表7)。これには今年から綿花栽培を始めた調査家族No.6とNo.12も含む(表7)。自己所有の農地を他人に賃貸して現金収入を得ている家族も含む(表7)。なぜなら、農地を借りた漢族が綿花栽培

⁶ 聞きとり調査は2003年8月から10月にかけてモンゴル語によっておこなわれた。本稿でとりあげる数字は特に明記しない限り、この調査によって得られたデータにもとづくものである。

⁷ 所属行政区分であるが、エチナ旗の下位行政に「鎮」と「ソム」がある。これらは村に相当する。さらにその下位行政である「ガチャ」はエチナ旗における最末端行政区分で、「字」に相当する。

をおこなうからである。ただし、調査家族 No.10 は 2002 年に農地賃貸をおこなっただけで、今後農地を賃貸する予定も綿花栽培をおこなう予定もないので、「綿花栽培型」には含めず、「ヤギ特化型」とする（表 6,7）。

最後に、マーゾンシャン・ソムへ移住した家族を「ヤギ・ラクダ移動型」（表 8）とする。

（1） ヤギ特化型

ヤギ特化型には以下 3 つの経営方針がある。ヤギ特化型の牧畜経営はこれらを組み合わせものである。

- ① 季節移動
- ② 牧草栽培
- ③ 品種改良

① 季節移動

エチナ旗には定着化の度合いに応じた 3 種類の移動形態がある。

1 つ目の移動形態は、四季の 4 回もしくは夏と冬の 2 回の季節移動をおこなう、いわゆる遊牧である。ドライブブ（達来呼布）鎮オランゲレルとバインボクト・ソム、エヒンチャガーンに暮らす調査家族が遊牧をおこなっている（表 6）。

2 つ目の移動形態は、一箇所の牧地内で移動をおこなう牧地内季節移動である。

3 つ目の移動形態は、まったく移動をおこなわず、完全に定住化したものである。

牧地内季節移動や完全定住の家族に普及しているのが牧草栽培である（表 6）。

② 牧草栽培

牧草栽培とは家畜に与える干草、主にトウモロコシの草⁸や高粱などを自家栽培することである。牧民たちはこれら収穫された干草を販売することなく、越冬・春用の飼料として利用している。一方で、牧草栽培には灌漑が必要であり、深井戸の設置、さらに牧地の開墾と柵作りなど多額の投資が必要である。移動の縮小は牧地への負担増を意味する。牧草栽培は移動が縮小する中で牧地への負担を補い、より安定した家畜への飼料供給をめざす形で普及してきたといえよう。

③ 品種改良

品種改良とはカシミア毛の産量が多い種オスヤギやメスヤギを導入することである。現在品種改良による価値の大きいカシミア毛の増産をはかり、家畜数減少に起因する減収を補うために品種改良が普及している。品種改良には他地域からの種オス、メスの購入のために資金が必要である。

ヤギ特化型は No. 1 と No.10、No.11 と No.18 を除いてすべての収入を牧畜によっているが、年間総収入が 1 万元以下の家族もあれば、5 万元に達している家族もある（表 6）。この収入の格差は牧畜経

⁸ エチナ旗では、遺伝子組み換えの増産型種子を使用した飼料栽培もおこなわれているが、非常に少ない。

営のあり方にあるようだ。今後、遊牧をおこなう家族の定着化が進めば、牧草栽培や品種改良が広くおこなわれるようになるであろう。近年、政府によっても囲い牧地の設置や飼料栽培が積極的に推し進められている。品種改良や牧草栽培への投資の可否によって、今後より大きな貧富の差がもたらされるかもしれない。

(2) 綿花栽培型

家畜数の減少への対応として牧畜以外に収入を求める家族もふえている。換金作物の栽培、とりわけ綿花栽培を始める家族が多い。綿花栽培の最大の特徴はその現金収入の大きさにある。綿花栽培によって1畝あたり1000円の利益が見込めるそうである。2002年綿花栽培をおこなった調査家族の総収入は2万元以上である(表7)。2002年の収入が2万元に満たなかったNo.6とNo.12も、綿花栽培による収入によって、2003年は2万元以上の収入を見込んでいた。綿花栽培は安定した収入源となっているといえよう。しかし、綿花栽培には種の購入、化学肥料、摘み取り人夫賃金など多額の資金と労働力を必要とする。このように綿花栽培はそれまでの生活を大きく変えるものであり、綿花栽培の導入は牧畜経営の大きな転換であるといえる。

綿花栽培型は漢族家族をのぞいて、エチナ旗中心の人民政府所在地郊外のウスルングイ・ガチャ(東方紅)やソゴノール・ソムに集中している(表7)。綿花栽培型には牧草栽培も広く普及している(表7)。綿花栽培を始めるにあたり、牧草栽培をおこなっていた農地を綿花栽培に変える場合がほとんどであった。今後ヤギ特化型の調査家族でも牧草栽培をおこなっている家族を中心に安定した収入をめざして綿花栽培が普及していくことが予想される。

(3) ヤギ・ラクダ移動型

マーゾンシャン・ソムは礫沙漠「ゴビ」が広がり、山が多い。雨が降れば、草がよく育つという。2002年まで牧地分配がおこなわれていなかったマーゾンシャン・ソムでは井戸を掘り当てることができれば、その牧地を使用できるとされてきた。ただし、水質が非常に悪く、飲用可能な井戸を掘り当てるとは非常に困難である。マーゾンシャン・ソムは人民政府所在地から約300kmあり、道路は舗装されておらず、交通が非常に不便である。また、電気もなく、携帯電話も通じない。

このように非常に不便なマーゾンシャン・ソムへの移住はこれまで「生態移民」としての強制移住であるされてきた。しかし、マーゾンシャン・ソムへの移住は正確には「間接的強制移住」である。天鵝湖(居延澤)湖畔に暮らしていた調査家族No.32は天鵝湖が2000年に枯渇したことを機に移住を決意した。ラクダ牧民を対象にマーゾンシャン・ソムへの移住政策が実施されるとのうわさを聞き、先に移住してよりよい牧地を確保しようという思惑もあった。調査家族は水資源の減少や定住化、囲い牧地の設置などの政策がおこなわれるなかで、ラクダ放牧を続けるために自らマーゾンシャン・ソムへ移住したのである。しかしそれは自主的におこなったとはいえ、水資源の減少や、囲い牧地の設置と牧草栽培を推進する政策下において、そうせざるを得なかったのであり、「間接的強制移住」といえよう。

ヤギ・ラクダ移動型の特色は、ヒツジが「ゴビ」に適さないことからヒツジをまったく飼養しておらず、ヤギとラクダに特化していることである(表8)。移住して間もない家族が多く、これら家族の今後

を占うことは困難であるが、調査家族のどの家族もマーゾンシャン・ソムに移住したことを後悔していなかったことは印象的であった。

ただし、今後マーゾンシャン・ソムに新たに移住する家族がそこで新しい適当な牧地を見つけ出すのは非常に困難であろう。牧畜局関係者は今後もし移住を希望する家族があれば、説得してやめさせると語っていた。しかし、それでも深刻化する水資源の減少、囲い牧地や牧草栽培をきらって、広大な牧地でヤギとラクダの放牧をおこなうためにマーゾンシャン・ソムへ移住する家族がないとはいえないであろう。

エチナ旗では、河川流量の減少や定着化が進み、牧地荒廃が深刻化している。こうした影響によって、家畜数が減少し、その対応をめぐって牧畜経営が多様化している。

「ヤギ特化型」は、ヤギに特化し、高収入をもたらすカシミア毛産出ヤギの品種改良を積極的におこなっている。なかでも定着化が進む「ヤギ特化型」は不足する家畜飼料を補うために牧草栽培をおこなっている。

「綿花栽培型」は「ヤギ特化型」と同様、品種改良や牧草栽培にも取り組んでいるが、牧畜以外の収入、綿花栽培にも収入を求めている。綿花栽培は高収入をもたらしてくれる一方、多大な労働力と投資を必要とする。

「ヤギ・ラクダ移動型」は定着化とはまったく逆に広大な牧地が残るマーゾンシャン・ソムへ移住した家族である。この移住は水資源の減少や定着化、囲い牧地の設置などの政策がおこなわれるなかで、ラクダ放牧を続けるためにマーゾンシャン・ソムへ移住せざるを得なかった「間接的強制移住」である。

では、次にこれら多様な牧畜経営のあり方を、自然・社会環境と水資源との関わりを軸に、それぞれ調査家族の典型的事例を挙げて説明する⁹。

3.2. ヤギ特化型の事例 - 調査家族 No. 8、A家

(1) A家

ヤギ特化型の事例としてとりあげる調査家族 No. 8 のA家は、季節移動をおこない、牧畜を営むモンゴル族牧畜民家族である(表6)。A家はエチナ旗人民政府所在地から南東へ四輪駆動車で約30分のところにあるダライフブ鎮オランゲレル・ガチャのナリン河沿岸に冬営地をかまえる¹⁰。この冬営地は「ゴル」で、ナリン河の沿岸部分に胡楊林が繁茂しており、胡楊林保護のための柵が設けられている¹¹。

A家の家族構成は、2年前に夫を亡くした女主人A(45歳)¹²と息子2人と孫1人の4人家族である(図4)。A長女(23歳)夫婦は人民政府所在地で食堂を営んでいるので、子供をAに預けている(図

⁹ ここでとりあげる調査家族はデータがよくそろっている家族である。なかでも、綿花栽培型で取り上げる調査家族は筆者が住み込み調査をおこなった家族である。本章で取り上げる典型的事例の中でも牧畜経営などについて理解が深い家族である。

¹⁰ 筆者は2003年9月25日にこの冬営地で聞きとり調査をおこなった。

¹¹ 植生班と水文班が2003年秋にここでトランセクト調査区を設置している。

¹² 年齢は2003年時のものである。モンゴル族は数え年のため、干支で確認した。

4)。A次女（20歳）はウーシン旗賓館で働いており、同居していない（図4）。Aの子供たちはみな中卒である。A長男（20歳）はAと同居しながら、ナリン河護岸工事の肉体労働に従事している。A次男（19歳）は、父が亡くなったので、実家に戻っているが、2003年中に軍隊に入りたいと思っている。

（2） 所有家畜数

A家は現在ヤギ 245 頭とラクダ 26 頭を飼養している（表6,9）。当歳子ヤギの頭数が成メスヤギと比較して非常に少ないのは（表9）、2002年冬に降雪が多く、流産したヤギが多かったためである。この降雪でヤギが20頭-30頭死亡した。ラクダでは、2歳ラクダが5頭いたが、1頭病死し、3頭紛失している（表9）。近年、エチナ旗全体でラクダの盗難が問題になっている。A家はヒツジが牧地に合わなくなり、太らなくなったため、2003年最後のヒツジ9頭をヤギ9頭と交換して、現在ヒツジを1頭も飼養していない（表6,9）。ロバは高齢化し、性格が悪かったため、A家はこのロバを2001年1頭1200円で売却した。

（3） 家畜分配とその後の家畜頭数の変化

オランゲレル・ガチャでは1983年に家畜の私有化がおこなわれ、人民公社所有の家畜が各家族に家族の構成人数によって分配された。A家の家族数は当時A義父母とA夫婦の4人家族で、合計ヤギ149頭とヒツジ49頭が分配された。

1983年家畜分配と同時に牧地使用权の個人化、いわゆる牧地分配がおこなわれる。A家には夏営地と冬営地の2つの牧地が分配され、冬営地・秋営地約9000畝、夏営地約5000畝が分配された。現在4つの営地があるが、みな牧地は「ゴル」にある。分配当時、冬営地には草が食べきれないほどあり、ソゴノール・ソムやバインボクト・ソムの十号あたりの牧畜民が夏営地として放牧にやっていた。合計1000頭もの家畜が放牧されていたそうである。

A家では1995年ごろまでに小型家畜は600余頭に、1998年には800余等にまで増加する。しかし、1998年からナリン河が断流する。ナリン河の断流と同時に牧地の植生が悪化した。そのため、A家は家畜の売却や家畜の死亡などによって、現在ヤギ245頭にまで減少した（表9）。

（4） 牧畜経営戦略

水資源の減少と植生悪化、それにもなって家畜数が減少するなかで、A家はどのような牧畜経営を営んでいるのであろうか。

まず、季節移動である（図5）。季節移動によって広大な牧地の利用が可能となっている。

次に、家畜飼料の確保である。植生悪化や干ばつの影響がもっとも大きくあらわれるのが家畜の出産期を迎える冬と春である。A家は越冬・春用の家畜飼料として2002年草刈りでホロス（Hulusu）¹³をトラクター2台分用意し、トウモロコシ飼料を500kg購入した¹⁴（表10）。2003年には干草をホロス、ト

¹³ ホロス（Qulusu）はモンゴル語名で、イネ科多年生草本である。漢語名は齔齔草、学名は *Achnatherum splendens* である。同定は『内蒙古植物誌』編輯委員会（1990,1998）と竹内（2002）によった。

¹⁴ 2002年とうもろこしの購入に対して、国からの援助があり、通常の販売価格の半額で購入できた。

ラクター2台分とチェグリグ¹⁵、トラクター2台分用意した(表10)。しかし、A家は牧草栽培をおこなっていない。降雪のためとはいえ大量のヤギの流産があったのはこれだけの準備をもってしても越冬・春用の家畜飼料が不足だったことが考えられる。

家畜頭数の減少対策として導入しているのが、品種改良、カシミア毛産量の多い種オスの導入である。A家は2002年種オスヤギ1頭を500円で購入した。また、A長女の婿からカシミア毛産量の多い種オス1頭をもらった。しかし、Aによると、種オスヤギのカシミア毛産量は1頭300gで、「牧地がよくないので、毛(カシミア毛)がよくない」そうだ。2003年にも良質のカシミア毛産量が多い種オスヤギを購入したかったが、1頭900円と高価だったため購入できなかった。

A家の年間収入は2万元以上でかなりよいが(表6)、これは家畜を大量売却したためであり、常に確保できるカシミア毛の収入は1万円である。

周到な牧草の準備と品種改良の可否がA家の今後の収入の安定をはかるカギとなろう。

(5) 1年の暮らし

ここで、A家の1年の暮らしを紹介しよう(図5)。

A家は例年1月冬営地でヤギの出産を迎える(図5)。

2月になるとヤギの出産が少し落ち着き、空いた時間に薪集めや囲いの修理などをする(図5)。

3月になると春営地に移動する(図5)。3月はのんびりした月である。

4月10日からカシミア毛梳きの作業にとりかかる(図5)。これは5月末まで続く(図5)。

6月になると夏営地に移動し、ヤギの搾乳をはじめる(図5)。ヤギの搾乳は7月まで続く。6月と7月はラクダの見張りもおこなうが、とりたてて忙しい月ではない(図5)。

8月と9月は草刈りをおこなう(図5)。

10月に秋営地に移動し、1ヶ月滞在する。

11月に冬営地に移動し、これまで自由に放牧させていたラクダを集める(図5)。

12月にはヤギの放牧とラクダの放牧もおこなう(図5)。

牧畜作業が一段落した10月からヤギの出産が始まる翌年1月までのんびりしている。

A家は例年より3ヶ月早い9月に冬営地にやってきていた(図5)。2003年は夏営地付近でナリン河の護岸工事がおこなわれ、牧地が掘り返されたり、石が集められた。そのため夏営地には(草が)何もなかったためである。しかし、草刈りをおこなう牧地が夏営地にあるため、行き来で忙しかった。ここでも国の政策が住民の生活におよぼす影響を指摘できる。

(6) 水資源

河川流量の減少という水資源の変化はモンゴル族牧畜民が利用する「水」にも影響を与えている。

A家は各季節の居営地に井戸をもっている(表11)。A家は本来それぞれの牧地で水深4m前後の開放

このため、2002年調査家族すべてでトウモロコシ飼料を購入していた。

¹⁵ チェグリグはモンゴル語名で、マメ科落葉半低木である。漢語名は駱駝刺、学名は *Alhagi maurorum* var. *sparsifolium* である。同定は劉題心主編(2002)によった。

井戸を使用していた（表 11）。しかし、1990 年代後半から水質の悪化や井戸の枯渇のために開放井戸が使用できなくなる（表 11）。現在、開放井戸はほとんどポンプ式井戸にかわっている（表 11）。A 家は水道代がかからないので水消費量が多いというが、灌漑をおこなっておらず、水資源に対して節約型であるといえる（表 12）。

河川流水量の減少が家畜数の大幅減少、井戸水の水質悪化や枯渇などを引き起こし、A 家の牧畜経営に対して非常に大きな影響を及ぼしている。そうしたなかで A 家はヤギに特化し、季節移動と品種改良をおこなっている。

3.3. 綿花栽培型の事例 - 調査家族 No. 4、B 家

(1) B 家

綿花栽培型の事例としてとりあげる調査家族 No. 4 の B 家は、季節移動をおこなわず、完全に定住化して牧畜と綿花栽培をおこなうモンゴル族牧畜民家族である¹⁶（表 7）。B 家は、人民政府所在地から四輪駆動車で約 10 分と街から非常に近いところにあるダライフブ鎮ウスルングイ・ガチャのナリン河沿岸近くに暮らす。ウスルングイ・ガチャー帯は「ゴル」に位置し、胡楊とタマリスクが群生している。

B 家は B（51 歳）と B 妻（48 歳）、B 長男（22 歳）、B 次男（18 歳）と B 父（79 歳）の 5 人家族である（図 6）。他に 2003 年 7 月から B 妻の兄（52 歳）が住み込みで働いている（図 6）。B 家は 2 人の息子が同居し、さらに B 妻の兄がおり、労働力に非常に恵まれている（図 6）。

(2) 所有家畜数

B 家は現在ヤギ 223 頭、ヒツジ 27 頭、ラクダ 30 頭を飼養している（表 7, 9）。これらの家畜以外にロバ 2 頭いる（表 7）。B 家はウスルングイ・ガチャの中で所有家畜数が 1 番多い家族である。

(3) 家畜分配とその後の家畜頭数の変化

ウスルングイ・ガチャでは 1982 年に家畜分配が家族の構成人数によっておこなわれた。1982 年当時 B 家は B 父と B 継母と B 異母妹の 3 人家族であった¹⁷。

家畜分配基準はヤギ・ヒツジ 40 頭/人、ラクダ 8 頭/人で、B 家には合計ヤギ・ヒツジ 120 頭とラクダ 24 頭が分配された。他に個人所有のヤギ・ヒツジが 20-30 頭、ヤギが 10 余頭あった。分配された家畜は有償で、20 年で返却することになっていた。B 家はすでに支払いを終えている。

家畜分配の翌年 1983 年に牧地分配がおこなわれた。牧地分配はそれまでの居住地と家畜数を基準にしておこなわれた。B 家は 700 畝分配された¹⁸。この牧地面積は A 家と比較して非常に狭く、ウスルン

¹⁶ 筆者は 2003 年 8 月 24 日から 8 月 31 日まで B 家に住み込み、聞きとり調査をおこなった。

¹⁷ B が草刈り機トラクターの運転手を、B 妻が教師をしていたために、B 夫婦は B 父と同居していなかった。1998 年 B 父が高齢化したため、B 夫婦はウスルングイに帰ってきて暮らすことにした。B 継母と B 異母妹は現在人民政府所在地に暮らしている。

¹⁸ B 父はラクダ牧畜民でゴビに暮らしていた。1983 年まで B 夫婦はソム中心に暮らしていたため、分配される牧地がなかった。そこで、B 妻と親戚関係にあるウスルングイ・ガチャの前書記 G が高齢のラマと小さい姉弟 2 人だけの T 家の牧地の一部を割譲するかたちで牧地を分配した。現在、B 家と T 家の

グイ・ガチャの中でもけっして広いほうではない。

しかし、A家の家畜数は少なくない（表7）。また、B家の家畜死亡数は2002年成ヤギ3頭と成ラクダ2頭、2003年成ヤギ1頭と当歳子ヤギ3頭のみである。ヤギ特化型A家と比較して、B家の家畜死亡数は非常に少ないといえる。所有家畜の内訳をみると、メスの頭数と当歳子ヤギと2歳ヤギの頭数の開きがほとんどない（表9）。A家は年間収入も32,000元と非常に高い（表7）。

（4） 牧畜経営戦略

B家は非常に周知な飼料準備と積極的な品種改良と綿花栽培で経営を維持している（表7、10）。

B家は2003年草刈りで干草1,500kg用意し、自家栽培によってトウモロコシ実350kg、干草1,000kgも準備している（表10）。この牧草栽培には灌漑が必要である。

A家と比較して、B家が狭い牧地で多い家畜数と少ない死亡家畜数を可能にしているのは家畜飼料の準備の差異に求められるであろう。

また、B家は以下のように積極的な品種改良をおこなっている。

- ① 2002年Bは自らアラシャン左旗へ行き、カシミア毛産量の多いヤギを購入した。

種オスヤギ1頭500元 - 1頭・・・500元

成ヤギメス1頭200元 - 31頭・・・6200元

この運送代は畜牧局が負担している。この新しい品種は1頭あたり300gのカシミア毛を産出する。一方、在来種では成ヤギ1頭200g、2歳ヤギ1頭100gである。

- ② 2003年カシミア毛産量の多い当歳子畜と成ヤギを交換した。

B 当歳子ヤギオス2頭¹⁹+当歳子ヤギメス8頭 計10頭 ⇔ 成ヤギ10頭

B家は品種改良のために、種オスヤギだけでなく、メスや当歳子ヤギも積極的に導入している。

他に、Bは他家の草刈りを草刈り機トラクターでおこない、例年3000元の利益を得ている。B家は冬にワナ利用のウサギや野鳥の捕獲もおこない売却している。B妻は現在農機局に勤めており、月1500余元の給与を得ている²⁰。

さらにより安定した収入をめざして、B家は2003年綿花栽培をおこなった。綿花の播種面積は19畝で、収穫面積は18畝である。綿花栽培はその収入も大きいのであるが、投資経費も大きい。たとえば、B家は種と化学肥料²¹の購入に約2500元支出している。綿花摘みも非常に大きな労働力を必要とし、日雇い人夫の賃金だけでも相当なものである。しかし、B家は労働力が豊富なため、家族総出でおこなう

独立した2人の子供たちの家2軒、合計3軒が隣接している。ただし、T家の姉はマーゾンシャン・ソムへ移住した。水文班がT家の牧地の胡楊林に水位計を設置している。

¹⁹ 当歳子ヤギオス2頭のうち1頭は種オスにする予定である。

²⁰ B妻は月200元支払うことで、出勤を免除されている。

²¹ 化学肥料は2回与える。化学肥料投与後、灌漑をおこなう。化学肥料使用量は年間360kgで、540元の支出である。

ことによって支出を抑えている。2003年秋には綿花栽培だけで2万円もの収入が見込まれていた。

綿花栽培は2003年に始められたわけではない。A夫婦がここに住み始めた1998年から耕地を作り農耕をはじめ、この年綿花栽培だけで2万円の収入を得ている。1畝90円で農地賃貸をおこなった年もあった。2001年にはハミ瓜栽培をおこない、2万円の収入を得ている。2002年綿花栽培をおこなったが、春に河川水が来なかったため全滅してしまった。必ず播種後に河川水で灌漑をおこなわないと発芽がしないそうである。

このように安定した収入をもたらす綿花栽培であるが、河川水に大きく依存している。河川水の確保如何によっては綿花栽培による収入がまったく見込めないこともある。

(5) 1年の暮らし

ここで、B家の1年の暮らしを牧畜作業と農作業を中心に紹介しよう(図7)。

牧畜作業(図7)

1月から家畜の出産をむかえ、3月まで続く(図7)。

出産が一段落すると、4月10日から5月末までカシミヤ毛梳きがおこなわれる(図7)。

5月にはラクダの毛刈りもおこなう。

6月から7月までの牧畜作業は、B家ではヤギの搾乳をほとんどおこなっていないため、小型家畜の放牧のみで(図7)、しかも午前中だけである。

8月に草刈りをおこなう(図7)。

農作業(図7)

農作業は4月からはじまる(図7)。

4月に土おこし、種蒔き、河川水による灌漑をおこなう(図7)。

5月から8月まで雑草取り、化学肥料の投与、灌漑が随時おこなわれる(図7)。

9月になると綿花摘みが始まり、家族総出で従事する。これは10月末で続く(図7)。

11月になると地ならしをおこない、農作業が一段落する(図7)。

B家は農作業のために春から秋末にかけて非常に多忙な毎日を送っている(図7)。A家と比較して、B家は農作業のために非常に多忙であるといえる(図5, 7)。

(6) 水資源

ウスルングイ・ガチャー帯では水資源の変化に対する認識の共通性が指摘できる(表13)。それは河川流水量の減少とそれによる牧地荒廃である(表13)。

B家では飲用水用の開放井戸が5年ほど前に枯渇してしまった。その井戸の隣りに開放井戸を掘って

みたが、飲用に適した水ではなかった²²。現在飲用水を隣家からロバの荷車で1回の運搬で約175 kg運んでいる。夏は使用量が多いので、5日に1回、冬は12日に1回取りに行く。家畜用にはポンプ式井戸を利用している。

飲用水に関しては隣家まで取りに行かなければならないため、飲用水が、A家と比較して浪費されているとはいえない(表12,14)。しかし、B家は牧草栽培と綿花栽培に灌漑をおこなっている(表14)。24畝の農地を河川水で年に灌漑1回、深井戸で年に灌漑5,6回おこなう(表14)。B家は水消費量が大きいトウモロコシ栽培と綿花栽培というきわめて浪費型の水利用をおこなっているといえる。

B家は品種改良と牧草栽培と綿花栽培によって、きわめて安定した牧畜経営をおこなっている。しかし、それは水資源の浪費で成り立っているものである。

今後、他家族でもより安定した収入をめざした綿花栽培や牧草栽培の拡大が予想される。農地面積の拡大は、地下水という水資源の浪費をもたらすものである。

3.4. ヤギ・ラクダ移動型の事例 - 調査家族 No.30、C家

(1) C家

ヤギ・ラクダ移動型の事例としてとりあげる調査家族 No.30、C家は、綿花栽培型でとりあげたB家が暮らすウスルングイ・ガチャから2001年春にマーゾンシャン・ソムに移住した家族である²³。C家は現在C夫婦(ともに62歳)とC四男(31歳)の3人家族で、C四男以外はみな独立している(図8)。C長男(43歳)家族も2001年にマーゾンシャン・ソムへ移住している。

C家は人民政府所在地から約230 km、四輪駆動車で約4.5時間のところにある。近くにマイハン・ハラ²⁴とよばれるテントの形をした黒い山があるので、居住地はマイハン・ハラとよばれる。ゲルに居住している。ここは街から遠く離れ交通の便が悪く、電気もなく、携帯電話も通じない、非常に不便な地である。

なぜこんな不便な地にC家は移住したのか。移住前と移住後ではどのような変化があったのか。本節では「移住」に焦点をあて、C家の牧畜経営を明らかにしてみたい。

(2) 移住の背景 - なぜ移住したのか?

2001年春、C家はマーゾンシャン・ソムへ移住した。移住前の居住地、ウスルングイ・ガチャでは主にヤギとラクダの放牧をおこない、トウモロコシ20畝を栽培していた。

CとC妻は移住理由として以下をあげている。

- ・ 生態移民政策でウスルングイ・ガチャに住まわせない(C)。
- ・ (ウスルングイ・ガチャの)牧地が悪くなった(C)。

²² 飲用に適さない水は「ガシヨーン」と表現される。ガシヨーンは本来苦いという意味であるが、ここでは塩分濃度が濃いことを意味する。

²³ 筆者は2003年9月6日にマイハン・ハラでCに聞きとり調査を、9月14日に人民政府所在地でC妻に聞きとり調査及びライフストーリーの予備調査をおこなった。

²⁴ マイハン(Maiqan)はテントである。

- ・ 農耕と囲いの設置が大変である (C)。
- ・ (移住して) 家畜を増やしたい (C)。
- ・ 農耕をしなくては行けないが、年をとってできない (C妻)。
- ・ 農耕をする場所がない (C妻)。
- ・ ウスルングイ・ガチャは草が悪くなっていった (C妻)。
- ・ 水がこない (C妻)。

C家が指摘する理由をまとめると以下の二点になる。

- ① 生態移民政策で将来移住させられる。
- ② ウスルングイ・ガチャでは牧地が悪化し、ヤギ・ラクダの放牧に適さない。
- ③ 「移民村」に居住しても、家畜飼料の自家栽培によって家畜の畜舎飼いをこなうことができない。

また、C家は人民公社時代に 1975 年 8 月から 1976 年 9 月までマーゾンシャン・ソムに 1 年移住させられたことがあった²⁵。このように過去の居住体験からマーゾンシャン地域への認識があったことも移住の理由としてあげられよう。

では移住後、C家の生活はどのようなものになったのであろうか。

(3) 移住後の生活

Cはマーゾンシャン・ソムに移住して来た当初、この移住を失敗したと思ったと述懐している。

移住する際、C家の家畜所有数はヤギ 170 頭とラクダ 60 頭であった。ヒツジは処分した。C家は井戸を探して、いろいろ移動したのちに 2001 年マイハン・ハラにやってきた。しかし、ウスルングイで育った家畜はマーゾンシャンに慣れず、病気や子畜がうまれないなどで、家畜数が減少する。2002 年肝炎でヤギが 30 頭死亡した。成ラクダ 2 頭と当歳子ラクダ 2 頭も病気で死んでいる。ラクダはいまだ移住先の牧地に慣れず、200 km 以上も離れているウスルングイ・ガチャに帰っていかうとするそうである。

現在、C家はヤギ 100 余頭とラクダ 30 余頭を飼養している (表 8, 9)。C家は移住前と移住後で家畜数が半分近くにまで減少している。2 歳ヤギがゼロなのは (表 9)、当歳子ヤギがうまれると草とトウモロコシの消費量が多くなるので 2002 年種オスヤギをいれなかったからである。C家は種オスヤギと種オスラクダを所有しておらず (表 9)、他家から借りている。

さらに移住してきた 2001 年春にオトルに出ていて、マイハンに住んでいた際に火事にあってしまう。収入源であるラクダ毛とカシミア毛、さらにマイハンやフェルト、じゅうたんなど生活用品もすべてが燃えてしまった。エチナ旗人民政府から 4000 元と布団、小麦粉、米、油が支給されたが、C妻によるとその損害額は 2 万元にのぼったそうである。

C家は、このように家畜が減少し、火事にも遭い非常に苦労した。だが、Cはここ 2 年草もよく、2003

²⁵ 当時、牧地が悪くなり、人民公社はラクダ牧民にラクダを遠くで放牧させようとした。Cはこの時人民公社のラクダ 200 頭をつれてマーゾンシャン・ソムに 1 年暮らしている。人民公社の家畜を死なせると大変なので、この時Cは移住に対して気が進まなかった。

年は子畜もうまれたので、これからは生活がよくなるのではないかと考えている。

(4) 生態移民政策の実態 - C家の事例から

生態移民政策とは畜牧局関係者によると以下のようなものである。

「胡楊林に暮らす牧畜民を対象にして、ダライフブ鎮人民政府所在地郊外の一角に設けられた通称『移民村』に移住させる政策である。無償で畜舎付固定家屋と農耕地が支給される。農耕地で牧草栽培をおこない、その飼料で完全畜舎飼いをこなって生計をたてていく。元来の牧地は柵で囲い禁牧地にし、保護する。この移住は住民の自由な意思にもとづくものである。マーゾンシャン・ソムへの移住に限っては家屋分配先を『移民村』かマーゾンシャン・ソムの自分の居住地か選択できる」

マーゾンシャン・ソムに移住した家族はみな家屋の無償分配を受けていた。1990年代後半に移住した家族にも固定家屋の分配がおこなわれている。C家は「移民村」に畜舎付きの4人家族分、約70平米の固定家屋を無償分配された。農耕地は分配されていない。元来の牧地はC家が自ら500余元出資して、囲い牧地の柵の溝を作ったが、政府が柵を立ててくれなかった。そのため、隣家の家畜が牧地に入っている。さらに近くにある農場の漢族が本来あった柵までまきとして使用し、牧地は移住前よりも悪化している。このような状況であるが、C妻はヤギやヒツジ数頭でよいから建前として「移民村」で畜舎飼いをこなわなければならないと語っていた。

生態移民政策と実際の実施状況の食い違いは非常に大きい。聞きとり調査家族のなかにも住居の無償分配を受け、「移民村」へ移住を予定している家族が多数あった。今後、すでに「移民村」へ移住した家族を対象に調査をおこない、生態移民政策の実態を明らかにする必要がある。

(5) 牧畜経営戦略

C家の2002年の年間収入は約6400元である(表8)。この額は他のヤギ・ラクダ移動型家族の年間収入の半分以下である(表8)。収入の内訳はカシミア毛とラクダ毛の売却収入である²⁶。収入が少ない原因は家畜数が少ないこともあるが、家畜の生体売却を一切おこなっていないからである。さらに、C家の年間消費小型家畜数はわずか2,3頭にすぎない。C家はラクダの屠殺もおこなっていない。エチナ旗ではモンゴル族牧畜民が年間で消費する小型家畜数は少なくとも10頭以上、多い家族では年間20頭以上にもぼっている。そのかわり、C家は人民政府所在地からブタ肉やヤギ肉やラクダ肉などを購入している。急激に家畜が減少したC家は家畜の売却・消費を抑えることで家畜数の回復をはかっているのである。こうした経営戦略がおこなえるのはカシミア毛とラクダ毛という資本を減らすことのない利息だけで収入がまかなえるからである。

マーゾンシャン・ソムでは牧草栽培はもとより草刈りさえもおこなうことができない(表10)。かわりに、C家は2002年と2003年家畜飼料を1000kg購入している(表10)。2003年の家畜飼料購入額は約1200円で、総収入6400元の約19%を占めている。

²⁶ カシミア毛の売却による収入は4400元、ラクダ毛による収入は約2000元である。

C家は食生活や年間収入を犠牲にすることで、家畜の増加をはかっている。なぜなら、農耕をおこなわないC家は家畜の増加でしか収入を増やすことができないのである。

(6) 水資源

Cは当初移住を後悔したが、今後よくなるだろうと語っていた。C長男は生態移民政策がなくてもマーゾンシャン・ソムに移住していただろうと語る。

彼らはマーゾンシャン・ソムのどこに惹かれるのか。それは家畜を養う植生とその豊富さにある。C妻にマーゾンシャンの植生についてたずねた時である。C妻はマーゾンシャン・ソムにあるラクダが好んで食べる草を10種類ほどあげながら、以下のように語った。

「マーゾンシャンの方が草がよい。現在ゴルではラクダの飼育はむずかしい。ゴルにはオムヒー・エブス²⁷、ボヤ²⁸とタマリスクしかない。マーゾンシャンの人びとは今、草や牧地が悪くなっているというが、自分からみればウスルングイ（・ガチャ）よりずっとよい」

マーゾンシャン・ソムはその広大な面積にもかかわらず、世帯数は100にも満たない。マーゾンシャン・ソムへの居住を拒んできたのは水資源の確保である。マーゾンシャン・ソムでは井戸を掘り当てることは非常にむずかしい。たとえ、掘り当てても飲用に適さないことがほとんどである。C家も飲用に適した井戸を掘り当てることができなかった。現在、C家は家畜には飲用に適さない水深2mほどの開放井戸を使用している。C家で飲用水をバイクで2日に1回約50kg、四輪駆動車なら7日に1回約200-250kg運んでいる。

こうした水資源の制約のために、囲いも農耕もない広大な牧地と豊富な植生が残されていたのである。それは逆にかつて黒河下流域はマーゾンシャン・ソムを利用する必要がないほど自然環境に恵まれていたといえよう。一方、マーゾンシャン・ソムに移住しなければならないほど、エチナ旗における水資源をめぐる自然環境と社会環境が深刻化しているということでもある。

C家は、生態移民政策下、囲い牧地の設置や農耕を嫌って広大な牧地と豊富な植生が残されているマーゾンシャン・ソムに移住した。C家はB家のように水資源浪費型でなく、水資源節約型の牧畜経営を選択したといえよう。

4. 黒河下流域における水資源利用

4.1. 水資源利用の二極化

3章では3つに類型化したエチナ旗におけるモンゴル族牧畜民の牧畜経営について、それぞれ事例家族をあげながら論述した。ここで、事例家族の牧畜経営が水資源利用とどのように関わっているのかを考察してみよう（表15）。

²⁷ 漢語名は葡根駱駝蓬で、ハマビシ科多年生草本である。学名は *Peganum nigellastrum* である。同定は内蒙古農業大学生態環境学部周世全先生にお願いした。

²⁸ 漢語名は苦豆子で、マメ科多年生草本である。学名は *Sophora alopecuroides* である。同定は内蒙古農業大学生態環境学部周世全先生にお願いした。

A家は、季節移動と品種改良と飼料購入をおこなうヤギに特化した「ヤギ特化型」の家族である。A家は牧草栽培をおこなわない水資源節約型である（表15）。

B家は、完全定住化し、牧畜だけでなく、農耕地利用によって綿花栽培もおこなう「綿花栽培型」の家族である。B家は、経営戦略として品種改良だけでなく、水資源を大量消費する牧草栽培と綿花栽培をおこなう水資源浪費型である（表15）。

C家は、国家政策による生態移民政策下、農耕や囲い牧地の設置を嫌って広大な牧地が残されているマーンジャン・ソムに移住していった「ヤギ・ラクダ移動型」の家族である。C家はB家のように農耕地利用ではなく、遠隔地利用による水資源制約・節約型である（表15）。

水資源減少への対応は牧畜経営において農耕の有無、つまり水資源の節約型と浪費型というまったく異なる二極化が進んでいる（図9）。今後、政策と定着化によって牧草栽培や綿花栽培がさらに拡大すれば、水資源の利用はますます浪費型になっていくといえよう。

4.2. 水資源利用の自然・社会的背景

では、なぜA家、B家、C家のように、水資源の変化によって牧畜経営に差異が生じるのか。そこには各家族の家族構成、資本、投資力もあるが、自然・社会的背景がある。それは以下の3点である。

① 「ゴル」と「ゴビ」

内陸河川、黒河下流域にあるエチナ旗は緑豊かな湿地帯「ゴル」と礫沙漠「ゴビ」で自然環境がまったく異なる（図2）。農耕がおこなわれるのは「ゴル」であり、「ゴル」では、農耕が盛んにおこなわれている。一方、「ゴビ」で農耕をおこなうことは困難である。

A家の冬営地は「ゴル」に属しているが、河川流域の「ゴル」はごく限られた範囲であり、「ゴビ」が広がっている（図2）。C家が暮らすマーンジャン・ソムには「ゴビ」が広がる。B家が暮らすウスルングイ・ガチャー帯は、ムレン河の三角州に属し、緑豊かな湿地帯「ゴル」が広がっている（図2）。

この「ゴル」と「ゴビ」-水・牧地・植生-の相違が農耕開拓の有無の条件となっている。

② 農耕への抵抗

エチナ旗の調査家族の多くがいまだ農耕をおこなっていない（表2）。こうした調査家族の多くが農耕に対して以下のように語り、農耕をおこなうことに対して抵抗を感じていた²⁹。

「ずっと家畜の放牧をしてきた」

「クワを握れない」

「農耕をできない」

一方、農耕をおこなっている調査家族（表2）が暮らす地域は緑豊かな「ゴル」にある。これら地域では人民公社時代から農耕が盛んにおこなわれており、調査家族の農耕に対する抵抗感が少なかったと

²⁹ 小長谷編（2003）にモンゴル国で農耕を導入する際の牧畜民の抵抗が生き生きと語られている。

いえる。

③ 家畜の適性

政府が牧草栽培と並んで推奨しているのが、「ゴル」の囲い牧地の設置である。しかし、広大な牧地を必要とするラクダ放牧には、囲いで細分化された牧地は不適切である。あるラクダ牧畜民は、囲いの設置によって、ラクダが柵に引っかかり、ケガをすることが多いと語っていた。また、ゴビにはラクダが好む植生が多い。そのうえ、牧地荒廃が進む「ゴル」（表 13）と比較して、「ゴビ」にはその立地条件がゆえに豊富な植生が残されている。「ゴル」でラクダ放牧をおこなう牧畜民は、ラクダを放棄するか、移住するかの選択に迫られたのである。

水資源の変化への対応として牧畜経営が多様化した背景には、エチナ旗の自然・社会的背景があった。

4.3. 牧畜経営における水資源利用の差異

年間平均降水量が 50 mmにも満たないエチナ旗は中国第 2 の内陸河川黒河の下流域にある。黒河の豊富な河川水がエチナ旗に緑豊かな湿地帯を形成し、モンゴル族牧畜民はこのエチナ旗で「オアシス遊牧」をおこなってきた。

エチナ旗は過去 50 年の間に自然環境と社会環境において著しい変化を経験する。

自然環境の変動は、黒河中流域の大規模灌漑による河川流水量の減少とそれにとまなう植生悪化と牧地荒廃である（図 9）。

社会環境の変動は、1949 年中華人民共和国の成立、人民公社化、文化大革命を経て、1982 年から始まる家畜分配と牧地使用権の個人化である。これ以後、市場経済化が急激に進む。さらに 2001 年から生態環境保護を目的とした「生態移民」が実施された。こうしたなかで人口増加、農耕開拓が進んだ（図 9）。

過去 50 年間のこうした劇的ともいえる自然・社会環境の変動のなかで牧地荒廃が進み、モンゴル族牧畜民は家畜数の減少を余儀なくされ、牧畜経営を多様化させている（図 9）。

本稿では、多様化するモンゴル族牧畜民の牧畜経営を「ヤギ特化型」と「綿花栽培型」と「ヤギ・ラクダ移動型」の 3 つに類型化した（表 15）。それぞれ事例家族をあげながら、多様化する牧畜経営が自然・社会環境、水資源とどのように関わっているのかを論じた（表 15）。

「ヤギ特化型」はヤギに特化して牧畜を営む家族である。「ヤギ特化型」ではより安定した収入をめざして品種改良が普及している。移動から定着化にとまなう周回飼料準備が求められるようになっており、定着化が進む「ヤギ特化型」では牧草栽培が普及している。牧草栽培をおこなう家族に限って水資源に関して浪費型である（表 15、図 9）。

「綿花栽培型」は収入を牧畜だけでなく、綿花栽培によっても得ている家族である。綿花栽培は非常に大きな収入をもたらしてくれるが、一方で投資、多大な労働力を必要とする。綿花栽培はそれまでの生活を一変させるものである。水資源に関して浪費型である（表 15、図 9）。地下水の大量使用という水資源浪費型の牧畜経営が自然環境に今後どのようなインパクトを与えていくのかは未知数である。

「ヤギ・ラクダ移動型」は生態移民政策下、農耕や囲い牧地の設置ではなく、広大な牧地が残されているマーゾンシャン・ソムへの移住を選択した家族である。マーゾンシャン・ソムは水資源の制約にくわえ、交通の便など街とのアクセスも非常に悪い。それでもなおこれら家族がマーゾンシャン・ソムに移住していったのは水資源の制約のためにマーゾンシャン・ソムに残された広大な牧地と豊富な植生を求めてであり、農耕という水資源浪費型の生活の拒否であった（表 15, 図 9）。

水資源利用において、牧畜経営は農耕の有無、つまり水資源の節約型と浪費型というまったく異なる二極化が進んでいる（図 9）。このような水資源利用の差異が牧畜経営を多様化させているといえよう。こうした水資源利用の二極化にはエチナ旗の自然・社会的背景がある。それは「ゴル」と「ゴビ」という自然環境の相違と農耕への抵抗、農耕経験の有無と家畜の適性である。

エチナ旗では水資源の変化がモンゴル族牧畜民の生活を大きく左右してきた。現在も水資源とのかかわりがモンゴル族牧畜民の牧畜経営のあり方を規定しているといえよう（表 15, 図 9）。

5. おわりに

エチナ旗は、過去 50 年の間にかつて経験したことのない、劇的ともいえる自然環境と社会環境の変動に直面してきた。河川水の減少、大幅な人口増加と牧草栽培と綿花栽培の拡大による地下水位の低下が深刻化するなかで、「ゴル」の消滅、そして河川水・地下水そのものの消失という恒久的な水資源の枯渇が現実化するのもそう遠い将来ではないであろう。そのとき、水資源とのかかわりが決定的であるエチナ旗に暮らす人びとの生活はどうなるのか。

黒河下流域において「文明の興亡」が繰り返されてきた。過去 50 年にわたってエチナ旗に暮らす人びとが直面してきた現実、まさに「文明の興亡」である。河川水の減少、牧地荒廃、干ばつ、生態移民など、エチナ旗が直面する現実は先鋭化している。小長谷（2002）は 20 世紀における自然・社会環境の変動は「現代の居延澤」がごとき開発であり、現在エチナが直面する現状は「21 世紀の黒城化」であると指摘している。まさにエチナ旗は「文明の滅亡」の危機に直面しているのだ。

本論では、この「文明の滅亡」の危機下において、モンゴル族牧畜民が自然・社会環境の変動に翻弄されながらも、懸命に生活している様 - 適応戦略 - を描いた。しかし、牧畜民の牧畜経営は今後の政策如何によっては、水資源のさらなる浪費をまねくだけである。いやむしろ、水資源の恒久的枯渇という、エチナ旗に暮らすことさえ不可能な状況を作り出しかねない。

では、水資源の持続的利用のためにどうすればよいのか。それは、これまでエチナ旗において水資源の持続的利用をおこなってきたモンゴル族牧畜民の民俗知 - 植生・牧地利用 - に根ざした政策の実施である。

こうした政策提言には、以下をテーマにした調査研究が不可欠である。

- ・ 自然・社会環境の変動
- ・ モンゴル族牧畜民の民俗知
- ・ 生態移民政策の実態と問題点

これらを明らかにするために、下記のフィールド調査をおこなう。

ライフヒストリー調査によって、エチナ旗の過去 50 年の自然・社会環境の変動とモンゴル族牧畜民

の民俗知を明らかにする。

ライフヒストリー調査をふまえた上で、エチナ旗が直面する問題が最も先鋭化しているガショーンノール湖に暮らす牧畜民を対象に長期住み込み調査をおこない、ガショーンノール湖の過去 50 年の変容とモンゴル族牧畜民の対応を明らかにする。

「移民村」に暮らすモンゴル族牧畜民を対象に聞きとり調査をおこない、生態移民政策の実態と問題点を明らかにする。ガショーンノール湖で調査を予定している牧畜民家族は「移民村」移住予定家族でもある。「移民村」への移住をめぐる揺れ動くモンゴル族牧畜民の生活から生態移民政策を再検討する。

こうした調査研究によって、民俗知に根ざした水資源の持続的利用と牧地保全の政策提言が可能となるであろう。

引用文献

- 阿拉善盟計画委員会主編 1991『阿拉善盟国土資源』内蒙古人民出版社
- 額濟納旗誌編輯委員会 1998『額濟納旗誌』方志出版社
- 児玉香菜子 2000「現代都市モンゴル族の文化変容と社会経済的動態」『沙漠研究』10-4：287-300
- 2003「中国社会主义市場経済下におけるモンゴル族牧畜民の社会経済的動態」『沙漠研究』13-1:69-80
- 小長谷有紀 2001「定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営」佐々木伸彰編『現代中国の民族と経済』185-207 世界思想社
- 2002「中国内蒙古自治区阿拉善盟エチナ旗における自然資源の利用」2-7
http://www.minpaku.ac.jp/staff/oasys_project.pdf (2003年6月1日参照)
- 2003「語るすべなきことごとを - 中国内蒙古アラシャ盟エチナ旗に生きた女性たち」『オアシス地域研究会報』3-1:95-106 総合地球環境学研究所
- 小長谷有紀編 2003『国立民族学博物館調査報告 41 モンゴル国における 20 世紀』国立民族学博物館
- 劉題心主編 徳岡正三訳 2002『中国沙漠・沙地植物図鑑木本編』東方書店
- 松本聰 2002「脱硫石膏による世界初のアルカリ土壌改良と安定食糧生産の実践」『アジアの経済発展と環境保全』第3巻 1-15 慶応義塾大学出版会
- 『内蒙古植物誌』編輯委員会 1990『内蒙古植物誌』第2版 第2巻 内蒙古人民出版社
- 1998『内蒙古植物誌』第2版 第1巻 内蒙古人民出版社
- 竹内望 2002「黒河流域の動物と植物について」『オアシス地域研究会報』2-2:163-172 総合地球環境学研究所
- 温都蘇 1989『蒙俄拉漢植物名称』内蒙古人民出版社
- 楊炳祿 2002『額濟納河』阿拉善盟黒河工程建設管理局・額濟納旗水務局

図表一覧

図

- 図 1 黒河流域地図
- 図 2 黒河下流域エチナ旗 - 「ゴル」と「ゴビ」
- 図 3 黒河水文測定所年間流水量
- 図 4 A家の親族図
- 図 5 A家の1年の暮らし
- 図 6 B家の親族図
- 図 7 B家の1年の暮らし
- 図 8 C家の親族図
- 図 9 牧畜経営における水資源利用の差異

表

- 表 1 1980年代以降の黒河流域オアシスと牧地荒廃面積の変化
- 表 2 調査家族一覧
- 表 3 家畜数の変化
- 表 4 家畜数減少の理由
- 表 5 収入順からみた調査家族
- 表 6 ヤギ特化型
- 表 7 綿花栽培型
- 表 8 ヤギ・ラクダ移動型
- 表 9 所有家畜数の内訳
- 表 10 事例家族の越冬・春用準備飼料 2003年
- 表 11 井戸 ヤギ特化型A家
- 表 12 水の使用量 ヤギ特化型A家
- 表 13 水資源の変化
- 表 14 水の使用量 綿花栽培型B家
- 表 15 事例家族の牧畜経営における水資源利用

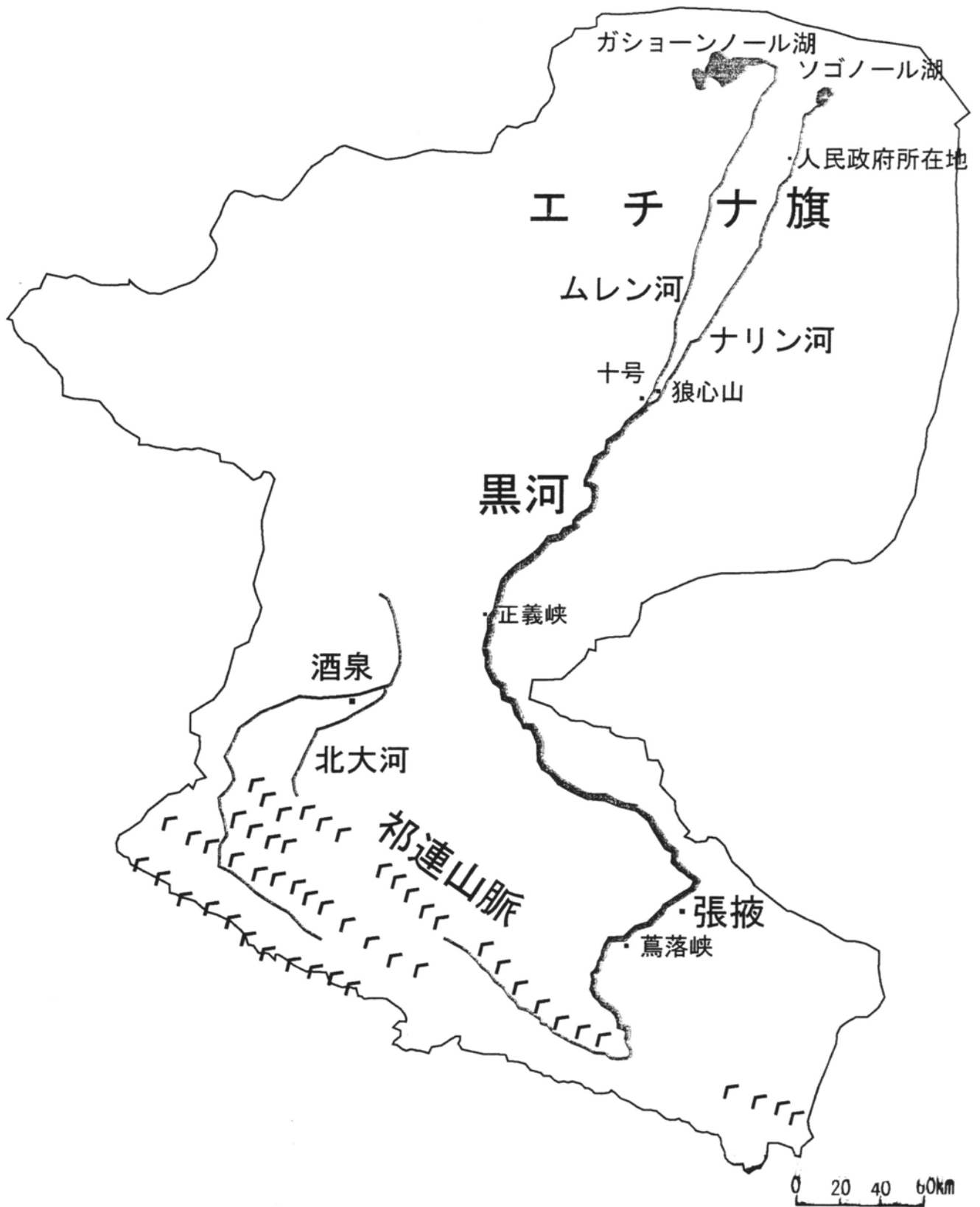


図1 黒河流域地図

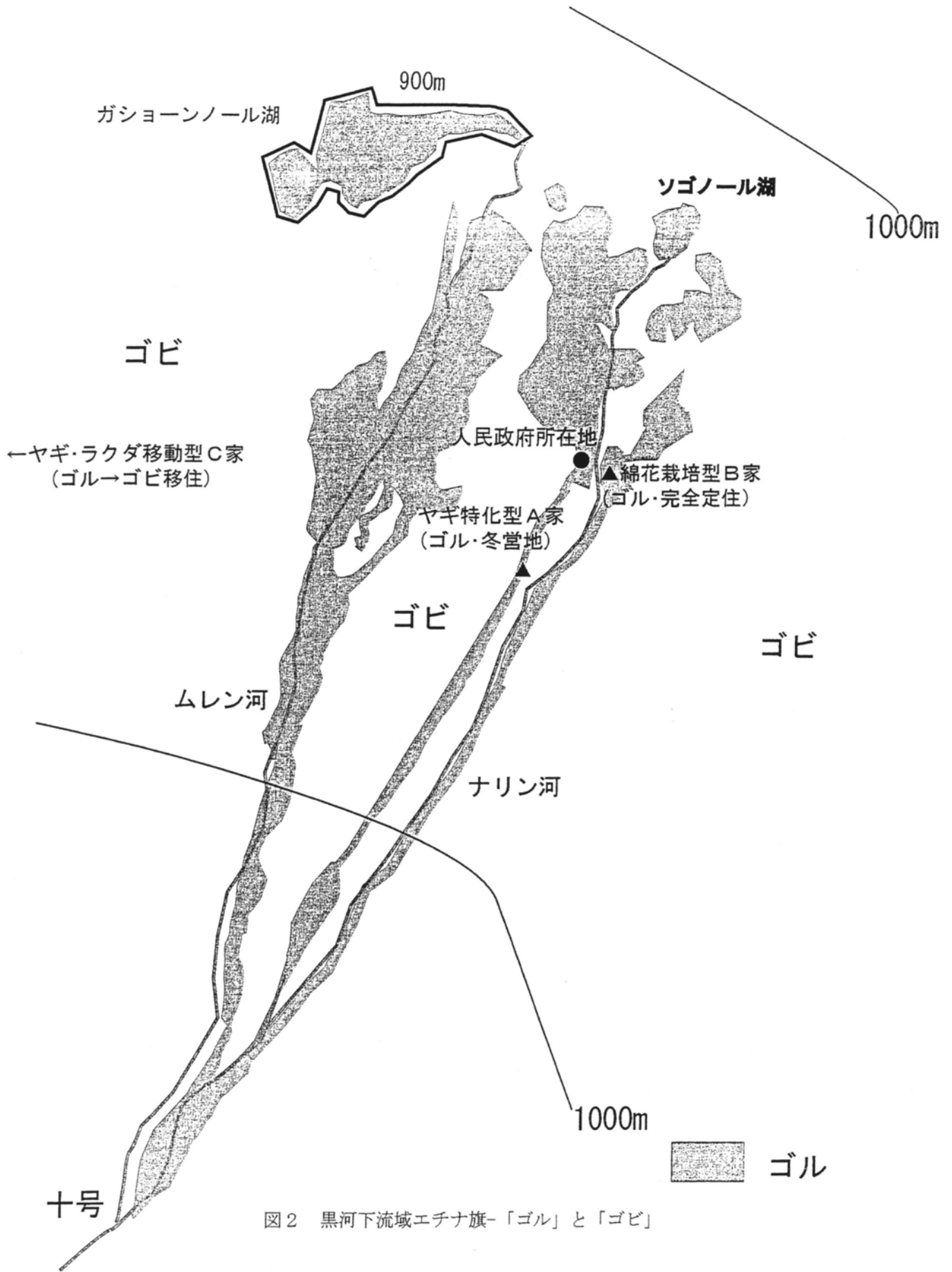


図2 黒河下流域エチナ旗-「ゴル」と「ゴビ」

『黒河流域水景視図』1998より作成

*この地図で「緑州農田 (Oasis Farmland)」と「林地 (Forest Land)」とされている地域をゴルとした。

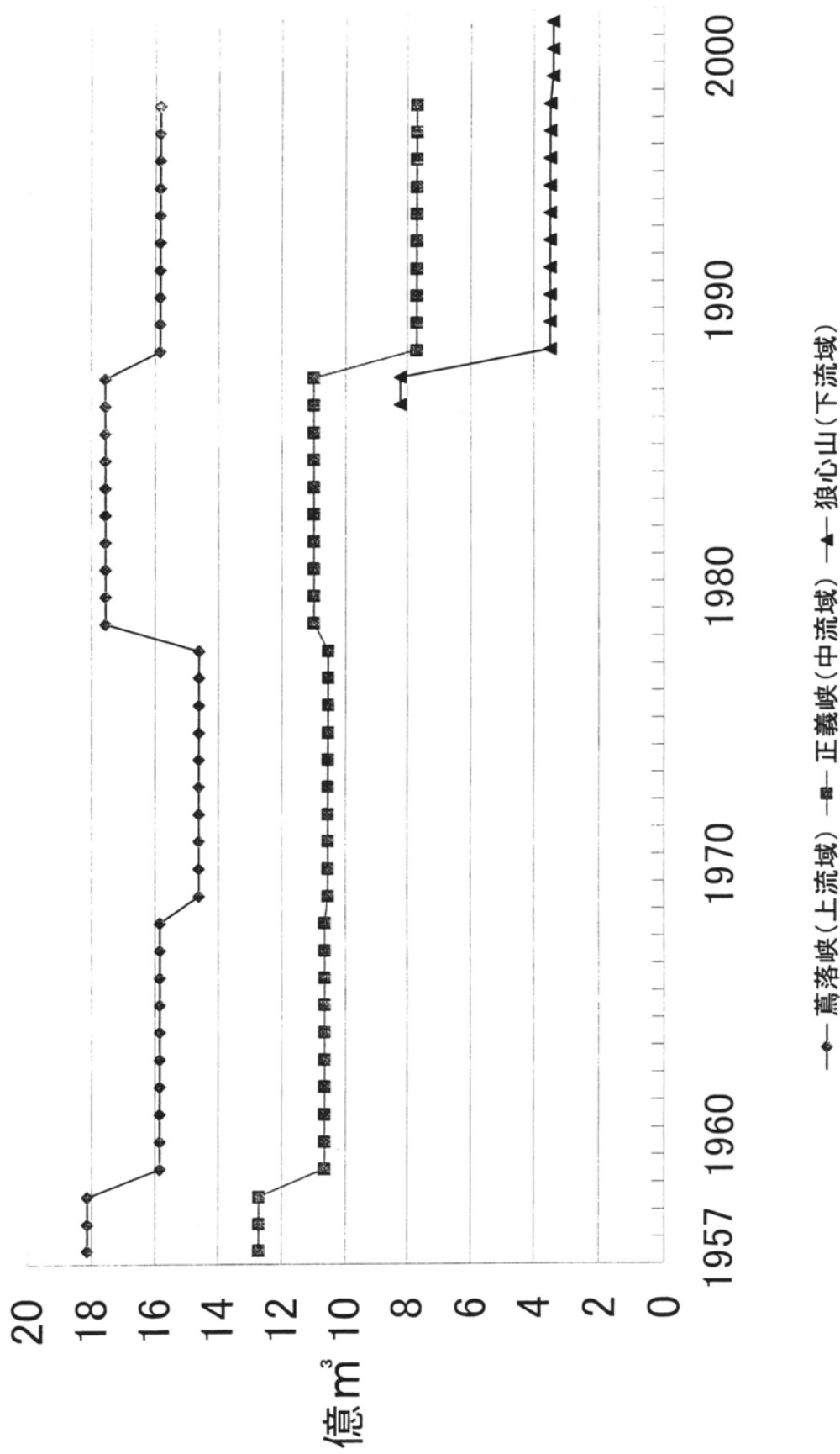


図3 黒河水文測定所年間流水量 (楊 2002:53-54 よりそれぞれの10年間の平均値を算出して作成)

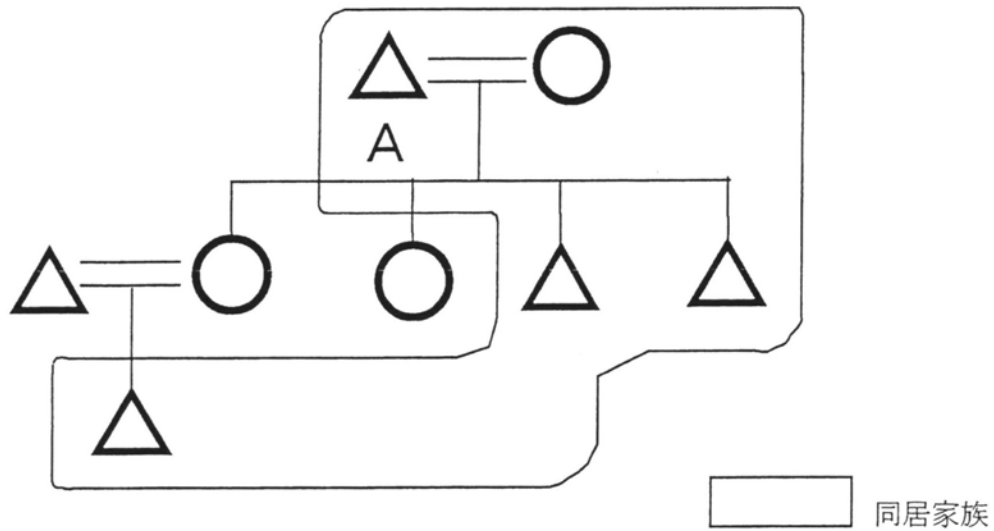


図4 A家の親族図

	例年	2003年	牧畜作業
1月	冬営地	冬営地 ↓ 8月23日	ヤギ出産
2月	↓		薪集め・囲いの修理 ヤギ放牧
3月	春営地		
4月	↓		カシミア毛梳き(10日～)
5月	↓		
6月	夏営地	夏営地 6月23日	ヤギ搾乳 ラクダの見張り
7月	↓	↓ 8月23日	↓ ↓
8月		秋営地 8月23日→9月1日	草刈り
9月	↓	冬営地 9月1日	↓
10月	秋営地	↓	
11月	冬営地	↓	ラクダを集める ↓
12月	↓	↓	ヤギ・ラクダ放牧

図5 A家の1年の暮らし

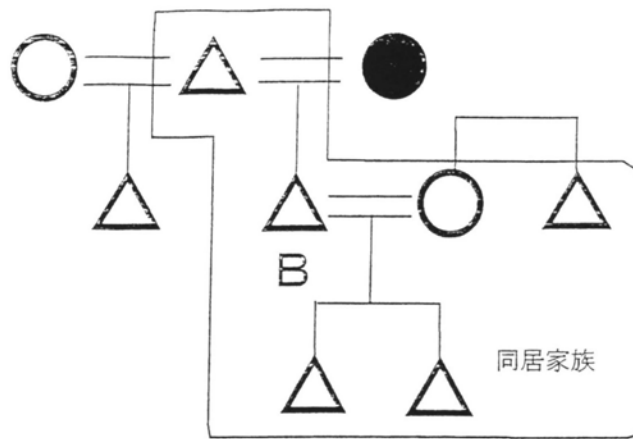


図6 B家の親族図

	牧畜作業	農業作業
1月	家畜出産 放牧	
2月	↓ ↓	
3月	↓ ↓	
4月	カシミア毛梳き (10日~)	土おこし 種蒔き 灌漑
5月	↓ ラクダ毛刈り	雑草取り ↓
6月	小型家畜放牧	↓ ↓
7月	↓ ↓	↓ ↓
8月	草刈り ↓	↓ ↓
9月		綿花摘み ↓
10月		↓ ↓
11月		地ならし ↓
12月	放牧	

図7 B家の1年の暮らし

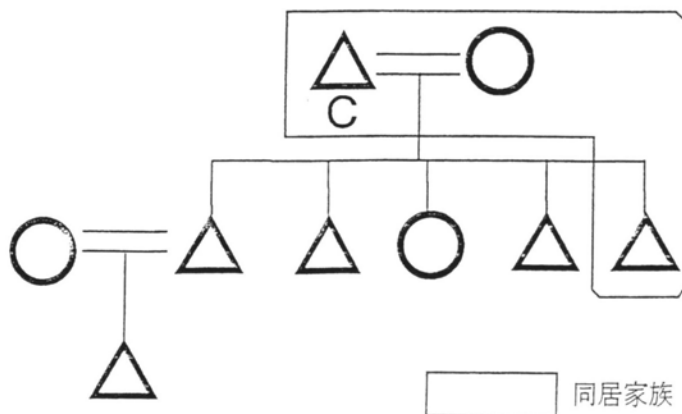


図8 C家の親族図

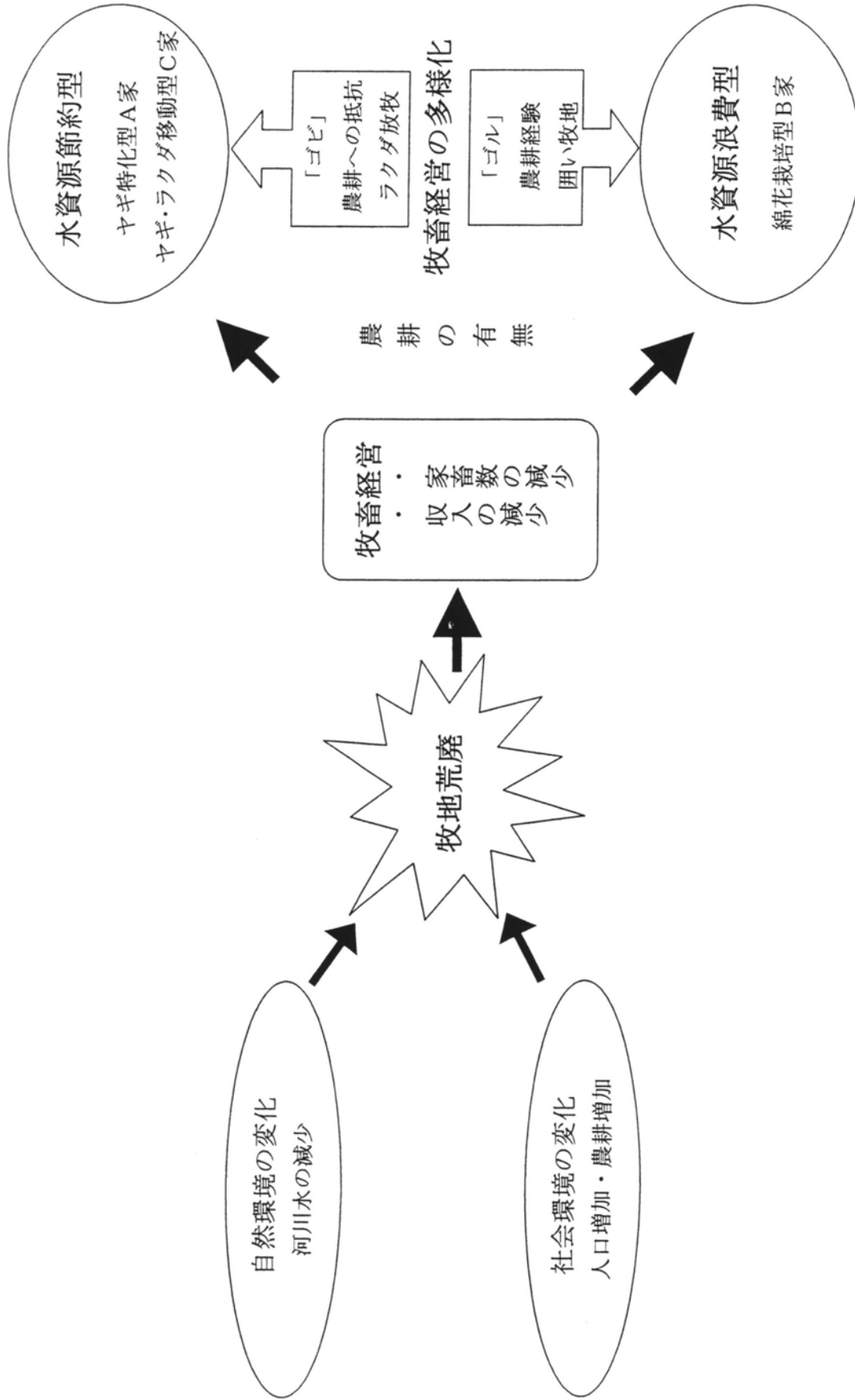


図9 牧畜経営における水資源利用の差異

表 1 1980 年代以降の黒河流域オアシスと牧地荒廃面積の変化 単位：6 m²

地区	土地類型		1980 年代中期	現代水準	変化率(%)
中流域	オアシス*1	耕地	46.09	55.71	+20.87
		林地	2.36	1.18	
		合計	48.45	56.89	+17.42
		総面積に占める割合(%)	11.23	13.19	+1.96
	牧地荒廃	面積	81.21	81.37	+0.21
		総面積に占める割合(%)	18.83	18.37	+0.04
下流域	オアシス	面積	36.55	33.28	-8.95
		総面積に占める割合(%)	5.17	4.71	-0.46
	牧地荒廃	面積	258.34	340.38	+31.75
		総面積に占める割合(%)	36.53	48.13	+11.58

* 1 : 原本は「緑州」である。

(楊 2002:10 より作成)

表2 調査家族一覧

No.	行政区分	ガチャ	年齢 (年齢層)	所有家畜数(2003年現在)*1				品種改良	牧草栽培 (畝)*2	綿花栽培 (畝)	移動 *3	総収入*4 2002年	収入内訳
				ヒツジ	ヤギ	ラクダ	ウシ						
1	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	60	50余	240	0	4	1	2	×	15,000	牧畜・観光	
2	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	50	40	160	4	0	0	4	×	20,000	牧畜・綿花	
3	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	50	0	40	0	0	0	0	×	2,000	牧畜	
4	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	50	23	223	30	0	0	2	×	32,000	牧畜・草刈り機・給与	
5	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	40	60余	190	0	0	0	2	○	32,000	牧畜・農地賃貸・観光・家畜売買	
6	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	30	0	100余	0	0	0	1	×	12,000	牧畜	
7	ダライアブ鎮	オランゲレル	60	5,6	63	24	0	0	1	×	6,300	牧畜	
8	ダライアブ鎮	オランゲレル	40	0	200余	26	0	0	0	○	22,100	牧畜	
9	ダライアブ鎮	オランゲレル	30	20	150	70	0	0	2	○	13,800	牧畜	
10	ゾゴノール・ソム	ヤボート	50	30余	120余	0	0	0	1	×	2,900	牧畜・農地賃貸	
11	ゾゴノール・ソム	ヤボート	50	30	180	8	0	0	3,4	○	8,800	牧畜・観光	
12	ゾゴノール・ソム	ヤボート	30	40-50	200余	0	0	0	?	○	11,000	牧畜・草刈り機・家畜売買	
13	ゾゴノール・ソム	バインボラダ	60	50	50	30	3	0	2	○	10,000	牧畜	
14	サイハントーレー・ソム	モンクト	70	4	170	0	0	0	3	○	7,000	牧畜	
15	サイハントーレー・ソム	モンクト	60	24	100余	0	0	0	1	○	6,000	牧畜	
16	サイハントーレー・ソム	モンクト	60	40-50	220余	4,5	0	0	?	○	22,000	牧畜	
17	サイハントーレー・ソム	モンクト	20	55	400余	0	8	0	2	○	50,000	牧畜	
18	サイハントーレー・ソム	サイハントーレー	40	10	200	0	0	0	4	○	31,500	牧畜・給与	
19	サイハントーレー・ソム	バインダラ	50	20余	80余	80余	0	0	2	○	17,450	牧畜	
20	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	70	40余	200余	0	0	0	3	×	9,500	牧畜	
21	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60	0	200余	0	0	0	0	○	15,000	牧畜	
22	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60	6	400	0	0	0	3	○	26,500	牧畜	
23	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	70	70	220余	60余	0	0	5,6	×	9,800	牧畜	
24	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	50	32	270	50-60	0	0	?	○	20,000	牧畜	
25	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	30	10余	180余	0	0	0	3	×	12,650	牧畜	
26	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60(漢)	14-15	270	0	0	0	?	○	32,000	牧畜・綿花	
27	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60(漢)	0	200余	0	0	0	1	×	28,750	牧畜・綿花	
28	バヤンボクト・ソム	チャガーンノール	60	30余	200余	0	0	1	5,6	×	6,000	牧畜	
29	バヤンボクト・ソム	チャガーンノール	60(漢)	60	300	20	2	0	?	○	27,000	牧畜・綿花	
30	マーゾンシヤン・ソム	オラーンオーラ	60	0	100余	30余	0	0	?	×	6,400	牧畜	
31	マーゾンシヤン・ソム	オラーンオーラ	50	0	180	10	0	0	?	○	18,650	牧畜	
32	マーゾンシヤン・ソム	オラーンオーラ	40	0	100余	60余	0	0	?	○	14,000	牧畜	
33	マーゾンシヤン・ソム	オラーンオーラ	40	0	140	30余	0	0	?	○	15,300	牧畜	
34	マーゾンシヤン・ソム	オラーンオーラ	30	0	130	20	0	0	?	△	13,000	牧畜	
全調査家族平均*6				23	182	16	0	0	2	5.7	7.8	16,953	

*1: 牧畜民は家畜数の正確な数字を提示することを忌避する。家畜数は正確な数字とは限らない。所有家畜数には当歳子畜も含む。
 *2: 牧草栽培には家畜飼料栽培と植林も含む。 *3: ○遊牧、△牧地内季節移動、×完全定住 *4: 聞きとりと筆者の算出による。
 *5: 農地賃貸である。 *6: 家畜数がいまいちな場合は切捨てて算出した。幅がある場合は中間値をとった。小数点は四捨五入した。
 (漢): 漢族家族。他の調査家族はみなモンゴル族家族である。

表3 家畜数の変化

家畜数の変化	家族数
増加	3
減少	21
(内：半分以下に減少)	(10)

表4 家畜数減少の理由

「河の水が来ない」

「雨が降らない」

「牧地が悪くなった」

「生態移民政策や胡楊林保護政策のために家畜を減らした」

表5 収入順からみた調査家族

No.	行政区分	ガチャ	年齢 (年齢層)	所有家畜数(2003年現在)*1						品種改良	牧草栽培 (畝)*2	綿花栽培 (畝)	移動 *3	総収入*4 2002年	収入内訳
				ヒツジ	ヤギ	ラクダ	ウシ	ウマ	ロバ						
3	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	50	0	40	0	0	0	0	0	0	×	2,000	牧畜	
10	ソゴノール・ソム	ヤボート	50	30余	120余	0	0	0	0	1	×	×	2,900	牧畜・農地賃貸	
15	サイハントーレー・ソム	モンクト	60	24	100余	0	0	0	0	1	○	×	6,000	牧畜	
28	ハヤンボクト・ソム	チャガンノール	60	30余	200余	0	0	0	1	5,6	×	×	6,000	牧畜	
7	ダライアブ鎮	オランゲレル	60	5,6	63	24	0	0	0	1	×	○	6,300	牧畜	
30	マーゾンシヤン・ソム	オランオーラ	60	0	100余	30余	0	0	0	?	×	×	6,400	牧畜	
14	サイハントーレー・ソム	モンクト	70	4	170	0	0	0	0	3	○	△	7,000	牧畜	
11	ソゴノール・ソム	ヤボート	50	30	180	8	0	0	0	3,4	○	○	8,800	牧畜・観光	
20	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	70	40余	200余	0	0	0	0	3	×	○	9,500	牧畜	
23	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	70	70	220余	60余	0	0	0	5,6	×	○	9,800	牧畜	
13	ソゴノール・ソム	ハインボラダ	60	50	50	30	3	0	0	2	○	○	10,000	牧畜	
12	ソゴノール・ソム	ヤボート	30	40-50	200余	0	0	0	0	?	○	×	11,000	牧畜・草刈り機・家畜売買	
6	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	30	0	100余	0	0	0	0	1	×	×	12,000	牧畜	
25	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	30	10余	180余	0	0	0	0	3	×	×	12,650	牧畜	
34	マーゾンシヤン・ソム	オランオーラ	30	0	130	20	0	0	0	?	○	△	13,000	牧畜	
9	ダライアブ鎮	オランゲレル	30	20	150	70	0	0	0	?	○	○	13,800	牧畜	
32	マーゾンシヤン・ソム	オランオーラ	40	0	100余	60余	0	0	0	?	×	○	14,000	牧畜	
1	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	60	50余	240	0	4	1	2	2	×	×	15,000	牧畜・観光	
21	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60	0	200余	0	0	0	0	0	○	○	15,000	牧畜	
33	マーゾンシヤン・ソム	オランオーラ	40	0	140	30余	0	0	0	?	○	×	15,300	牧畜	
19	サイハントーレー・ソム	ハインタラ	50	20余	80余	80余	0	0	0	2	○	×	17,450	牧畜	
31	マーゾンシヤン・ソム	オランオーラ	50	0	180	10	0	0	0	?	○	○	18,650	牧畜	
2	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	50	40	160	4	0	0	0	4	○	×	20,000	牧畜・綿花	
24	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	50	32	270	50-60	0	0	0	?	○	○	20,000	牧畜	
16	サイハントーレー・ソム	モンクト	60	40-50	220余	4,5	0	0	0	?	○	○	22,000	牧畜	
8	ダライアブ鎮	オランゲレル	40	6	400	26	0	0	0	0	○	△	22,100	牧畜	
22	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60	6	300	0	0	0	0	3	○	△	26,500	牧畜	
29	ハヤンボクト・ソム	チャガンノール	60(漢)	60	300	20	2	0	0	?	○	×	27,000	牧畜・綿花	
27	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60(漢)	0	200余	0	0	0	0	1	×	△	28,750	牧畜・綿花	
18	サイハントーレー・ソム	サイハントーレー	40	10	200	0	0	0	0	4	○	×	31,500	牧畜・給与	
4	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	50	23	223	30	0	0	0	2	○	×	32,000	牧畜・草刈り機・給与	
5	ダライアブ鎮	ウスルンガイ	40	60余	190	0	0	0	0	2	○	○	32,000	牧畜・農地賃貸・観光・家畜売買	
26	ハヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60(漢)	14-15	270	0	0	0	0	?	○	×	32,000	牧畜・綿花	
17	サイハントーレー・ソム	モンクト	20	55	400余	0	8	0	0	2	○	△	50,000	牧畜	
				23	182	16	0	0	0	2			16,953		
				平均*6											

*1: 牧畜民は家畜数の正確な数字を提示することを忌避する。家畜数は正確な数字とは限らない。所有家畜数には当歳子畜も含む。
 *2: 牧草栽培には家畜飼料栽培と植林も含む。
 *3: ○遊牧、△牧地内季節移動、×完全定住
 *4: 聞きとりと筆者の算出による。
 *5: 農地賃貸である。
 *6: 家畜数がいまいちな場合は切り捨てた。幅がある場合は中間値をとった。小数点以下は四捨五入した。
 (漢): 漢族家族。他の調査家族はみなモンゴル族家族である。

表6 ヤギ特化型

No.	行政区分	ガチャ	年齢 (年齢層)	所有家畜数(2003年現在)*1					品種改良	牧草栽培 (畝)	綿花栽培 (畝)*2	移動 *3	総収入*4 2002年	収入内訳
				ヒツジ	ヤギ	ラクダ	ウシ	ウマ						
1	ダライフブ鎮	ウスルンガイ	60	50余	240	0	4	1	2	×	8	0	15,000	牧畜・観光
3	ダライフブ鎮	ウスルンガイ	50	0	40	0	0	0	0	×	0	0	2,000	牧畜
7	ダライフブ鎮	オランゲレル	60	5,6	63	24	0	0	1	×	0	0	6,300	牧畜
8	ダライフブ鎮	オランゲレル	40	0	245	26	0	0	0	○	0	0	22,100	牧畜
9	ダライフブ鎮	オランゲレル	30	20	150	70	0	0	2	○	0	0	13,800	牧畜
10	ソゴノール・ソム	ヤボート	50	30余	120余	0	0	0	1	×	5	0	2,900	牧畜・農地賃貸
11	ソゴノール・ソム	ヤボート	50	30	180	8	0	0	3,4	○	4	0	8,800	牧畜・観光
13	ソゴノール・ソム	バインボラダ	60	50	50	30	3	0	2	○	5	0	10,000	牧畜
14	サイハントレー・ソム	モンダト	70	4	170	0	0	0	3	○	5	0	7,000	牧畜
15	サイハントレー・ソム	モンダト	60	24	100余	0	0	0	1	○	0	0	6,000	牧畜
16	サイハントレー・ソム	モンダト	60	40-50	220余	4,5	0	0	?	○	20	0	22,000	牧畜
17	サイハントレー・ソム	モンダト	20	55	417	0	8	0	2	○	59	0	50,000	牧畜
18	サイハントレー・ソム	サイハントレー	40	10	200	0	0	0	4	○	0	0	31,500	牧畜・給与所得
19	サイハントレー・ソム	バインタラ	50	20余	80余	80余	0	0	2	○	5	0	17,450	牧畜
20	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	70	40余	200余	0	0	0	3	×	0	0	9,500	牧畜
21	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60	0	200余	0	0	0	0	○	0	0	15,000	牧畜
22	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60	6	400	0	0	0	3	○	0	0	26,500	牧畜
23	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	70	70	220余	60余	0	0	5,6	×	0	0	9,800	牧畜
24	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	50	32	270	50-60	0	0	?	○	0	0	20,000	牧畜
25	バヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	30	10余	180余	0	0	0	3	×	0	0	12,650	牧畜
28	バヤンボクト・ソム	チャガーンノール	60	30余	200余	0	0	1	5,6	×	0	0	6,000	牧畜
ヤギ特化型平均*5				25	188	17	0	0	2		5.3	0	14,967	
全調査家族平均				23	182	16	0	0	2		5.7	7.8	16,593	

*1: 牧畜民は家畜数の正確な数字を提示することを忌避する。家畜数は正確な数字とは限らない。所有家畜数には当歳子畜も含む。

*2: 牧草栽培には家畜飼料栽培と植林も含む。

*3: ○遊牧、△牧地内季節移動、×完全定住

*4: 聞きとりと筆者の算出による。

*5: 家畜数がいまいちな場合は切り捨て算出した。幅がある場合は中間値をとった。小数点は四捨五入した。

表7 綿花栽培型

No.	行政区分	ガチャ	年齢 (年齢層)	所有家畜数(2003年現在)*1					品種改良	牧草栽培 (畝)*2	綿花栽培 (畝)	移動 *3	総収入*4 2002年	収入内訳	
				ヒツジ	ヤギ	ラクダ	ウシ	ウマ							ロバ
2	ダラフブ鎮	ウスルングイ	50	40	160	3	0	0	4	1	20	×	20,000	牧畜・綿花	
4	ダラフブ鎮	ウスルングイ	50	23	223	30	0	0	2	5	18	×	32,000	牧畜・草刈り機・給与	
5	ダラフブ鎮	ウスルングイ	40	60余	190	0	0	0	2	21	150*5	○	32,000	牧畜・農地賃貸*・観光・家畜売買	
6	ダラフブ鎮	ウスルングイ	30	0	100余	0	0	0	1	5	15	×	12,000	牧畜	
12	ソゴノール・ソム	ヤポート	30	40-50	200余	0	0	0	?	13	15	×	11,000	牧畜・草刈り機・家畜売買	
26	パヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60(漢)	14-15	270	0	0	0	?	35	25	×	32,000	牧畜・綿花	
27	パヤンボクト・ソム	エヒンチャガーン	60(漢)	0	200余	0	0	0	1	0	10	×	28,750	牧畜・綿花	
29	パヤンボクト・ソム	チャガーンノール	60(漢)	60	300	20	2	0	?	3	13	×	27,000	牧畜・綿花	
綿花栽培型平均*6				30	205	6	0	0	1	10	33			24,344	
全調査家族平均				23	182	16	0	0	2	5.7	7.8			16,593	

*1: 牧畜民は家畜数の正確な数字を提示することを忌避する。家畜数は正確な数字とは限らない。所有家畜数には当歳子畜も含む。

*2: 牧草栽培には家畜飼料栽培と植林も含む。

*3: ○遊牧、△牧地内季節移動、×完全定住

*4: 聞きとりと筆者の算出による。

*5: 農地賃貸である。

*6: 家畜数があいまいな場合は切り捨てた。幅がある場合は中間値をとった。小数点以下は四捨五入した。

(漢): 漢族家族。他の調査家族はみなモンゴル族家族である。

表8 ヤギ・ラクダ移動型

No.	行政区分	ガチャ	年齢 (年齢層)	所有家畜数(2003年現在)*1					品種改良	牧草栽培 (畝)*2	綿花栽培 (畝)	移動 *3	総収入*4 2002年	収入内訳	
				ヒツジ	ヤギ	ラクダ	ウシ	ウマ							ロバ
30	マーゾンシヤン	オラーンオーラ	60	0	180余	30余	0	0	?	×	0	×	6,400	牧畜	
31	マーゾンシヤン	オラーンオーラ	50	0	180	10	0	0	?	×	0	○	18,650	牧畜	
32	マーゾンシヤン	オラーンオーラ	40	0	100余	60余	0	0	?	×	0	○	14,000	牧畜	
33	マーゾンシヤン	オラーンオーラ	40	0	140	30余	0	0	?	○	0	×	15,300	牧畜	
34	マーゾンシヤン	オラーンオーラ	30	0	130	20	0	0	?	○	0	△	13,000	牧畜	
ヤギ・ラクダ移動型平均*5				0	130	30	0	0	?		0			13,470	
全調査家族平均				23	182	16	0	0	2		5.7	7.8		16,593	

*1: 牧畜民は家畜数の正確な数字を提示することを忌避する。家畜数は正確な数字とは限らない。所有家畜数には仔畜も含む。

*2: 牧草栽培には家畜飼料栽培と植林も含む。

*3: 聞きとりと筆者の算出による。

*4: ○遊牧、△牧地内季節移動、×完全定住

*5: 家畜数があいまいな場合は切捨てて算出した。幅がある場合は中間値をとった。小数点は四捨五入した。

表9 所有家畜数の内訳

	ヤギ						ヒツジ						ラクダ						
	合計	成メス	当歳子	去勢オス	2歳	種オス	合計	成メス	当歳子	去勢オス	2歳	種オス	合計	成メス	当歳子	2歳	3歳	去勢オス	種オス
		*1	*2	*3	*4	*5								*6			*7	*8	
A	245	120	23	60	40	2	0	0	0	0	0	0	26	11	3	1	4	7	0
B	223	60	42	65	53	3	27	7	11	1	1	30	8	4	4	5	8	1	1
C	100余	50余	20余	20-30	0	0	0	0	0	0	0	30余	10余	7	1	5	8	0	0

- * 1 : 成メスヤギは牧畜民が妊娠可能と認識する3歳以上のメスをさす。ヒツジも同様である。
- * 2 : 当歳子ヤギはメス・オスを問わず2003年に生まれた子畜をさす。ヒツジとラクダも同様である。
- * 3 : 去勢オスヤギは去勢が施術された3歳以上の成オスをさす。ヒツジも同様である。
- * 4 : 2歳ヤギはオス・メスを問わず2002年に生まれたヤギをさす。ヒツジとラクダも同様である。
- * 5 : 種オスヤギは去勢が施術されていない繁殖目的用のオスをさす。ヒツジとラクダも同様である。
- * 6 : 成メスラクダは牧畜民が妊娠可能と認識する4歳以上の成メスをさす。
- * 7 : 3歳ラクダはオス・メスを問わず2001年に生まれた子畜をさす。ラクダは4歳から成畜と認識される。
- * 8 : 去勢オスラクダは去勢を施術された4歳以上の成オスをさす。

表 10 事例家族の越冬・春用準備飼料 2003 年

	移動*1	購入 (2002 年) トウモロコシ実	草刈り 干草	自家栽培 (トウモロコシ)	
				実	干草
A家	○	500 kg	トラクター 4 台	-	-
B家	×	1,500 kg	1,500 kg	350 kg	1,000 kg * 2
C家	×	1,000 kg	-	-	-

* 1 : ○遊牧、×完全定住

* 2 : B家は、干草用に他アワ(小米)0.5 畝、苜蓿 2 余畝を自家栽培している。ほかににんじん 1 畝を栽培し、半分を売却し、残りを自家消費している。

表 11 井戸 ヤギ特化型 A 家

居住地	種類	水深	設置年	用途	水質	備考
冬當地	開放	4m	1997 年	-		飲んでいたが、汚いと思い飲んでいない。
	ポンプ	7m	1997 年	飲用・家畜	よい	
春當地	開放	4m	1990 年	家畜	悪い	1997 年から水質が悪くなる。 人が飲むと下痢をする。
夏當地	開放	3m	1986 年	-	枯渇	水が減っていき、2001 年になくなる。 河の水がこなくなったので。
	ポンプ	11m	1990 年	飲用・家畜	よい	
秋當地	開放	5m	1980 年代	家畜	悪い	人が飲むと下痢をする。
	ポンプ	7m	2002 年	飲用・家畜	よい	

表 12 水の使用量 ヤギ特化型 A 家

	家畜	ひと		灌漑
		食事	家事	
夏	ほとんどなし*1	50-90 kg*2	たくさん*3	-
冬	1 回/日	10-20 kg	たくさん	-

* 1 : 夏當地には泉があり、家畜は泉の水を飲むため、井戸水を飲むことはほとんどない。

ここ数年枯れていたが、2003 年ラマに経を読んでもらってからまた水が出るようになった。

* 2 : バケツ数で答えたため、1 バケツを 10-15 kg で換算した。

* 3 : お金が要らないのでたくさん使う。

表 13 水資源の変化

【過去の様子】

- ・ 1950年代は人も家畜も少なく、畑作もなく、ウシが見えないほどのホロスが繁茂していた（B）。
- ・ 雨が多かった（B）。

【水資源の変化】

- ・ 水がこない。雨がこない。乾燥化。河の水がこない。2002年は7月、2003年は8月に（河の）水が来た。小さい木は枯れた。夏に来る水は泥が多い（G）。
- ・ 昔はよかった。今は困難になった。仕事が多くなった（G）。

【水資源減少の影響】

- ・ 草が悪くなっている（T）。
- ・ 砂嵐がひどくなっている。6,7月もでている（T）。
- ・ 砂が北京まで飛んだそう（T）。
- ・ 胡楊の根が出て、死んでしまう（T）。
- ・ 井戸の水位が下がっている。3,4月に水深4,5mだったのが、9月には6mに下がっている（T）。
- ・ 家畜の体格が小さくなっている。犬みたいに小さくなっている（T）。
- ・ ラクダも小さくなり、肥えなくなった（T）。

【牧地荒廃の原因】

- ・ 湖も枯れ、湿気（水）がなくなって、雨が降らなくなった（B）。
- ・ 水がこなくなったので湖が枯れた（B）。
- ・ これまで甘肅省が（エチナを）管理していた。いつも水があり、草がよく茂っていた。管轄が内モンゴルになってから水がこなくなった（B）。
- ・ 水がこない（T）。

* B、G、Tは皆ウスルングイ・ガチャに居住する牧畜民である。

表 14 水の使用量 綿花栽培型B家

	家畜		ひと		灌漑	
			食事	家事	河川	深井戸
夏	10回/日	10余水槽*1/日	35 kg	30-60 kg	1回/年	5-6回/年
冬	2回/日	5水槽/日	30 kg	30-60 kg		

* 1:「水槽」はモンゴル語による表現である。井戸からくみ出した水を入れる容器をさす。

表 15 事例家族の牧畜経営における水資源利用

事例家族	A家	B家	C家
牧畜経営	ヤギ特化型	綿花栽培型	ラクダ・ヤギ移動型
自然利用	牧畜	農耕地利用	遠隔地利用
経営戦略	季節移動 品種改良 飼料購入 - - -	- 品種改良 飼料購入 インフラ投資(囲い・深井戸) 牧草栽培 綿花栽培	移住 - 飼料購入 - -
水資源	節約	浪費	制約・節約

黒河上流域の人と自然 —青海省チレン県・甘肅省肅南県での調査報告— シンジルト（一橋大学）

キーワード：歴史変動、集団移住、文化変容、社会文化、自然環境

はじめに

今回の現地調査（2004年1月19日－3月14日）は黒河流域住民の自然認識を整理、分析するために行われた1回目の調査であった。調査対象地域は黒河上流域にあたる青海省海北チベット族自治州（以下海北州）チレン（祁連）県のアレゲ（阿柔）郷草大坂牧民委員会（以下「牧委会」。「村」に相当）と野牛沟郷大泉牧委会、甘肅省肅南ヨゴル（裕固）族自治州（以下肅南県）康楽区のヤング（楊哥）郷スダロン（寺大隆）村とバヤン（白銀）モンゴル族郷の中心地などであった。これらの地域の住民は主にチベット族、モンゴル族そしてヨゴル族であり、イスラム教を信仰し国家の民族区分で回族とされる牧畜民のトゥモ（托茂）人以外ほとんどがチベット仏教を信仰している。

調査項目は、オーラル・ヒストリー（解放〔1940年代末中共政権樹立〕前後のさまざまな歴史変動に伴う集団移住など事柄が地域社会にいかなる経済的文化的な変化をもたらしたかに関する地域住民の語り）、ローカル・カルチャー（地域社会に伝わる自然と人間の関係をめぐる伝説・タブー、日常生活にみられる人と泉・水・森・土地との付き合い方）、社会・文化と自然問題との連動（歴史変動・集団移住などの過去を記憶する地域住民は現在の自然保護や経済開発などをどのように認識し対処しているか）などであった。方法的に、地域住民に対してインタビューを行い、関連地域（省・州・〔自治〕県といった各地方自治体の中心地）や機関（北京・フフホト・蘭州・西寧などの都市にある各レベルの社会科学院、大学など）において文献資料収集を行った。本報告書は、主にインタビュー・データに基づき、上記調査項目の順にそって、今回の調査をスケッチしようとするものである。

I 調査地概観

黒河は青海省海北州チレン県からチレン山脈を横切って肅南県へ流れる。黒河はチレン県内において2つの支流からなる。中国の公式地図上、西部の支流は「黒河」、東部の支流は「八宝河」とある。もともと両支流地域のあるじだったと自認するヨゴル族の人々の話によれば、（東部）ヨゴル語（以下特にことわらない限り「東部ヨゴル語」を指す）では、西部の支流は「バストゥ・ゴーレ」ないし「バストゥン・ゴーレ」、東部の支流は「エジニ・ゴーレ」ないし「エジニ・ムレン」と呼ばれていたそうである。

だが現在、ヨゴル族の人間はほとんどおらず、両支流地域に暮らす住民はチベット族、モンゴル族、回族を中心とする。東部支流地域に位置するアレゲ郷にはチベット族、西部支流地域に位置する野牛沟郷にはモンゴル族、チベット族、回族の住民が居住しており、いずれも牧畜業を営んでいる。とりわけ西部支流地域の住民のなかには解放後海晏県から移住してきた者が多い。当地域にいたヨゴル族の住民は現在の肅南県（皇城区）に移った。

東西の両支流がチレン県と肅南県の境付近に合流する。合流してからの川の名は公式地図上「黒河」となる。現在ヨゴル族の人々はそれを「ハラ・ムレン」や「ハラ・ゴーレ」と呼ぶ¹。肅南県内の黒河流域

¹ しかし、「ハラ・ムレン」も「ハラ・ゴーレ」も、いずれも（解放）後になってからでできた呼称で、昔は「シャラ・ゴーレ」だったという人もいる。

に居住するヨゴル族の人々は言語的に、アルタイ語族モンゴル語派に属する言葉を話す「東部ヨゴル」(ヨゴル語で「シャラ・ヨゴル」とされる。康楽区ヤング郷は肅南県内黒河の最上流地域に位置する郷である。ヤング郷スタロン村は、黒河を挟んで青海省チレン県野牛溝郷と隣接している。当地域のヨゴル族の住民もチレン県アレゲ郷と野牛溝郷の住民同様牧畜業を営んでいる。スタロン村²には自治県内最大ともいわれる原始林が分布しており、その森林を管理する「スタロン林場」という張掖地区(肅南県の上位行政単位)林業処の派出機関が設置されている。康楽区バヤン・モンゴル族郷は肅南県内黒河の最下流地域に位置する郷である。当郷の住民も牧畜業を営んでいる。

II オーラル・ヒストリー

1. 集団移住

調査者はチレン県アレゲ郷で、その土地(チレン県を含むチレン山脈地域)のあるじについて以下のような言い方を耳にしたことがある。

この地はもともとホルのものだったが、その後シャラ・ヨゴルのものになった。ゲサルがアレゲを率いてシャラ・ヨゴルと戦った。今は我々アレゲ(チベット族)が土地のあるじになったのだ。

この言い方自体の歴史文献学的な信憑性はともかく、歴史上チレン山脈地域がさまざまな民族を受け入れてきたことは事実である。この地は外部から逃げ込んでくる人間にとっては常に寛容で豊かな大地であった。だが、このことを言い換えれば、この地に来た(来ざるを得なかった)ほとんどの人間は苦難の歴史を経験しているということにもなる。1958年海晏県からチレン県に来たモンゴル族の老人たち、そしてほぼ同時にチレン県から肅南県に移ったヨゴル族の老人たちもその移住の歴史をしばしば口にする。

人々が個人単位ないし世帯単位で散発的に故郷を離れ異郷に移り住むのとは異なり、特定の地域や部落(tribe)ないし階級などのカテゴリーに属する人間が集団単位で長距離にわたって生活空間を変更するいわゆる集団移住現象がチレン山脈南北において発生した。そうしたなかで、特に解放以降国家ないし地方行政の主導のもとで行われた集団移住——移住する側にしてみればそれは「強制退去」だった——が地域社会に与えた影響は大きい。

2. チレン県の場合

現在チレン山脈南部に位置するチレン県に暮らす住民のなかで、17世紀に現在の青海省ゴロク・チベット族自治州から移ってきたアレゲ³などチベット部落以外、モンゴル族を含む多く住民は20世紀に入ってからこの地にやって来たとされる。

² スタロンはチベット語「ダグ・ロン」の訛であり、「トラのいる谷」という意味をする。ヨゴル語では、「バルストゥ・ゴレ」という。昔はこの地にトラが生息していたとされる。ある民家があって、多くの馬を飼っていた。そのなかに1匹の大きな種馬がいた。当時馬賊が多いため、その家の主は毎晩のように馬をみにいていた。ところである晩、その種馬の頸にトラに襲われた跡が残っていた。心配した主は馬がトラに捕らわれないように馬の鬣を切った。しかしその晩、馬はトラに襲われ死んでしまった。なおトラは馬の肉を食わないため、ただ両者は単に喧嘩して馬が死んでしまったようである。しかしなぜ馬はそのタテガミが切られてからトラに負けたのか。夜になると馬のタテガミから静電気が発生していたため、タテガミのあるときには死ななかったという。したがって、確かにトラがいたことが証明されたという。

³ アレゲ部落はチベット諸部落の中でも長い歴史をもつものとしてその名が知られ、多くの歴史文献に登場してきた。当部落は17世紀に内訌のため分裂した。現在その人口的なマジョリティが青海省河南モンゴル族自治州ニンムタ郷に暮らしている[シンジルト2003]。

2.1 海晏県からの移住

野牛沟郷に住むモンゴル族の住民はほぼ全員 1958 年以降海北州海晏県から移ってきた人々とその子孫たちである。彼らは主に大泉牧委會の第 2、第 3 生産合作社で生活しており、当牧委會総人口（831 人）の 37.3%を占め、当牧委會において最大人口の民族となる[海北藏族自治州地名委員会弁公室 2001:177]。

彼らが移住しなければならなかった理由はなんだったのか。その前に言わねばならないのは、「1958」という数字である。この数字はチレン県や肅南県のみならず、青藏高原のほとんどの住民にとっても特別なものである。1958 年には「チベット反乱」とされる出来事があり、反乱鎮圧に伴い地域社会全体が大きく変化したからである。当時の人民公社化などの改革に危機感を抱いた甘肅省甘南チベット族自治州や青海省南部地域のチベット族を中心とする地域住民が武装反乱を起こしたとされ、解放軍の反乱平定によって事件が鎮静したというのが一般的な見解である。叛乱平定に行き過ぎた部分があったことを地方政府レベルで認めた[シンジルト 2004]。その具体的な事象としては、チベット仏教寺院に対する物理的な破壊、僧侶にする強制還俗などがあげられる。そういう意味で 1958 年は地域住民の近代史における大きな分水嶺となったといつて良い。

海晏県においては 1958 年の事柄に加えて、221 場建設という出来事もあった。221 場とは核研究開発の施設の名であり、機密保持のため施設外の人間に対して一切の立ち入りが禁止された。立ち入り禁止の対象に当然元来その地に暮らしていた住民も含む。また彼らは偶然にもチベット仏教を信仰する民であるがゆえに、前述のチベット反乱とされる事柄と容易に関連付けられ、移住させるべき対象となった。そのため、海晏県においてチベット仏教寺院や僧侶とかかわりのある家族や、反革命・叛乱分子とされる者、牧主など家庭成分に問題のあるとされる（家畜数の多く経済的に富裕な）人、文字の読める人たちがまず移住させる対象に選ばれたそうである。移住を命じられた人々の数は約 400 世帯ともいわれ、チベット人とモンゴル人の数はそれぞれ半分を占めた。チベット人は主にガンツァ県、モンゴル人は主にチレン県へ送られた。

1958 年 9 月 19 日（旧暦。以下同様）夜に彼らが一夜に移住しなければならぬと命じられた。老人たちは当時のあわただしい様子を次のように振り返る。

モンゴル・ゲルのかまどの火がついたまま、犬たちもゲルの前の杭につけたまま、馬に鞍を置く暇もなくあわただしく、近くにいた家畜をつれて、北へ向かって出発した。

叛乱防止の名目で、1 世帯あたりに馬を 2 頭しかつれて行くことが許されなかったため、ほぼ全員徒歩で冬のチレン山脈を越えたという。そうしたなか、一行は 10 月 5 日にトーライ牧場に到着し、そこからさらに現在海西モンゴル族チベット族自治州（以下海西州）天峻県のスウリというところに辿りついた。半年後の 1959 年 4 月にスウリから再びトーライ牧場に戻り、1963 年にチレン県野牛沟郷に到着し今日に至ったという。

無論、上記の理由とルートで 1958 年海晏県からチレン県に移住してきたのはモンゴル族だけではなく。1958 年海晏県から移住してきた住民のなかには、「トゥモ（托茂）人」と呼ばれる人々もいた。彼らは現在身分証明書上では「回族」となるが、一般に漢語を話し農業や商業に携わる回族と異なり、モンゴル語を操り牧畜業を営んでいる。モンゴル族の人たちは彼らのことを「ヒヒ（回回）・モンゴル」という。回教（イスラム教）を信仰するモンゴル人という意味であろう。なお、昔は漢人たちは彼らのことを「托茂韃子（Dazi タタル）」と蔑称していたようである。野牛沟郷において海晏県からきたトゥモ人

第1世代は3世帯あり、第2、第3世代を合わせると約20世帯になるという。牧畜という生業に誇りをもつ人たちである。農業や商売しないという意味で、自らはあくまでも「トゥモ人」であり、一般的な「回族」とは違うというニュアンスが彼らの話から感じ取れる。

現在野牛沟郷に生活の基盤をおくモンゴル族、チベット族、回族（トゥモ人も含む）の相互関係は友好である。例えば、モンゴル人の住民たちは、回族の人間にイスラム式で家畜をさばいてもらっているのがその例である。もともと牧畜業を営むモンゴル族の彼らは豚肉がそれほど好まないが、それでも相手の生活習慣に対する配慮から、イスラム式で回族の人間に家畜を殺してもらい、そして自らも豚肉を食べないように心がけている⁴。

2.2 海晏県への帰還

長年の政治運動のなかで否定されてきた少数民族文化保護政策が1980年代に復活され、また221場が閉鎖されたこともあり、当時60歳以上の老人をもつ移住家族は、海晏県に帰還できるという条件付きの帰還事業が地方行政の主導下で行われた。1958年以降移住してきた約200世帯のモンゴル族住民なかで、ほぼ半分の住民が海晏県に帰ったとされる。無論、帰還運動は最初から地方行政主導のもとで行われたわけではなかった。1978年から1979年にかけてチレン県からのモンゴル族やガンツァ県からのチベット族の牧民たちがしばしば海晏県の故郷に放牧しに来て、海晏県の住民との衝突が頻発した。そのため、双方の地方行政が調停した結果、1958年移住させた人々を条件付きで帰還させることに合意したという経緯があったとみられる。

野牛沟郷の自然状況の悪さが彼らを海晏県に帰還させる大きな理由であったようである。具体的には牧場が平らでなく、海拔が海晏県の故郷より高く、牧草地もほとんど山陰にあり放牧に適さないなどといった要素があげられる。チレン県のモンゴル人たちの帰還先は、海晏県の金灘郷、銀灘郷、ハラジン郷であった。そして、主にガンツァ県に移住したチベット族の帰還先はハラジン郷とトリ郷であった。しかし問題は海晏県に帰ってからである。彼らはあくまでも、「移民」として扱われ、それに、彼らが帰還したときはすでに「大包幹」（牧地の請負）の後であったため、手に入れた牧地はほとんど条件の悪いものばかりだったからである。そのため帰還者たちの不満も多かったそうである。

2.3 その他の移住

チベット族が人口の多数を占めるアレゲ郷で調査者は現在の海西州から移住してきたモンゴル族家族と出会った。彼らはほぼ全員（第1世代は計7世帯）、カザフ人の攻撃虐殺（1930-1940年代）から逃れてきた亡命者およびその子孫である。長い亡命の旅を経て、現地に到達したのは1950年代であった。

生業形態、風俗習慣や宗教信仰などの側面において極めて近似しているため、彼らはまわりのチベット族と良好な関係を保ってきた。チベット族の人間も彼らのことをモンゴル人という意味で「ソグ」と呼んだりするが、生活習慣や考え方などにおいて実はそれらのソグが自分たちとほとんど変わらないという意味で「やつらは我々とひとつだ」ともいう。70代の第1世代の多くはモンゴル語とチベット語のバイリンガルだが、第2、第3世代になるとチベット族との通婚が増え、チベット語のモノリンガルあるいはチベット語と漢語のバイリンガル話者が圧倒的に多くなる。

また、チレン県のアレゲ郷や野牛沟郷など各郷において、郷の下位行政単位としての牧委会に必ずひと

⁴ 他方、アレゲ郷のチベット族とその近隣の八宝郷の回族との関係は時にはギクシャクしたりする。主な理由は副業として薬草を掘る回族の人がアレゲ郷の牧草地帯に進出していることにあるようである。回族の人間が草原を破壊しているとアレゲの牧民たちは指摘する。

つの「農事隊」という単位が付随している。各農事隊には農業を営む漢族、回族、チベット族の住民が生活している。彼らは主に1958年から1963年にかけて、大通県、民和県、海南州など青海省各農耕地域から移住してきた、「盲流」と呼ばれていた人々とその子孫である。彼らは土地をもたず、したがって税金も支払わずに、地域の土地を借りること（2元/1ム）で生計を立てている。副業として売店などを経営している者が多い。彼らのなかにはチベット語が話せる人も多く、牧畜民との交流も多いが、両者の間での通婚は少ないようである。

3. 肅南県の場合

チレン山脈北部に位置する肅南県においても集団移住の歴史ドラマが繰り返されてきた。そのなかでも自らの経験として老人たちに語られている集団移住は1958年チレン県から皇城区への移住およびその後（1970年代-1980年代）皇城区から康楽区への再移住である。

3.1 チレン県からの移住

1958年末から1959年にかけて野牛沟地域からヨゴル人たちは皇城区へ移住させられた、そして皇城区にいた人々を現在のチレン県に移動させた。理由はいくつかあったようであるが、「農業上山、牧業下山」というスローガンのもとで、当時両省の地方行政府によって行われたものとみられる。一方、肅南県側の公式見解を示す書物と考えられる『肅南裕固族自治県誌』によれば、移住の理由は青海省チレン県が野牛沟地域に対して行った侵攻に起因するという〔甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994：451-452〕⁵。

現在ヨゴル人たちはチレン県の野牛沟地域を「バストゥン（八字嶺）」と呼んでいる。バストゥンは「烽火（のろし）台」や「孤立した山」などの意味を含むヨゴル語である⁶。そこでバストゥンの「主権」問題についてヨゴル族の人間はよく次のようなことを力説する。

野牛沟郷や黄蔵寺は全部我々のものだった。つまり黒河北部は我々のものだった。今は青海の人間に奪われた。

そして人々は、バストゥンに対する領有権を証明するために、「我々は清朝の時に朝廷からもらった『土地使用許可書』ももっていた」と説明する。老人たちの話によれば、バストゥンはヨゴル族の夏営地と秋営地であり、昔はヨゴル人とチベット人とは友好な近隣だったようである。しかし、その後勢力を伸ばしてきたチベット・アレゲ部落との牧地紛争に破れたヨゴル人たち（ヤング部落とスダロン部落を中心）は北へ撤退したと当時を振り返る人が多い。

昔は我々はその地のあるじであって、チベット人は我々の牧草地を利用するため、我々に税金を払っていた。しかしその後我々は弱くなり、逆にチベット人に追い出され、山のなかに逃げ込んでしまった。彼らに土地を奪われ、両省政府が合意した結果我々は現在の皇城区に移った。

⁵ また、同書によれば張掖地区には1959年以降肅南県全体を現在皇城区へ移転させる計画があった。その計画が約4年間実際に実行されたものの、途轍もない人的財的損失を出した末、1962年に中断せざるをえなかったという〔甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994：451-452〕。つまり、皇城区への移住はバストゥンからのみならず、当時の肅南県の他の地域からも移住があった。

⁶ 現在の野牛沟郷には、人間がその上に登れば互いに眺められる烽火台が3つあったため、「ゴルバン・バストゥン」という言い方もあった。漢語でいう「八字墩（Ba zi dun バズドン）」とはその訛りである。

ヨゴル人はバストゥンから現在のスダロン村そして皇城区へと移住が始まったとみられる。皇城区に行った人たちは最も体力的に強い人たちであったともされる。移住先の皇城区はもともと青海省門源県のものであり、解放以前は盗賊が多くいたところだったが、解放以降は空き地化した。皇城区へ移住する一行は1958年末（西暦1959年1月）にバストゥンを出発し、チレン県内を横断し、辺渡口、山丹軍馬場を経て、目的地に到達した。

この移動のため離散家族が多く生まれた。また移住途中生まれた子どもや、「大躍進」で作られた保育園に半分強制入園させられて集団生活を余儀なくされた子どもが多く亡くなった。同時期に労働力を失った年寄りを収容するための老人ホーム「敬老院」も設立された。さらに、皇城区に行ってからまた周囲と紛争は絶えなかった。そのため皇城区から故郷（現在のヤング郷）へ戻ろうとする人が徐々に増えていった。

3.2 肅南県内の再移住

肅南県全体からみて皇城区は飛び地である。周囲は甘粛省の山丹県（山丹軍馬場）、永昌県、武威県、天祝チベット族自治州、青海省門源県に囲まれる。そこに移住してまもなく、周囲のチベット人や漢族の農耕民と土地をめぐる紛争が始まり長年続いた。青海省門源県を始めとする周囲と牧地をめぐる紛争は1959年後半から1976年まで続いた。1976年以降は山丹軍馬場と紛争が始まり、山丹軍馬場との紛争が調停されてからは武威県や天祝県との紛争が始まったという。

そのため、住み心地に悪さや家畜の大量死亡に動揺するヨゴル人は1970年代中旬（1974年と1978年の説がある）から、自治県の中心方向へ再移住することを試み始めた。彼らの目指す土地は、彼らの故郷スダロンであった。先に移動しはじめたのは若い10数世帯（約70人）であった。彼らは当時の生産大隊から「工分」をもらい、生産大隊の一部の家畜をつれて、生産大隊全体の移住が安全に実現できるか、状況を確認するために先に「派遣」され、「先遣隊」的な使命をもっていた。彼らは1958年皇城区に移住したときと同じルールでチレン県を横断し、宝瓶河牧場を経てスダロンにたどり着いた。しかし、スダロンには彼らを受け入れる牧草地がなく、彼らがつれてきた家畜の死亡率が高かったため、再び皇城区に戻る者がでてきた。またこの帰還は政府の支持をえることができず、むしろ政府は彼らを皇城区に戻そうとさまざま工夫をした。彼らはスダロンと皇城区の間を数回往復した末、一部（12世帯）がスダロンに定着した。

「戸籍もないまま10数年さまよった末、1988年にやっとスダロンに安住した」という移住者もいる。ただし、前述のチレン県から海晏県への帰還者と同様、行政側が彼らを正式に受け入れたときは牧地の請負がすでに完了していた。彼らが現在所有する牧地はそれまでその地にいた「老八戸」（1958年バストゥンから引き上げ、スダロンに定着した最初のヨゴル人第一世代住民の世帯数を指す）とされるヨゴル人に土地を分けてもらったようだ。そのためか、皇城区から来た彼らは現在スダロン村においては最も経済的な状況の悪い「貧困戸」に数えられている。

3.3 その他の移住

ヨゴル人にしてみれば、南からヨゴル人自らの移住があったとすれば、北からは国内外から他民族の移住があった。1950年代末から1960年代初にかけて、とりわけ「三年自然災害」とされる時期において、飢餓に耐え切れない大量の漢族農耕民が野生動物の多い肅南県に押し込んできたといわれている。スダロン村にも民楽県などから漢族が来たという。当初は、ヨゴル人牧畜民に食料などを援助してもらい、その

後彼らは牧畜民の放牧の手伝い、大工、家造など臨時仕事に携わるようになった。1983年まで同村に10数世帯の漢族がいたが、その一部が1983年に故郷に帰還した。現在（2004年）は約9世帯あり、少数の人が農業を営む以外、ほとんどの人は牧畜業を営んでいる（2004年現在スダロン村総世帯数57、ヨゴル族46、漢族9、チベット族2）。貧しいヨゴル族牧畜民を雇って放牧するほど裕福になっている世帯もいる。当村の党委員会の書記長も当時に移住してきた漢族である。牧畜民に牧地を貸しあたえたり、牧畜民を雇って家畜を放牧させている。彼らほとんどの人はヨゴル語が聞き取れるし、話せる人もいる。オポーを祭ることや泉や水を扱う習慣などの面においてもヨゴル族の影響を受けている。

他方、バヤン・モンゴル族郷のモンゴル族住民は解放以前にモンゴル人民共和国から現在地に移り住んだのである。宗教弾圧を受け、20世紀30年代から40年代にかけて当時のモンゴル人民共和国から移ってきたとされる。当郷のモンゴル族住民のなかにモンゴル語以外、漢語やヨゴル語を話せる人も少なくない。当郷の地名の多くがヨゴル語ないしチベット語に起源するものである。この土地は「フン・ネ・ノトグ」（ひとさまの土地）という言い方をする人が多く、そして自分たちを受け入れたヨゴル人に感謝の意をもって、モンゴル人とヨゴル人の関係を次のように語る老人も多い。

我々は故郷から追い出され、回族の襲撃を受けたりしたときに、ヨゴル人が我々を受け入れてくれた。当時のヨゴル族の酋長（大頭目）ワン・ゴンチェグジャブの庇護を受け、現在の土地を借りることができたのだ。モンゴル人と違って昔からヨゴル人の土地は私有のものだったから、我々は多少お金を支払ったりすることで生活を維持してきた。解放後ヨゴル人は一部の土地を我々モンゴル人に譲ってくれた。

当郷のモンゴル人も1958年頃、チベット叛乱問題と関連付けられ、叛乱の可能性があると政府に疑われたという。それに加えて、モンゴル人民共和国の人民革命（党）に反旗を翻した点も追究されたそうである。45歳以上の男性のほとんどはこの2つの嫌疑をかけられたという。逮捕された地域エリートは計7人で、みな獄死するか、出獄まもなく衰弱死・病死してしまったという⁷。

宗教弾圧を受けモンゴル国から移ってきたとはいうものの、彼らは全員僧侶や貴族の末裔ではなかった。当時は何らかのきっかけで僧侶や貴族とかかわりをもってたとモンゴル政府に認定された人々が多かったようである。こうした背景を持つ彼らは1958年にまた極めて似たような理由で似たような立場におかれた。

現在モンゴル族とヨゴル族との関係は良好で、スダロン村のヨゴル族の間では「モンゴル・ヨゴル・ヘッゲチェ・アマン」（モンゴルとヨゴルはひとつの命）という言い方がある。現在、バヤン郷のモンゴル族は「僑胞」という新しい名を政府からもらっている。直訳すると「外国に滞在する同胞」となる。ロジックとして彼らを送り出したモンゴル国側がこのような言い方をすべきであるようだ。現在この語はモンゴル国という異国から来た人たちという彼らの特殊な歴史を表現するためのものとしてつかわれていると理解すべきであろう。1990年代に入ってからにはモンゴル国からくる親戚を受け入れた家族も現れている。

⁷ ヨゴル族の人たちも多く逮捕され、ちょうど1958年以降の数年間には食糧危機だったので、飢餓、伝染病を理由に刑務所で死んだ者が多かったようである。当時自治県総人口4000人のなか400人近くの人間が逮捕され、そのほとんどがヨゴル族、チベット族、モンゴル族、トゥ族などの少数民族だった。自殺者も含め死者数は300人を超えたという。

Ⅲ ローカル・カルチャー

前章で述べたことから分かるように黒河住民はかなり似た歴史経験を持ち、宗教信仰や生業形態の面においても近似している。そのみならず、伝説、禁忌などの面において共通するものが多い。本章ではこうしたローカル・カルチャーにまつわる事象を概観しつつ、前章で言及した諸歴史変動がいかに地域文化に影響を及ぼしてきたのかを確認する。これらの作業を通じて、地域の人々は身近な生活空間においてどのように自然を表現し、自然とのあるべき付き合い方を定めてきたのか。そしてそのような自然認識をもつ彼らがみずから経験する社会現実生活の諸問題をいかに説明しようとしているのかを浮き彫りにする。

4. 伝説

4.1 河の性

ヨゴル人の間ではヨゴル語で黒河の東西支流をそれぞれ「エレ・(オ) スン」(雄の川)と「エメ・(オ) スン」(雌の川)という呼ぶ習慣があった。この慣習にしたがえば、現在の八宝河(エジニ・ムレン)が雄川、黒河(バストゥン・ムレン)が雌川に相当する。この河の性別に言及することで、人々は歌の巧緻などについての説明が行われる。雌川であるバストゥン・ムレンの水を飲んでいたのでスタロン部落の人間の喉がよく歌がうまく、だれでも上手に歌が歌えるといわれている。他方、雄川にいたからエジニ・ムレン地域の人間は歌が下手だといわれる。さらに同様な理由で雌川に生活する女性のほうが温順で性格がよいともされる。

なお、「エジニ・ムレン」の「エジニ」は黒河下流域に位置する内モンゴル自治区エチナ旗の「エチナ」という発音と極めて似通っているところがあるように思われる。ヨゴル語において「エジニ」という語は「おずからの」、「私の」、「自分の」という意味をもつとされる。一方、それには「主人の」という意味もあるのだと解釈する人もいる。「主人」説を立証するため、例えばヨゴル族の酋長(大頭目)の直轄部落が「エジニ・ドゴ」であり、明らかに「主人の部落」という意味だと説明する人もいる。

4.2 シケ・ノール

自然と人間を関係付ける言い伝えは他にもある。スタロン河の西に位置するツァガン・ダバーン(地名、集落名「白い峰」)にはとても高い一本の「トスン・ハラガイ」(赤松)があった。そして、スタロン河の東に位置する樺木溝オボーという山に「シケ・ノール」(大きな湖)があった。シケ・ノールはツァガン・ダバーンから数キロメートルも離れる。それにもかかわらず、シケ・ノールにはトスン・ハラガイの逆さ影が映るという。この伝説はトスン・ハラガイの巨大さを物語っているともいえよう。この奇跡のような風景がまだみられていたときにヨゴル人たちの生活はとても幸せだったというのである。夏になると湖には「ガロー」などの鳥がよく卵を産みに来ていたものだと昔の様子を語る老人は多い。とにかくそのときのヨゴル人はとても富裕であったと信じられている。どれほど豊かなのか。当時のヨゴル人の娘たちは、今でいうと貴重なバターを玉にして、雪合戦するように互いに投げ合って遊んでいたほどだったという。

しかし、いつかは分からないが、ある「悪いやつ」がそのトスン・ハラガイを伐採してしまった。そのため、シケ・ノールの水が漏れ始め、湖も崩壊してしまった。その時にあるヨゴル人カンブ・ラマはシケ・ノールが崩壊したらヨゴル人は没落すると予言したという。その後予言通り、ヨゴル人たちは分裂し、各地に散らばり、貧乏になってしまったという。シケ・ノールの崩壊によってヨゴル人が今日衰弱したのだから、その湖を再建して自らの現状をすこしでも改善しようと部落の長や年寄りたちに動員され、村人たちは数回にわたって水を止める工事を行ったが、いずれも失敗に終わった。解放後も村長などの指揮のもとで村民たちが、セメントや石で水漏れを止めようとしたが、それらも結果的に失敗した。実際調査者も

そのシケ・ノールの跡地をみてみたが、そこには直径約 20 メートルから 30 メートルまでの楕円形の凍結した泉があった。泉の水でできたこの水溜りは、冬は凍結した湖のようにみえる。しかし夏になるとほとんど何も残らなくなるという。シケ・ノールの近くに「バガ・ノール」といわれる小さな湖もあったそうだ。無論それも今は湖ではなくなった。

4.3 黒河を泳ぐ怪物

ヨゴル人のなかには、昔黒河の中に怪奇な動物が生息していたという言い伝えがある。その動物の外形に関する説明は人によって異なる。馬に似ているという説もあれば、山羊説もあり、龍説もある。しかし動物のあらわれる時期に関してほぼ共通している。冬、川が凍ったときその動物があらわれるといわれる。形からしてそのなぞの動物は村人に「麒麟」と推測されているようだ。

実際子どものときに自らもその動物が来たときの音を聞いたことがあるという AZH 氏（スダロン村、71 歳）によれば、麒麟が来るときに、川の氷が大きく割れていた。割れた氷の大きさは平屋一軒分くらいだったという。危険のため子どもたちは川に近寄らないように老人たちによく注意されていた。麒麟が来るたびに村人の誰にもその大きな音が聞こえていた。その音は 1 キロくらい離れるところまで届いていたという。AZH 氏の故郷は、すぐ黒河の川沿いに位置するスダロン村の樺木沟というところである。

途轍もない破壊力をもつ怪物ではあったが、人間には何の害も与えなかったようである。人々の話によれば、冬人間や家畜が川を渡るときに滑らないように砂や乾燥した土を氷面に撒いてできた道（シャラム）だけは、割られずに残った。両側の氷はほとんど割れてしまうため、残されたシャラムはまるで橋のようにみえたという。シャラムはとても安定していて、妊婦がそれを渡っても何の問題もなかったとされる。AZH 氏は自分が最後にその麒麟の到来を聞いたのは 1950 年代初期頃だったと記憶する。

さらにその怪物が関与したのではないかと推測される出来事があった。黒河沿岸で生活していたある老人が自分の 1 頭の雌馬を草の多い黒河の川沿いに放しておいた。翌年その雌馬が出産した。生まれた子馬（雌）の様子はとても奇妙だった。頭はラバに似ていて、その毛は子羊の毛のように細かいパーマ状になっていた。さらにその近くに種馬はいなかった事実を考え合わせて、おそらくその子馬は麒麟の子ではないかと村人に噂されはじめた。その噂を聞いて、当時（解放前）地域を統括していた軍閥馬歩芳のある部下がその馬を譲ってもらうように頼んできたが、馬主は譲らなかったという。その後普通の馬同様に主人につかわれていた。そこで最大の問題は種馬がいなかったのにもかかわらず、尋常ではない子馬が生まれたということにある。無論当地域には当時ロバもいなかったという。

5 タブー

このように地域住民の間には、自然を人格化する語り、人間社会の興隆や衰微のわけを自然の変化に求める説明の様式、野生動物と人間と家畜の関係にまつわる諸伝説が存在する。これらに加えて、人間と自然との関係をめぐるさまざまなタブーの存在が確認できる。

5.1 タブーの諸相

チレン県野牛沟郷のモンゴル人の中には、「オス・イン・イケ・ボラガ、フーン・ネ・イケ・ナガチ」という言い方がある。直訳すれば「水の中の大きな泉、人の中の大きなオジ（母方）」となる。意識すれば「水の中で最も大事にされなければならないのは泉。人間の中で最も尊敬しなければならないのはオジ」となる。子どもにとって母方オジは最も怖いと同時に最も敬うべき存在である。成長していく子どもにとってオジは模倣すべき模範的な存在である。母方オジと同じように、川や池、沼などのなかで最も注意

を払って報わなければならないのは泉であるというのがこの言葉の意味であろう。言い換えれば、泉は「水のなかの水」となる。

重要であるゆえ、泉をめぐるしきたりも多い。例えば、泉の湧き出る源あたりの土や石を動かしてはならない。そこで洗濯することをしてならない。さもないと水の神（オス・イン・ハーン）が怒るといふ。そして、世帯ごと、あるいは同じ泉の水を飲む数世帯の人間が泉を祭ることがある（ボラグ・ダヒフ）。特に風土病などにかかった場合、僧侶に日にちを占い、読経してもらって泉を祭ることが大切だと考えられている。僧侶はどこ寺院でも結構だが、一番好まれているのは「[チ] シムグチン・アカ」（泉祭りで読経するために草原を出歩く僧侶）であるようだ。「みんなで泉を祭ることで、泉の神（ハーン）に喜んでもらうのだ。そうすれば我々人間も我々の家畜も病や災いがなく幸せに暮らせる」と彼らはいう。泉と違って河を祭ることはほとんどしないが、河のなかで、特に血（家畜の血や経血）のついたものを洗うこと、排泄することを厳禁するなどの決まりもある。

アレグ郷や野牛沟郷の住民はよく「モンゴル人とチベット人は水泳できないけど、漢族や回族などの農耕民はできる」とか、「彼ら（漢族や回族などの農耕民）は泉で洗濯するが我々にはできない。牧畜民は川の水をくんで自宅で洗濯する」などの言い方をする。また、野牛沟郷のモンゴル人の間には「ヘシゲ・ボヤン・ナン・ヒル・エル・オガン」という言い方がある。直訳すると「自分の福を垢で洗い落とす」となる。意識すると「垢を洗い落とすと福も洗い落としてしまう」あるいは「自分の福と垢をともに洗い落とす」となる。ある人が自分に生まれたときに付与された運気をそのまま保つことができるかどうかはその人が運気を付与された際の状態のままにいられるかどうかにかかわっているという意味であろう。幾分「衛生」的ではないようにみえるかもしれないが、要はからだ全体を水で洗うことが勧められないということである。このように牧畜民たちは水を敬遠する傾向にあり、夏に足を洗うくらいで、全身を洗うことはほとんどない。泉や水をめぐるこれらの決まりは別に彼らが希少だから特別に設けられたわけでは必ずしもない。水資源に恵まれたヨゴル人地域やチベット人地域においてもほぼ同様なタブーがみられる。

これらのタブーは泉や水のみならず多岐にわたって見聞することができる。土や樹木に関してもそうである。土を掘ることは牧畜民にとってはしてはならないことであり、たとえ地下に金や銀があったとしてもそのために土を掘ってはならない。土を掘ることはその土地の精霊や神たちに対する無礼を意味するからである。掘らないばかりでなく、土地の神々を喜ばせるための儀礼（オボー祭り）が行われている。野牛沟郷大泉牧委会のモンゴル人とチベット人は旧暦6月15日にオボー祭りをを行う。スタロン村のヨゴル人では旧暦5月4日にオボー祭りを行っており、二三年に一回四川や青海省から僧侶を招待し読経してもらい安全を願う。泉祭りは世帯ごとなど少人数で行うのに対して、オボー祭りは部落ないし村など行政単位ごと大人数で行われることになる。その際に、競馬や相撲などの大掛かりなイベントを伴うこともある。

森林に恵まれているスタロン村のヨゴル人は、樹木の具体的な種類や名前にかかわらず、あらゆる樹木を「ノイタン・モドン」と「ホーライ・モドン」との2つのカテゴリーに分類する。前者を直訳すると「湿っている木」、意識すると「生きている木」になる。反対に後者は、「乾燥した木」したがって「死んだ木」となる。そこで、彼らはノイタン・モドンには命や魂が宿っていると認め、ノイタン・モドンを切り倒すことをしてはならないという。なぜなら、ノイタン・モドンつまり生きている木を倒すことは生きている人を殺すのと同じ罪になると代々親に教わってきたといわれる。したがって、家を建てる建築材として、あるいは燃やすための薪として、その使用が許されているのはホーライ・モドンに限られる。ホーライ・モドンにしても、比較的大きなものを切り倒す前には、昔は、読経したうえで、村の老人が先に象徴的に斧を入れる手続きが必要であったともいわれている。

5.2 違反への対処

ヨグル族とモンゴル族とチベット族は「ツェタル」という概念を共有している。発音的にモンゴル語やヨグル語では「セテル」となる。言葉の語源であるチベット語で、「ツェ」は命や魂を意味する名詞である。「タル」は解き放す、自由にするという意をもつ動詞である。「ツェタル」は複合名詞で、それにあたる漢語は「放生」であろう。

無論、ヨグル族やモンゴル族そしてチベット族の間でも「ツェタル」を行う理由をめぐる解釈は必ずしも完全に一致するのではなく、具体的なやり方などに関しても微妙な相違がみられる。例えば、青海省海西州や内モンゴルなどのモンゴル族地域において、ツェタルする対象は、主に自ら所有する家畜のなかで、最も可愛がっているものを指す。主な理由とは「ボヤン・ウレドフ」(徳を積む) ためである。また、同じヨグル族のなかでも、地域や家族の違いによって、「ツェタル」をめぐる解釈も異なる⁸。

しかし、特定の羊や牛、馬などの家畜を殺さず、それが老衰死するまで自由にさせるという点においては、いずれの民族も地域も共通する。自然と人間とのかかわりにおいて、「ツェタル」という概念が具体的にどのように用いられているのかに関して、調査者は主にスタロン村ヨグル族の人々の間において聞き取り調査を行った。その内容を間接話法で整理してみると大体以下ようになる。

もし一人の人間が殺してはいけない(野生) 動物を殺してしまった場合、あるいは行ってはいけない場所に行ってしまった場合、その人はなからずなんらかの病気になる。その病気は一般の医者には治療できない。例えば、殺してはならない動物を殺してしまった場合、その人は、猟から帰宅の途中あるいは帰宅してから足か腕などからだのどこかが動けなくなったり、激しく痛みを感じたりする。たとえ医者に診てもらったとしてもそれらの症状がなかなかよくなる。最終的に僧侶(できれば活仏) のところに行かざるをえない。そこで、みずからが病になった経緯を説明し、治療法を乞う。そうすれば、僧侶や活仏は「君はやっちゃいけないことをやってしまった。だから、〇〇ツェタルを行いなさい」と指示する。それにしたがって、〇〇ツェタルを行えば、大体の場合病は治る。

その〇〇というのは、状況によって異なる。つまり、ツェタルの対象となるものは大体の場合、羊や牛あるいは馬であるが、その人の経済状況(主に家畜の数を指す) によって、家畜をツェタルすることが困難であれば、生きている樹木をツェタルすることも可能である⁹。このようにして、羊をツェタルする場合は「羊ツェタル」、牛の場合は「牛ツェタル」という具合にツェタルの種類は多様である。

ツェタルを行う理由は上述の猟をするときのタブー違反の場合以外にもある。例えば、泉の源で穢れたものや血のついた手を洗ったとか、あるいは泉の源あたりの土を掘ってしまったとかの場合もそうである。さらに切り倒してはならない木を切り倒してしまった場合や殺してはならない(若い) 動物を殺してしまった場合でもその違反者が奇病になり、最終的にはやはりツェタルを行うことになるという。

⁸ またツェタルあるいはセテルという概念にかなり近似する概念としてチベット語においては「ショグレ」、モンゴル語においては「オンゴン」という言い方がある。日本ではモンゴル語におけるセテルと「オンゴン」の関係性についての既存研究として[利光 1988]があげられる。

⁹ ツェタルを行っているモンゴルやチベット地域のことを考え合わせると、木をツェタルする習慣はそれほど一般的ではないようだ。しかし、木にも命や魂があるので木を「ムンヘ・ナスルナ」永続させようという意味で、「モド・セテルレフ」(木をツェタルする) あるいは「モドン・セテル」(木ツェタル) という言い方をチレン県モンゴル人地域でも調査者は聞いたことがある。そして森林資源に恵まれているスタロン村では、木は家畜より長生きするからツェタルする対象として木のほうが重んじられているようである。なるべき小さな木をツェタルするのが望ましいとスタロンの村人が調査者に教えてくれた。

このように、地域の人々は諸々のタブー違反行為とツェタルとの関係を説明する。あるいは、彼らは彼らのいうツェタルという言葉の意味を説明する際に、かならず諸々のタブー違反行為に言及する。そのコンテキストで、タブー違反があったがゆえにツェタルがあるという因果関係になる。ツェタルはタブー違反行為に対して行われた一種の対処措置と位置づけられよう。

一方、ヨゴル人のなかでも、これらのタブーやそれに付随するツェタルなどの慣習に対する評価が分かれているようである。例えば「我々のツェタルは自然保護に役立っている」と積極的に位置づける人もいれば、「実はこれは迷信かもしれないけど……」という前置きで自嘲的に語る人もいる。

6. 文化変容

彼らはなぜ自分の習慣を「迷信」と表現するのか。その背後に長年のイデオロギー宣伝や政治運動そしてそれに伴う集団移住などの影響があったと考えられる。これらの影響は黒河上流域の地域文化（特に言語・宗教・習慣など）の変化に顕著にみられる。

6.1 言語・文字

1958年から1980年代にかけて黒河上流域の民族文化はさまざま危機に直面してきた。海北チベット自治州や肅南ヨゴル族自治県における少数民族のなかの少数民族であるモンゴル族はもとより、それらの自治地域の「主体民族」とされるチベット族やヨゴル族にとっても自らの言語文字を維持することはたやすいものではなかった。

1958年からバヤン郷においては公的な場でモンゴル語を話すことが禁止され、漢語のみの使用が強制される出来事があった。こうした状態が1958年から3年間続いたという。またヨゴル族地域においても公的な場においてヨゴル語で話すことがタブーみされていた。なぜなら当時非漢語の言葉話すことは反乱容疑を招くことになるからだったという。そして、たとえチベット文字を知っていても、戸籍の「文化程度」の欄には「文盲」と登録されていた者がいたとあるヨゴル人はいふ。当時、漢文化以外のものはすべて「文化」として認められていなかったようだ。

さらに民族言語に基づく名前を放棄し、漢語名をつける現象が1958年以降から発生した。それまではチベット族、ヨゴル族、モンゴル族、そしてトゥモ人といった牧畜民たちには自らが所属する部落の名前があったとしても、ファミリー・ネームに相当するものはなかった。しかし1958年以降彼らのなかに漢人と変わらぬファミリー・ネームをもつ人間があらわれるようになった。バヤン郷において、いま若者を中心に多少モンゴル語の名前がみられる以外、ほぼ全員漢字名をもっている。ファミリー・ネームのつけたかも多様である。例えばチレン山脈に住んでいるという理由で「祁」というファミリー・ネームをもらったり、自分の父の（モンゴル語）名前の頭文字の発音に近い漢字を自分のファミリー・ネームにしたりする具合に、さまざまなファミリー・ネームが200人程度の人口しかないモンゴル族コミュニティに普及した。チレン県のトゥモ人のケースもそうである。1958年以前海晏県にいたときはモンゴル人と同様ファミリー・ネームをもっていなかった。しかし彼らは回族に認定され、回族はファミリー・ネームがあるのにトゥモ人もあるべきという前提で、彼らもファミリー・ネームをもつことが地方の（四清）幹部たちに促された。何を自分のファミリー・ネームにすべきかと考えに考えたあげく、諸々のファミリー・ネームがあらわれた。そのなかに、自分が羊飼いであることから「羊」という漢字発音に同じ発音の「楊」という漢字を自分のファミリー・ネームにしたという人もいる。ファミリー・ネームのつけ方こそ異なるが、ヨゴル人たち（所属する部落名の頭文字の発音に近い漢字をファミリー・ネームとする）のなかにも1958年から漢字名が普及しはじめたといわれる。例えば、スタロン村では「蘭」をファミリー・ネームにした

家族は全体の80%を占める。それ以外に安、常などのファミリー・ネームもある。

6.2 信仰・慣習

1958年反乱容疑で、黒河上流域のほとんどの寺院が破壊され、僧侶や活仏たちも逮捕された。チレン県で最も大きな仏教寺院はアレゲ寺であるが、現在僧侶数は30数人程度だが、1958年までは200人以上もいたという。野牛沟郷には仏教寺院はなく、当郷のモンゴル族住民が「自分のお寺」と呼んでいる寺院（ジャザン・キード）はるか遼源県にある。1958年まで肅南県における仏教寺院が10軒あったが、1958年以降は取り壊されたり焼かれたりして、全部壊滅した。1958年に事実として叛乱にかかわらなかったにもかかわらず、叛乱容疑で多くの僧侶（80人くらい）が逮捕され、そのほとんどが帰らぬ人となった。1980年代になって名誉回復されたが、「寺院も僧侶もなくなったのだから、いまさら何を回復しても無意味だ」とヨゴル人たちは不満をいう。1990年代から「信仰のない民族は魂のない人間と同様」という考えに基づき康隆寺の再建がはかられ、牧畜民の努力の末、寺院の形が徐々に整い、2004年には開眼式が行われた。しかし僧侶はまだひとりもいない。

一方、移住によって故地を離れざるを得なくなったがゆえに自らの伝統習慣がもはや保つことができなくなったという喪失感を抱く地域住民が多い。チレン県モンゴル族の例はそのひとつである。彼ら、特に老人たちは現在身の回りに起きている望ましくない諸々の出来事の原因は移住にあると認識する。大泉村のある老人の次の語りはその認識を表す。

海晏県にいたときには私たちは定期的に部落ごとでオボーを祭っていた。そのため一年を通して病気もなく、家畜も肥って、牧地も豊かだった。雨もよく降り、すべてがよかった。それは我々が自分のオボーを立てて祭ることができていたからだ。けれども、今我々は他人の土地に住んでおり、土地の名の意味や由来さえ知らない。それゆえ、我々は自分のオボーを立てようとしてもそれができない。土地の神の了解をえない限り、我々はオボーを立てることはできない。無理やり立てたら災いを招いたり、病気になるたり、大変な目にあうのだ。ただ、チベット人たちにはできる。彼らはこの地の民だから。

その延長で彼は、「現在我々の服装も習慣もモンゴルのものでなくなった。本物は海晏県にあるのだ」という。なぜなら、「1958年につかまった老人たちが帰ってこなかったのも、我々は自分たちの習慣を忘れてしまったからだ」とされる。そのため、「今の若者はマージャンと酒にふけ、犯罪が多く、死んだ人も多い」と結論する。

IV 社会・文化・自然

第II章に触れた集団移住の歴史経緯を考え合わせれば、この老人の論理は完全に的外れとはいえない。過去のみならず、現在においても地域住民を取り巻く環境とりわけ自然環境は急激に変化し、地域住民に再移住を強いる可能性さえ浮上している。それらの事象に対し地域住民はどのように認識し、何をもち、どのように対処しようとしているのか。

7. 開発と保護

前述のように国は「国家建設」（例えば「221 場」のような国家プロジェクト）のために移民を生み出した。それと同様に国家建設のために大量な樹木が切り倒されチレン山脈から運び出された。それは自然

との闘い、結果的に自然に打ち勝つという理念のもとで行われた。この理念はチレン山脈を含む西部地域全体に具現化され、猛威をふるう「黄砂」など災害を誘発する一要因となった。その理念の限界が露呈し、自然は戦うべき敵でないことが気付かされ、自然保護の波が1990年代以降高まってきた。そこで、自然保護の大原則にしたがい、自分たちの故郷もいずれかは「保護区」になり、自分たちは故郷から追い出されるのではないと、地域住民は危機感を抱き、不安を感じている。

7.1 戦勝自然

自然に打ち勝つことは漢語で「戦勝自然」という。この漢語表現は現在においては幾分皮肉っぽく聞こえるかもしれない。しかしそれが人間（人類）の偉大さを褒め称えるのに最大級の賛辞としてポジティブに認められていた時期があった。当のチレン山脈地域においては「戦勝自然」という言葉にふさわしい自然開発は1950年代から始まった。

肅南県は森林に恵まれており、解放後森林を管理するために多くの林場が設置された。1986年自治県内のほかの各林場の管理権が張掖地区林業処から肅南県に委譲された現在張掖地区林業処の管轄下にあるのはスタロン林場だけである。スタロン林場は肅南県内黒河流域において最も大きな林場であり、そこには県内で最大の原始林が分布する。林場は下位組織としていくつかの「護林站」をもち、各護林站には約6人の護林員が常駐する。

これまで交通の便が悪いスタロン村において外部との接触は頻繁ではなかった。そのため、林場そして護林站の存在は地域住民にとって外部社会を象徴する最も身近な存在である。そう意味で、彼らの会話に出てくる「林場」という言葉は必ずしも文字通りの林場（具体的にはスタロン林場）を指すとは限らない。彼らのいう「林場」とは、コンテキストによって「おおよけ」・「よそのもの」・「権力」・「政策」といった抽象的なものをも喚起させるくらいの広がりをもつ柔軟な言葉である。

『肅南裕固族自治県誌』によれば、肅南県は1954年に黒河という林場を設立し、1960年にそれを泉源林場とスタロン林場の2つに分離したという〔甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会1994:150〕。スタロン村人の話によればスタロン林場は1958年に設立されたという。時間はやや前後するが、森林伐採は1958年から始まり、1970年代以降は急ピッチに行われた。というのも、1971年（1972年説もある）に張掖からスタロン林場までの専用道路が開通したからである。村の老人や1950年代から1980年代まで林場で働いていたある元職員の話を経ると当時の状況は次のようになる。

交通不便のため1958年ころ伐採の対象はツァガン・ダバーンなどすぐ黒河やその支流の川ぞいにあった樹木に限られていて、比較的伐採の量は少なかった。当時はスタロン河そして黒河の水で下流へ木材を流したり、ヤクをつかって運んだりしていた。それでも、黒河が伐採された樹木で一時つまるくらい多いときもあった。後になって、その量は急激に増えた。1970年代に入り林場専用の道路ができてから大量な伐採が始まった。伐採の範囲も山の麓から徐々に山の奥そして頂上へと拡大していった。

1970年代以降、とりわけ1971年から1978年にかけてスタロンでの森林伐採はピークを迎えたという。木材を満載したトラックが毎日100台あまりのペースで木材を運び出していた。原始林であるためスタロンの木は他の林場のとは違ってとても太くて高い。1本の木は1-2立方メートルの木材になる。そのためかスタロンの木は最も人気が高かったといわれる。当時つかわれていた「解放車」というトラックでは一台あたりにおよそ5立方メートルの木材を載せることができた。したがって、毎日100台であれば500立

方メートルの木材、つまり毎日約 250-500 本単位で原始林が伐採されていたという計算になる。

そして、この伐採は完全に無法状態で行われたわけではないようであった。当時を記憶する人の話によれば、1957 年に国の林業部の森林調査第 3 大隊の専門家たちがスダロンを訪れ調査した。専門家たちはスダロンの原始林の土壌はほとんど砂であり、木の根も浅いため、適当に樹木の数を減らさなければ山崩れになる恐れがあると指摘したとされる。

7.2 保護自然

「戦勝自然」とってかわって近年流行語となりつつあるのは、「保護自然」という漢語である。非日常漢語に弱いはずの牧畜民たちも保護自然という漢語を頻繁に用いており、言葉の意味もよく理解しているようだ。また彼らは自然保護という政策を大いに歓迎している。なぜなら彼らはこの政策によって、密猟したり樹木を勝手に切り倒したりするような外部不審者の数を減すことができ、ついで自分たちのこれまでの生活様式も保障されることだと確信していたからである。

1990 年代に入り、森林を大量伐採することが禁止された。そして、近年スダロン村においては森林や野生動物をまもることを目的とする「天保工程」(天然林保護プロジェクト)が実施されている。スダロン林場では、一定期間において樹木を伐採することを一切禁止することになっている。その樹木とは乾燥したものも含む。つまり現在生きている木は無論、倒れた木も林場の許可なしでは使用することが禁じられた。地元住民が乾燥した木を使う際に林場に報告し林場にお金を支払わなければならないことになっている。1 立方メートルは 390 元である。市場価格(約 800 元)に比べれば安いと林場の人はいう。

だが、この規定は現金収入の少ない地域住民の日常生活に不便をもたらした。例えば彼らは牧地を囲む金ネット張りに使う杭を自分の森から調達することになっているが、杭になる乾燥した木を自分の森からとるときに、1 本あたり 5 元を林場に支払わなければならない。こうした日常生活の不便に加えてより地元住民を動揺させるものがある。それは自分たちが今後もはや自然保護事業における厄介者として扱われるのではないかという不安である。その不安を引き起こしたのは、環境保護という名のもとで行われている生態移民に関する情報である。

肅南県において生態移民はすでに行われているが、具体的にスダロン村民に関して、実際生態移民の対象になるかどうかは正式な通達などはまだ下されていないようである。そういう意味で村人の不安は一種の噂によるものともいえよう。しかしながら、その噂がもつ現実的な影響は大きい。多くの牧畜民は 1960 年代以来定住しており、平屋を建てることが不可欠である。交通の便の悪いスダロン村の住人にとって建築材料を仕入れることは巨額の出費を意味する。家を建てようとするればそれなりの決心を必要とする。多くの牧畜民は現在決心できないでいる。彼らはそのジレンマを次のように言う。

もしこれから我々も生態移民の対象になってしまったら、我々はこの地をたたなければならぬ。
しかも現在の流れをみれば、我々はいつ故郷を退去させられてもおかしくない。いまは待つしかない。しかし問題はいつまで待てばいいのかである。

長期的な家族計画を立てず、定住生活をしはじめてから現在までほぼ 30 年 40 年間にわたって、当時に建てられた住宅で生活を営む住民が多い。その住宅は自然老朽化している。現段階では強制的ではないものの、明花区やバヤン郷などで設置されたあるいは設置する予定の「農業開発区」への移住を地方行政が彼らに勧めているようである。そのため、多くの住民は「この調子で後 5 年もたたない内に我々はこの地から転出しなければならないだろう。生態保護・森林保護・野生動物の保護などを提唱する政府は必ず、

スタロンで自然保護区を作るだろう」と推測する。そこで、「我々牧畜民は先祖代々家畜と伴に生きてきた。これから農民、商人、労働者になれというのだ。しかし今まで稗でさえ植えたことのない我々にそんなこといってもしよせん無理な注文だ」と、今後の生活に希望をもてなくなった人々は不平を漏らす。

8. 「迷信」と自然

これまで地域住民のもつさまざまなタブーに基づく信仰や慣習などが一種の迷信だとされてきた。しかしそうではない科学的な思考に基づいて行われた「開発」の限界と危険性が顕在化し、「保護」の側に方針転換せざるをえなくなった。保護の波においては「迷信」に基づく文化をもつ人間たちは過去と現在における自然と人間の関係にどのように言及しているのか。彼らの諸言及から我々は何をえることができるのか。

8.1 住民が語る自然保護

「戦勝自然」の時代においてあたりまえな言い方として成立していた「迷信」という言葉は、最近それほどあたりまえではなくなった。一体何が迷信だったのか。迷信ではない自然との付き合い方のほうが本当に人間のためになったのか。こういった問題を提起しているかのように思わせる地域住民の語りが多く見聞できる。

チレン県野牛沟郷は金・銅・玉石・石炭などの自然資源に恵まれていた。しかし改革開放以降、回族や漢族の農耕民たちの「開発」によって、地域社会の環境状況が著しく悪化したと地元のモンゴル族住民は述べた。

やつら（回族や漢族の農耕民）は金を掘るため川の水そして泉まで汚したりする。彼らがあらわれる前、この地はとても豊かで、草も高かった。しかし金鉱開発が始まってから、我々の土地に大きなダメージを受けた。「オス・ニ・ハーン」（水の神）が怒ったので、ウラーン・オス（赤い水）を流す（洪水氾濫）。雨もまともにくれなくなった。酷い場合は旱魃になる。草も生えなくなる。人間（の手足）や家畜の病気も増えた。野生動物のグロース（キバノロ）も、ジャール（ジャコウジカ）もほとんど彼らに絶滅された。「冬虫夏草」などの薬草や玉石も掘られたため、草原は穴だらけになった。土地は元来の見目形「ガジル・イン・シンシ singsi」を完全に失った。やつらがこの地の「エルデニ」（宝）を奪いすぎたため、土地はこんな風に貧乏になった。

モンゴル族の地元住民の話によれば、それらの回族や漢族の農耕民たちはさまざまところから来る。県内の八宝郷の者もいれば、他の州から来る者もいるという。そして地元住民たちは、現在地域が貧困化しているのは、その土地にあった宝がなくなったからだと説明する。バヤン郷においても近年旱魃が続く。昔は夏一週間連続して雨が降ることもよくあったが、1980年代以降は数分間しか降らないときが多くなったとみられる。その主な理由は、金や石炭など地下資源を開発したためであり、特に金を掘り出すことによって、土地のシム・テジェル（栄養）が失われたためだと地元住民は説明する。

「宝」も「栄養」もそのいずれもほとんどすべての人間にとって良いモノである。しかしながら、自らそれを占有していいのかどうか、すべきかどうかに関してはすべての人間が共通の認識を持っているわけではない。良いモノだから我が物にするのは当たり前（そうしないあるいはそれができないのがその人の能力の問題だ）という考え方もあれば、良いモノだからこそそれに手を出してはならない（手を出してしまうことはその人格が根本的に問われる悪いことだ）という認識もある。回族や漢族の農耕民たちのした

ことは、地元のモンゴル族の人間にしてみれば、悪いことである。では農耕民たちはなぜそのような悪いことをするのかに関して、地元のモンゴル人たちは「やはり我々（牧畜民）と違ってやつらには、『土地をひらいてはいけない』（ガジャル・マラタホ・ウグイ）というしきたりが無いからだ」とその理由を説明する。

他方、森林開発と環境保全の変化期におかれているスタロンの住民は生態移民になることを恐れ、とりわけ「過度放牧」といわれることに激しい拒絶反応を示す。なぜなら、「牧畜民がいるため家畜がいる。牧畜生活を維持するため家畜が増えた。家畜の量的増加により森林草原が破壊され、生態圏がアンバランスになった。したがって、生態圏のバランスを維持するためには森林草原の破壊を食い止めることが必要である。そのため家畜の数を制限しなければならない。そのため牧畜民を移住させてなければならない」というのが生態移民政策の論理だからである。

この論理においては、牧畜民は自然との対立的存在として位置づけられている。しかし自然保護の厄介者として位置づけられたスタロン村の牧畜民たちは「森林の破壊は牧畜民のせいではない」と否定する。その理由を彼らは自分たちの慣習に求めながら次のように説く。

我々にとって人間の命はせいぜい 100 歳前後ものだが、樹木などは数百年も長生きする。我々には長生きするものに手出しすることはできない。

そして、彼らは森林破壊の理由やその森林破壊が地域全体の自然環境や住民生活にもたらした影響を以下のように述べる。

もし林場や林場道路がなければスタロンの森林は依然そのまま残っているはずであり、我々の生活も豊かなはずだった。しかし現在、森林が減ったため山崩れが発生し、降水量も減った。雨が減ったため牧草も枯れている。今我々は乾燥した木を使うことにも金を払うことが義務付けられている。しかし生きていた木を大量に倒した林場はなぜ責任を取らないのかと我々は林場の人間にも言ったが、彼らは、林場は当時国の指示にしたがっただけだというのだ。

さらに大掛かりの森林伐採が行われはじめた 1950 年代以前の状況と比較しがなら老人たちは、森林破壊と野生動物の減少の因果関係について次のように述べる。

その頃（1958 年以前）ここの山々には多くの野生動物がいた。熊や狼など肉食動物も常時出没するため、地元の人間は夕方頃になると 1 人での外出を厳しく制限していた。そして樹木が密集していたため森の中に迷って行方不明になる人もいた。現在山が禿げ人間は迷うことはなくなったが、鹿や野生ヤクなどは姿を消した。

上記の住民の語りを総合すると、彼らが言わんとしていることのポイントは 2 点である。まず環境問題は「過度放牧」によるものという言い方は歴史的にも現実的にも誤りである。そして本当に自然を守っているのは彼ら「迷信」と言われていた慣習をもつ牧畜民である¹⁰。

¹⁰ 山火事防止や野生動物保護を主な仕事とするスタロン林場スタロン護林駅の護林員の話によれば、いままでも森林を伐採したり密猟したりする人間は地元もヨゴル人ではなくほとんど外部からの連中だったという。また彼ら今は 6 人だけで広い森林（3 万公頃）での火事や密猟などを防ぐにはやはり地元の人の

8.2 「迷信」と自然保護

住民たちの上記の語りを我々はどう理解すればいいのか。無論、自然破壊はだめ、自然保護はよいと人々がいつているのだと理解してもいい。そうであるかもしれない。しかしながらたとえそうであっても、それは彼らが自ら犯した過ちに対する反省ではない。彼らは自然保護の時代を歓迎している。その理由は彼らが破壊より保護のほうがよいという道理に始めて気付いたからではない。そうではなく、保護の時代においてはじめて彼らに話すチャンスが訪れたからである。それまで「迷信」とされてきた自分たちの諸々のやり方が実は自然のためになっていたということを言明する可能性がみえたからであり、自然に対する謙虚さに自信をもつことが彼らの今後の生活にとっても重要だからである。

もし前節での語りは自分たちのやり方が正しかったということを立証するためのネガティブな事例であったとすれば、ポジティブなものもある。例えばヨゴル族地域においては、人々は過去におけるヨゴル人たちの土地所有制度について次のように語ることがある。

昔我々ヨゴル人地域において土地（ガジャル）の所有形態が3種類あった。ひとつは部落（ドゴ）、ひとつは寺院（キーディ）、もうひとつは個人の所有である。個人所有の部分には民衆（アラバタ）と大頭目（ノヤン）が含まれる。大頭目は土地所有の面においては特権がなく、ほとんど一般民衆と同様であった。政治的に大頭目は権力を持ち民衆を管理するが、経済的に民衆は各自の土地を持ち、それを管理していた。今風で言うと人民は王のもので、土地は人民のものであった。その土地の樹木（モドン）も草（エブス）も個人のものであった。しかしながら、環境問題はなかった。

彼らのいつていることには当時土地が私有であったにもかかわらず自然はよく保護されていたというニュアンスが含まれる。ではなぜ土地私有の時代において自然が守られていたのか。それは個々の人間にはタブーそしてツェタルなどの信仰があったからだと解釈される。そのことを裏付けるように、人々は現在、「ツェタル」などといった信仰や習慣の現実社会生活における積極的な意味を次のように説明する傾向がある。

我々（つまりチベット仏教を信仰するヨゴル族の自分たち）は、信仰によって自然を昔から保護してきた。誰もが自然を守らなければならない運命にあった。それは現在の自然保護法などとは異なる。法律は強制的なもので、摘発されたら違法者は罰されるが、そうでない限り人々は依然法律を破ろうとする。しかし、我々の習慣や信仰はすでに我々の頭の中染み付いた。誰かにいわれなくても、自分の命を守るように自然を守ってきた。

これは「自然を保護するというならば、我々の迷信とされてきた文化も尊重してほしい」というようにも解釈可能な話である。といっても、彼らはことさら、自分たちと国家の論理とを対立させようと説明的にしているわけではない。国の政策や法律などを十分に意識しながら自らの慣習を位置づけようとしていることから分かるように、むしろ彼らの考え方は現実的である。例えば、スダロンにおいて住民たちはこれから避けられないであろう生態移民問題をめぐって知恵を絞った末、次のような案を考え出している。

力を借りるしかないと認める。

林場の護林員は国家の幹部だから彼らは他のほかの地域で働いても問題がないはずである。しかし我々地元の人間はこの土地に残るしかない。自然保護のために我々はなるべく家畜を減らす。例えば、いままで羊を100匹飼っていたとしたら、これからは50匹までに減らす。その50匹は牧畜生活をすぐ放棄することが困難な老人たちに任す。若い世代は護林関係の仕事につき、全精力を自然保護に注ぐ。我々は林場の護林員より土地のことを知っている。我々こそ護林員の職に適している。そうさせてもらえば我々もこの地を離れずに済む。これは仕方のない仕方だ（次善の策に過ぎない）が、しよせん牧畜生活を捨て労働者にならざるをえない運命にあったのであれば、我々はこの地に残って森林を保護するための労働者になる道を選びたい。

前節で述べたように、生態移民政策の論理においては、牧畜民は自然との対立的存在として位置づけられている。対立の根拠として「過度放牧」という要素があげられている。文字通りに分析すれば、問題としてあげられているこの要素の根本は「放牧」ではなく、「過度」にあるということになる。つまり問題となるのは牧畜という生業形態の性質ではなく、家畜の量という程度の問題である。

無論スタロンの人々は自らを自然の対立項として位置づけ、自然に害を与えるものとして認めてもいなければ、自然保護に貢献できる存在として自負していたわけでもなかった。しかし生態移民にまつわる大きな論理、そしてその論理に支えられている身の回りの社会現実、制度を無視することはもはやできない。こうした論理、現実、制度との折衝の中で、彼らは自分たちの生活様式や慣習を「科学」的に解釈することに至り、また現に林場の護林員になりたいという実現可能な方法を模索している。

しかしながら、林場側の説明によれば、護林員の招工（募集）は国家の統一試験を通して行われており、戸籍上農耕民や牧畜民はその例外となるという。つまり現在では、国家の幹部ないし企業労働者という枠内（職工指標）で募集が行われているため、牧畜民である地元の人間には護林員になる機会はない。そうした状況のなかで上記のアイデアがどの程度まで地方行政に考慮してもらえるかは課題として彼らに残されている。

1950年代以来チレン地域において森林などに対してさまざまな開発が行われてきた。その開発の特徴は、「略奪的」といえなくもない。1990年に入ってから森林などは、保護の対象となった。前者は「戦勝自然」、後者は「保護自然」の認識のもとで行われたものであり、両者は相反するかのように見える。しかしながら、この自然保護つまり「人間は自然を保護するべきだ」という認識は、そもそも人間と自然は異なる、（ほとんどの場合は）対立項に位置する存在であるという観念に基づくものである。そういう意味で政策論的な議論を別とすれば、自然を「守る」こともそれに「打ち勝つ」ことも同一観念に基づく行為であり、同一観念の時代に応じた異なる現われである。

他方、第三章であつかった諸々の伝説やタブーに代表されるように、地域住民は木を倒すことを人間を殺すことに等しいと認識し、自然と人間をほぼ同一視する文化をもつ。彼らは自然を「敵」としてみてもいなければ、守るべき「相手」とも考えていない。それゆえ、彼らの自然に対するこの謙虚さが彼らの自然に対する無力さつまり「迷信」だと認識された。「自然観」という言い方が彼らのなかでも成り立つとすれば、彼らの「自然観」の特徴は自然を客体化しないという点にあり、結果的に自然に対する人間の欲望を制御する機能を果たすといえよう。ただし地域住民は現在、「保護自然」の論理によって自然の対立項として位置づけられている。彼らは自ら正しいと確信する生活様式と不可分の環境基盤を失うことを危惧する。そのため、彼らは自らがおかれる現実に妥協しつつ、外に向かって「迷信かもしれない」という前置きで自分の信仰や慣習を説明し、それらがいかに自然保護に有効であることを強調することで、その地にいられるあらゆる可能性を模索している。

おわりに

冒頭にも述べたように本報告書は主にインタビューでえたデータに基づくものであった。そういう意味で本報告書は地域社会住民の声を調査者なりに理解し整理したものにはすぎず、バランスよく全体状況を把握するには文献資料の側面からさらに複合的に検証すべきであろう。また、黒河上流地域の主要な住民が生業的に牧畜民（信仰的にチベット仏教徒）であるため、今回の調査は主として彼らの論理を扱うことになった。しかしながら、彼らとは異なる生業を営む人々が、彼らと隣接する中流地域に居住し、彼らの論理は黒河流域全体の人文社会と自然環境に与える影響は看過できない。そのため、中流地域において人口的、文化的に圧倒的な優位にある農業を営む漢族住民に対する調査が不可欠であろう。したがって、今後は文献と肉声、異なる生業に携わる人間の論理を比較検討しながら、「黒河民族誌」を段階的に組み立てていくつもりである。

引用文献

海北藏族自治州地名委員会弁公室編

2001 『青海省海北藏族自治州地名誌』（内部資料）

甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会

1994 『肅南裕固族自治県誌』甘肅民族出版社

シンジルト

2003 『民族の語りの文法：中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社

2004 「モンゴル人と1950年代のチベット『反乱』」『現文研』80号：40-54、専修大学現代文化研究会

利光有紀

1988 「毛を刈らない去勢山羊の話」『民博通信』第39号：28-36、国立民族学博物館

付記：チレン県や肅南県などでの調査期間中、衣食住行・情報提供などの面において、調査者はドルジ氏、テムル氏、ホアンジンリ氏をはじめとする多くの方々のお世話になった。記して感謝する。

Project Report on an Oasis-region

Vol. 4 No.1

June 2004

総合地球環境学研究所

研究プログラム（歴史時間軸）

「地球環境変化と人間活動の相互作用の中で、何がなぜ持続し、何がなぜどのように変化したかの歴史的検証」

To demonstrate sustainability and transformation by examining historical and temporal processes of interactions between global environmental changes and human activity.

研究プロジェクト

「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷」

Historical evolution of the adaptability in an oasis region to water resource changes

編集：小長谷有紀・市田皓一郎

発行：オアシスプロジェクト研究会

出版：総合地球環境学研究所

Research Institute for Humanity and Nature
